稜線、その他

u_

稜線

　北側の大きな窓の中に、幅の広い白っぽい葉を繁らせた木々に覆われた、なだらかな形をした山が、手が届きそうな程、間近に迫って見えた。庭に背を向けていたが、その稜線を目で辿っていると、庭から出て行った人が、指輪を落として行ったのが分かった。空の桶を二つ抱えた女が、上がり込んできた。私は、ゆっくりと庭の方を向いた。山の明るさに比べて、庭はずっと暗かった。女は、窓の横のボロボロの木のドアを静かに開けて出て行ったが、私の直ぐ側に、小さな濡れた板切れを落としていった。ドアは直ぐに静かに閉められ、窓越しに女の声が、何を言っているのか分からないが、聞こえてくる。窓に近付こうと腰を浮かすと、山の色に少し黄味が混じるようで、その新しい色がちゃんと目に馴染むまでは、一歩も窓辺に近寄れないように思えた。

　庭を振り返ると、もう空までが薄暗くて、その空を見上げながらそちらに身を乗り出すと、殆ど這うようにしていた。女が落としていった濡れた板切れの

上に、左手を付いている。それが急に床の上を滑り、私は、前にのめって床に腹這いになりそうになった。しかし、倒れ込むに違いない角度のまま、体は止まっている。誰かに後ろから抱き抱えられているのか。首を後ろに向けて捻ると、私の右腕が、天井に向かって真っ直ぐに延びていた。何かを掴んでいるに違いないが、手首から先は、ギリギリ死角に入って見えない。

板切れの上の左手がグルグルと震えた。板切れは、愈愈ヌルヌルして、その水気が床に染み出すようだった。ドアがやや乱暴に開けられる音がして、女の大きな声がした。私の方に回り込んできた女は、両脇に一つずつ、水の入った桶を抱え、足取りがやや覚束ない。女は、片方の桶を置き、もう片方を抱えて、庭に降りた。置いて行った桶の中を覗き込むと、天井に向かって延びた私の右腕が映り込んでいる。その手は、何処か透き通っているようで、天井の表面を、しっかり鷲掴みにしているようだった。水の表面がすっかり静まるのを待って、そこにはっきりと映し出された、鉤のように曲がった指を一本ずつ伸ばして、天井から手を離した。

私の姿は、消えていた。女が戻って来て、置いて行った桶を抱えて、また庭の方に向かう。床には、水の染みた跡が残るだけで、濡れた板切れも見当たらない。大きな窓はそのままだが、そこに何が見えているのだろう。庭に、指輪を落として行った人が、傾いた枝折り戸を開いて、戻って来た。庭の真ん中は、

大きな穴が開いていて、そこに女は、二つ目の桶の水を流し込んでいる。穴の中には、かなり水が溜まっていて、ジョロジョロと重い音がした。庭は、手入れのされていない生け垣に取り囲まれていて、尖った枝が、あちこちから突き出ている。それにばかり気を取られると、穴に落ちる。

女は、長い木の棒を穴に差し込んで、掻き回した。直ぐに、穴の底から、雲が湧くように真っ黒な泥が浮き立ち、すっかり濁った水の表面に、金色の指輪が、一瞬浮き上がった。指輪を落として行った人は、片手で曲がりくねった枝を掴んで、穴の中に降りて行こうとする。女は、知らん顔で、空の桶を二つ抱えて、また部屋に上がり込んできた。水の染みた跡に気付いて、その前で立ち止まった。

指輪を落としていった人は、女がそのままにしていった長い木の棒を掴んで、女がしたように、穴の底を掻き回した。指輪ではなく、私が掴んでいた濡れた板切れが浮かんできた。私は、それを、遠い窓の奥に、部屋越しに、見ていた。それなら私は、山の何処かに居る筈だ。女は、床の、水の染みた跡の前で動けなくなっている。どうしてそこにそのような跡が付いたのか、気になるらしい。指輪を落としていった人が、棒の先を巧く操って、板切れを引き上げた。

私は、山の何処かから声を掛けた。声は、庭の上の暗い空を跳ね返って、女の耳に届いた。女は、振り返って、指輪を落としていった人が手にしている板

切れを見た。それは、桶の内側が剥がれたもののようだ。桶の内側を見ると、それらしい窪みが見付かる。かなりの深さで剔れたようになっていて、ちょっと指で押せば、桶の表面まで突き抜けてしまいそうだ。おいそれと直せるものではない。桶を替えるしかなさそうだ。指輪を落としていった人が、女に気付いて、その板切れをどうしたらいいか、尋ねた。

私はまた、山の何処かから声を掛けた。声は届いたと思う。女は、その人の問いには答えず、山の方を振り向いて、窓の横のボロボロの木のドアを静かに開け閉めし、外に出た。桶は、二つとも部屋に置いてきた。山の色はもう、深い橙色をしていた。山全体は、びっしりと葉を繁らせた木々に覆われていたが、山の中に入ってしまえば、下草の背は低くて疎らで、剥き出しの濡れた地肌に滑らないようにしなければならない程だ。

その中腹の泉に、女は直に辿り着き、そこでやっと桶を忘れたのに気付いた。しかし、もう水を汲んで戻る理由もないように思われて、そこから更に登って行った。木々の幹が段々と太くなり、その間を湿った風が吹き抜ける。草は全く見えなくなって、うっすらと生えた苔に何度も足を滑らせ、見上げると、もう全く登れないようにも思える。ただ立ち止まるのさえ、難しい。しかし、木の幹に縋る気にはなれなかった。それをしたら脚が弱って、愈愈動けなくなるようでもあったし、木の幹は、その太さの割りには、根元が妙に貧弱で、ただ

泥濘の上に乗っているだけのようにも見えた。
　女は、地面にそっと片手を付いて、後ろを見下ろした。急な傾斜の数メートルばかり下に、泉が見えた。ほんのそれっぽっちしか登ってなかったのか。また別の泉かと思える程だった。そこへ、指輪を落としていった人が、泥の付いた棒を担いで登ってくる。どうやら、女のようだった。剥き出しの長い脚は、殆ど筋肉が付いていないように細い。そんな脚で追い付いて来られたのは、棒を担ぐ事で、巧くバランスを取って来たからだろう。
　その細身の女は、泉の前で立ち止まり、地面に突き刺した棒から手を離して、泉を覗き込んだ瞬間、水に呑まれて、影も形もなくなった。どうして、水が滾々と湧き出す中に呑み込まれてしまうのか。それを見ていた女は、腰を屈めて、泉まで一気に滑り降りた。水はもう、湧き出なくなっていた。高い方からそっと覗き込むと、クルクル回る手だけが見えた。中指に指輪が嵌っている。水が、その指輪を欲しがったからだろうと、女は勝手に納得した。棒を担ぐと、滑り易い斜面も、軽い足取りで登って行けた。
　急に明るく開けて、山頂だった。その先の北側の下りは、打って変わってずっと草叢が続き、麓に、南側とそっくり同じような小屋がぽつんと建っている。後は、その上に薄ぼんやりとした高い空が拡がるだけだ。振り返ると、直ぐ真上の木々の葉裏が、濃い紅色に透けていた。山頂の、森と草叢の境目は、岩肌

が剥き出し、そこに円い小さな水溜まりが出来ている。表面まで淡い緑色に濁って、大きさを問わなければ、古い池のようだった。その直ぐ脇に、それまで見た中で一番大きいかも知れない木が、曲がりくねって傾いて、重そうに葉の茂みを支えている。その木の影を映す水の縁辺りから、私の声は出ていただろうか。しかし、女の目に触れてしまっては、もうそこには、何もなさそうだった。

　女は、棒を水に突っ込んで掻き回そうとした。中は、藻でも生えているのか、ドロドロしていて、棒は、少ししか入らずに、上の枝に引っ掛かって動かせなくなった。女は、一度棒を水から抜き、膝に当てて真っ二つに折り、その片方だけをまた突っ込んだ。するとそれは、スルスルと入って、その端を掴む手が水に触れても手応えはなく、肘の辺りまで水に沈めても、まだ入って行きそうだった。しかしこんな恰好でいたら、さっきの女の二の舞になりかねない。腕を引き上げようとすると、すぐ間近の水の表面に、その水に呑まれた筈の女の立ち姿が映った。女は、思い切って、二の腕の途中まで水に入れて、それから直ぐに引き上げた。

　その際に、手応えが感じられたようだった。緑色の水に映る女の姿が、少しずつ、奥の方へと遠ざかって行く。恐らく、棒の先が、薄い水底を突き破ってしまって、そこから水が抜け落ちて行くに違いなかった。森がざわついた。直

ぐ脇の大きな木が更に傾くようだった。水溜まりの水が、山腹の地下に浸み入って、森を浮き上がらせているのではないか。森は、丸ごと山の斜面から滑り落ちて行くのではないか。水の抜けた穴は、楔を打ち込んだような形で、とても狭くて見窄らしかった。女は、体を起こして、細身の女の方を見た。

「もう山から泉は湧かないんだね。」と、その濡れた女は、指で髪を梳くようにして、細く甲高い声で言った。指輪を嵌めていなかった。

「水の中に落としてきたの？」と、女が尋ねると、細身の女は、折られた棒の一本を取って、口を大きく開いて笑顔を作り、草叢の斜面を転げ落ちていった。両手で掴んでいる棒を芯にして、まるで車輪が転がって行くように、楽々とそこを降りて行けるようだ。女も、それを真似て、棒をしっかり握って、後に続いた。

麓の小屋に着くと、窓の横のボロボロの木のドアを静かに開け閉めして、二人は中に入った。その先の庭の窪みから、水が湧いていた。私が声を上げると、二人の耳に直ぐに届いたようだった。それに導かれて、二人は、小屋の中に積まれた真新しい桶を二つずつ持って、庭に出て水を汲んだ。南側の大きな窓から、山腹を覆う草叢の深い青の上の赤黒い輝く稜線が、ずっと遠ざかって行くように見えた。二人は、桶の取っ手に棒を通し、天秤棒を担ぐようにして、小屋を出て、山頂まで揃って一息に登り、桶の水を、穴に落とし込んだ。とても

足らなかったが、女は、底に水が溜まるのを見て安心した。
　細身の女の方はもう、空の桶を草叢に放り投げていた。そして、自らはまた、棒を芯にして、その転がる桶を直ぐに追い越して、斜面を下っていった。桶は、その女の後を追うように、転がって行く。それを見た女も、直ぐにそれを真似て、また麓の小屋まで降りた。
　三度、往き来して、やっと穴は、水が満ちた。もちろん透き通っていて、その深い底に、キラリと光るのは指輪かも知れなかった。細身の女が、両腕を真っ直ぐ上にピンと伸ばして、少し胸を反らすと、その体の線は、益々細く見えた。そして、その体は、そのまま足から水に入って消えた。葉裏から透けていた紅色は収まって、空を見上げる限りではまだすっかり夜ではなかったが、森の中は、真っ暗だった。桶も棒も草叢の方に蹴飛ばして、独りになった女は、その暗い森を下って、南側の小屋を目指した。途中、泉からは、突き上がるように水が湧いていた。
　窓の横のボロボロの木のドアを静かに開け閉めして、中に入ると、その先の庭の大きな穴は、すっかり埋まっていて、空は余程暗いのに、そこに、尖った青い草がびっしり生え揃って、細かな白い花を疎らに咲かせているのが、はっきり見て取れた。私は、庭に背を向けていたが、北側の窓の中の、手が届きそうな程間近に迫ってくる、星空に接する真っ黒な稜線を目で辿っていると、左

手の中指に指輪を嵌めた細身の女が、濡れた体のまま、枝折り戸を開けて庭から出て行くのが分かった。左手が、枝折り戸から離れた瞬間、その姿はもう闇に溶けた。床の染みは、何時までも濡れていた。（二〇〇二年八月三日）

＊　＊　＊

釘

昨日は、人が沢山出て、夜遅くまで踊っていた。今日は、そこに、ぐるりと灰色の幔幕が張られている。その真ん中で、三人の丸々と太った黒い男達が、痩せた白い男をねじ伏せて、その棒のような体を、釘で地面に直に打ち付けようとしている。頭が地面に押し付けられ、こめかみに釘が当てられた。私は、席を立ちたかったが、手にしている大きな湯飲みの中の熱いお茶が、今にも溢れそうで、体を動かせない。お茶を飲んでからでなければ、目を逸らすのは許されないと、予め決められていただろうか。お茶は熱すぎて、唇を触れるのがやっとだ。横にされた男の、もう震える事もやめた白い背中を、見詰めるしかない。

隣の誰かが、私に耳打ちした。私は、湯飲みを膝のお盆の上にゆっくり置い

て、手を挙げた。黒い男の一人が、それを見付けて、近付いて来た。側で見ると大男だ。彼は、私の膝の上の湯飲みを取って、熱いお茶を飲み干した。また、隣に耳打ちされた。私は、立ち上がって、湯飲みを男から受け取り、泥濘の上にジグザグに渡された、細い板の上を伝って、幕の出入り口まで来た。その辺りに、何人かウロウロしていたが、誰も私に注意を払わないようだった。

　そこを出ると、その幕を、また同じ灰色の幕が取り囲んでいる。その二重の幕の狭い間を通って行くしかない。その行き止まりは、ベニヤ板で囲まれた狭い部屋で、女が一人居て、大きな手をこちらに差し出した。湯飲みを渡すと、湯飲みを渡したのは、私ではなく、私に耳打ちした誰かだった。部屋には、その二人しか居ない。湯飲みには、白い男がその頭と胸と腹に黒い釘を打ち込まれている絵が、いっぱいに描かれている。ただ絵と言っても、白と黒の線が、荒っぽく引かれているだけで、幕の中で行われている事を知らなければ、ただの模様にしか見えないだろうか。女は、そこに、熱いお茶を、いっぱいに注いだ。

　それを受け取った者は、お盆に乗せて、また幕に挟まれた通路を通り抜け、泥濘の上の板を伝って、元の所に戻った。黒い三人の男は居なくなっていた。白い男は、その頭と胸と腹に釘を打ち付けられて、地面に横になっている。お茶は、やはり熱くて飲めないが、それをお盆に乗せれば、白い男の方に近付い

て行けた。それは、白く太い線で描かれただけのものだった。黒い釘だけが本物で、白い線の上に突き立てられている。隣の誰かが、耳打ちした。

耳打ちしたのは、どうやら私のようだった。その私は、更に耳打ちして、女が呼んでいると、嘘を吐いた。耳打ちされた方は、私に湯飲みを渡して、お盆だけ持って、泥濘に渡された板とは別の方へと、ふらつきながら身を翻した。去り際に、「湯飲みに描かれた絵から目を離すな」と言われた。言われた通りにしたが、その絵柄は、私には、何だかさっぱり分からなかった。それを隅まで見るために、私は湯飲みを傾けていて、湯飲みの中のお茶が、地面の白い線の上に、大分零れてしまっていた。線は、濡れて滲むどころか、却って白く際立ち、微かに動いた。それは、男を描いた線ではなく、地面に平らに埋め込まれた、本物の男の体に違いなかった。残りのお茶を、男の口に含ませると、頬から喉に掛けて、レリーフのように浮かび上がった。地面から男の体を取り出そうと、自分も横になってそれに抱き付くようにしたが、巧く行かなかった。

誰かが、私に耳打ちした。湯飲みの絵柄を見直すと、何が描かれているか分かった。先ずは、打ち込まれた三本の釘を抜かなければならない。

三本の内、どの釘から抜こうか迷っていると、また誰かに耳打ちされた。湯飲みの底に、黄色い花びらが、何枚かこびり付いている。私は、それを指に掬い取って、半開きの男の白い唇の中へ滑り込ませた。男は、微かに顎を上げて、

私が飲ませたお茶を吐き出した。湯飲みを当てると、少しも零れずに、吐いたものは湯飲みの中に流れ込み、覗き込むと、ほんのりと赤かった。一緒に吐き出された花びらも、赤味を帯びていた。私は、その湯飲みを持って、体を起こそうとした。

　私より先に、白い男が、起き上がり掛けた。釘は、薄っぺらな体を貫いたままだ。私が、その釘を三本共、素速く引き抜くと、男はその場に倒れ、また白い線に戻ってしまいそうだ。慌てて、それを抱き抱えた。誰かが、私に耳打ちした。私は、男の吐いた赤いお茶を、また男の唇に流し込んで、泥濘の上の板を伝い、幕に挟まれた通路を通って、女の部屋に行った。女に湯飲みを渡すと、渡したのは、私ではなく、私に耳打ちした誰かだった。女は、湯飲みの底を覗き込み、萎れた花びらを指で掬い取って、それを口に入れ、暫くしてから、その唾でドロドロになったものを、湯飲みの中に吐き、そこに熱いお茶をいっぱいまで注いだ。それを渡された者は、湯飲みの中を覗き込んだきり、動けなくなった。

　私は、三本の釘を抱えて、三人の太った黒い男に追われていた。男の一人は、手足を折り畳まれた痩せた白い男を、さも軽そうに片腕に抱き抱えていた。周りでは、女達が、お茶のための花を摘んでいて、追う方も追われる方も、その花の株を乱暴に踏み付けていたが、誰もそれを気に留めないようだった。ただ、

女達は、花に手を伸ばして身を乗り出す度に、隣と何か耳打ちし合っていた。その声が、時々私の耳にも入ったが、話しの中味は、私の全く知らない事柄のようだった。その内に私は、花の踏み付けられた所ばかりを走っているのに気付いた。知らずに、花畑の中に道を作ってしまっていて、同じ所をグルグル回っているらしい。私は、その道を逸れて、花の中に身を隠した。男達は行き過ぎたが、直ぐに私を見失ったのに気付いたようで、別々に花の中に消えた。そうなっては、私は何時、男の一人に、後ろから羽交い締めにされるかも知れない。辺りに気を配りながら、何処に向かう当てもなく、這い蹲って花の中を進むしかなかった。

やっと花畑から抜け出ると、そこに座り込んだ女達が、黄色い花びらを千切っては籠に入れていて、丸っこい蕚ばかりが、その脇で山になっている。その蕚の山の後ろに身を潜めて、花畑の方を見ると、何十人もの太った黒い男達の姿が、花畑の中を動き回っているのが見て取れた。彼らは、花の株を踏まないよう、足元に気を配り、近付く度に、耳打ちし合っていた。そう言えば、私が耳打ちした相手は、何処へ行ってしまっただろう。女が呼んでいると嘘を吐いたが、嘘でなくて、一体何を耳打ち出来るだろうか。男達も、互いに嘘を耳打ちし合っているのではないか。

誰かに耳打ちされた。見ると、私が嘘を耳打ちした相手だった。その者は、

私に空の湯飲みを差し出して、そこに描かれた絵の説明を、小声で始めた。私は、白い男が釘で地面に打ち付けられる訳を知りたくなって、耳を傾けたが、その説明は、頭、胸、腹によって、その釘の打ち付け方が全く違っていて、そのそれぞれの注意点を細かく並べ立てるばかりだった。退屈しのぎに、湯飲みの底を覗き込むと、萎れた花びらが、乾き掛けてこびり付いている。何時の間にか、その湯飲みを受け取っていて、私は、指を突っ込んで、赤味を帯びた花びらを刮げ取ろうとした。説明を終えた相手は、私の側に転がっている三本の釘を重そうに抱え上げて、花畑の中に入った。その姿に気付いた黒い男達は、三々五々、花畑から去って行った。

私は、花びらを千切っていた女達に囲まれていた。その内の一人が、湯飲みの中に幾ひらか花びらを落とし、熱いお湯を注いだ。細長く丸まった花びらが、お湯の中でクルクル回り、黄色が映えた。底にこびり付いた萎れた花びらは、浮いてこなかった。私は、口を付けないまま、「熱すぎて飲めない」と言った。しかしどうやら、女達には、私の声など聞こえないらしく、何の反応もなかった。私は、黙って立ち上がり、お盆がないので、お茶が零れないように、そろそろと花畑の中に入った。誰かが花の株を踏み付けて作った、入り組んだ道に沿って、歩いて行った。

暫く行くと、疲れ果てた様子で、釘を抱えた者が、蹲っている。確かに、重

い釘を抱えていては、曲がりくねってばかりの道はきつそうだ。女が呼んでいると、耳打ちしようとした。そうすれば、立ち上がって、歩き出すかも知れない。それより早く、相手は、蹲ったまま首だけ伸ばし、私に耳打ちした。私は、湯飲みと釘を交換し、独りで、来た道を戻るしかなかった。

花畑から出ると、女達はまた、花びらを千切って籠に入れる作業をしていた。体を左右に揺らしては、隣と耳打ちし合っている。その声が、また私の耳に入ったが、やはり、話しの中味は、私にはよく分からなかった。私は、そこで、三本の釘を、自分の体に打ち付けようと思った。そうして、ずっと話しを聞き続ければ、何時かは、何の話しか分かるかも知れない。さっき細かく聞かされた、釘の打ち付け方が役立ちそうだ。すると急に、女達の話しが、分かってきた。白い男の事を話しているのだ。釘を握る私の手は、止まってしまった。私は、幕の中で見た事を、女に耳打ちしようとしたが、どの女も、首を振って、決して私に耳を貸さない。

私は、釘を抱えて、また花畑に入って行くしかなかった。湯飲みと釘を交換した相手は、同じ所に蹲ったままだった。もう釘は要らないと思って、湯飲みと釘を交換し、独りで先に進んだ。道は、散々折り返して、結局、花畑の中で行き止まりになり、そこに、太った黒い男が一人、私を待ち構えるように、仁王立ちになっていた。折り畳まれた白い男を、片腕に抱えている。湯飲みを渡

すと、黒い男は、その決して冷めないらしい熱いお茶を、一気に飲み干した。私は、湯飲みを受け取り、その底に張り付いた萎れた花びらを指で掬い取って、白い男の半開きの唇に突っ込んだ。また白い男が吐いたので、湯飲みで受けた。白い男の体が、ピクピクと動いて、生気が戻ったようだった。蹲っていた者が、三本の釘を抱えて、追い付いてきた。

「湯飲みの絵が何か、分かるか。」と、太った黒い男は、私に聞いてきた。私が頷くと、男は、私から湯飲みを取り上げ、地面に叩き付け、それが粉々になるまで踏み付けてから、その上に白い男を放った。

太った黒い男と釘を抱えてきた者と私と、三人で、一本ずつ、釘を白い男の体に打ち込んでいった。それから、私と釘を抱えてきた者は、太って大きくなった互いの黒い体を、見詰め合った。三人共、そっくりで、見分けが付かなかった。踏まれて横倒しになっていた花の株が、元に戻り、私達が来た道はすっかり消えて、一面花ばかりになった。（二〇〇二年八月七日）

＊　＊　＊

脇腹

カーテンを開けると、艶々した白い床は水浸しで、丸々とした青い魚が一匹、その上で跳ねていた。直ぐに、女は、自分がそれを見ているのを、誰かに見られてはいないかと、辺りに目を遣った。カーテンを引いて、またその後ろに隠れようとしたが、カーテンは重くてビクともしない。それならいっそ、カーテンから離れるべきだ。こうしてカーテンの側に居ては、いかにも、カーテンの陰から、床の魚を覗き見ているようだ。しかし、何処へ行けば良いのか。一歩踏み出せば、水浸しの床ではないか。覗き見どころか、魚が脚に絡み付いてきて、匂いでも付けられたら、もう白も切れない。

女は、魚に向かって唾を思い切り吐いて、少しでも魚を遠ざけようとした。カーテンの縁を握り締めて、それに体重を掛けていたので、頭の上で、レールと玉が擦れて、ギシギシと音を立てた。天井までが、ビリビリと鳴った。まるで、天井の表面には極薄い紙が貼られ、それが微かに浮いて震えるようだ。奥の方で、その天井に、四角い大きな穴が開いていて、その真ん中に、金色の華奢な螺旋階段が備え付けられている。そこまで行けば、水浸しの床から、上に登って行ける。床をよくよく眺め回すと、縁の方は濡れていない。そこを通って、天井の穴の下まで行ける。ただ、その床の縁に辿り着くには、初めの何歩かは、必ず水浸しの上を通るしかない。

足元を見ると、魚が尻尾を振り立てて、女の吐いた唾を、女の方に押し遣っ

ている。それは、ブクブクと泡立って、魚の卵のようにも見えた。女は、それを踏み潰そうとして、足を滑らせた。カーテンの縁にしがみ付いたので、倒れはしなかったが、更に体重が掛かって、頭の上のレールと玉が、凄い音を立てた。それは、床に撒かれた水を、縮み上がらせる程で、その脹れ上がった水の中を、魚が悠々と泳ぐようにも見えた。

　足元の唾の泡が、ピンク色に染まっている。脇腹から、血が滴っていた。カーテンの縁に幾つも縫い付けられている、鋭く尖った金属片に、腰を押し付けて、脇腹を切ってしまったようだ。唾の泡の中に、血の一滴一滴が入り込むようで、それらは愈愈、魚の卵に見えて来た。

　女は、血の付いている金属片を、一つ、カーテンから毟り取った。それは、少し歪な盃の形をしていて、削って形を整えた貝殻に金色を塗り付けたようにも見えた。それに付いた血を自らの胸で全て拭って、それを魚に投げ付けようとした。魚は見当たらなかった。水に潜っているだけで、直ぐにまた姿を現すだろうか。今の内だと思って、女は、直ぐに、出来るだけ撥ねが掛からないよう、脚を素速く振り上げるようにして、天井の穴の下まで真っ直ぐに走った。水から抜け出て、後ろを振り返っても、魚の姿はなく、水の表面は鏡のようだ。

　それを見て、女は、水を真っ直ぐに突っ切ったのを悔いた。濡れた床をよく見ながら、慎重にそこを回り込むべきだった。走っている途中で、魚が、女の

体の中に入り込んでしまったような気がして仕方ないが、もうどうにもならない。体中を撫で回して、魚の居場所を突き止めたとして、それをどう扱えるだろう。魚に触れれば、もっとひどい事になりそうではないか。

　螺旋階段は側で見ると、本当に華奢で、薄っぺらで幅の狭い踏み板の他は、殆ど針金を繋ぎ合わせて出来ているようなもので、何段か登った所で、グニャリと曲がってしまいそうだ。試しに、手摺りを揺すってみようと思うと、後ろに、足音と話し声が聞こえた。魚が何処に入り込んでいるか分からない体を、他人には見せられない。女は、階段を駆け登った。もし途中、階段が千切れて足場を失っても、羽根でも生えた気分で、一気に駆け登ってしまおう。実際、足を使うより、手摺りを手繰るように登っていた。それも、左手は金属片を握ったままなので、右手一本でだった。長い階段は終わり、飛び乗るように、その上の床に立った。螺旋を素速く回り続けたせいで、目が回っていた。

　見下ろすと、階段の踏み板の上で、丸々とした青い魚が跳ねている。血塗れで、辺りにその撥ねを振り撒いていて、手摺りが段々と赤く染まる。階段のずっと下の方まで、そんな風で、魚の数は数え切れない。恐る恐る脇腹を撫でさすってみたが、ツルツルしているだけで、傷口は探り当てられなかった。二人組が、階段の下に、小さく見えた。彼らは、順々にその魚を掴んでは、それを大きな金盥のようなものに入れながら、階段を登って来るようだ。足音と共に、

鱗や鰭と金属が盛んに擦れ合う、カラカラいう音も、聞こえてくる。

　そこは、部屋とも言えない程、狭かった。床は、真ん中に大きく開いた、螺旋階段のためのほぼ円い穴の周りを、ぐるりと縁取るドーナツ型で、幅も、人一人立てるだけで、金盥は乗らないだろう。その床の穴と同じくらいの円い穴が、天井にも開いていて、星空が間近に迫っている。窓のない艶々した白い壁は冷たくて、物音一つ伝わって来ず、ここは、塔の頂上かも知れない。二人組が、魚でいっぱいの金盥を両側から支えて、穴から顔を出した。盥の中は、細かく波立って、入り乱れた赤と青が輝く。二人組が、どちらからともなく、口を開き掛けた。女は、機先を制する積もりで、

「血は、洗った方がいいでしょうけど、何処でやりますか。」と、はっきりした口調で言った。

「誰の血だね？」と、驚いたような顔で、一人が言った。女は、もう一度脇腹を撫でさすり、そこに触れた少しぬめるような指の匂いを嗅いだ。魚臭かったので、そのぬめりを綺麗に舐め取ったが、飲み込まずに、口の中に蓄えた。

「分かった。じゃあ、好きにしていいよ。」と、女は、唾が口から零れないよう、顎を突き出して言って、二人の後ろに回り込み、金属片で、その二つの首筋に、素速く斬り付けた。首は二つとも、クネクネと柔らかく曲がって、女の手は、空を切るばかりだった。女は諦めて、金盥を受け取った。思ったより

軽い。先ず、口の中の魚臭いぬめりを垂らし込み、暫く、魚共がギラギラと跳ね踊る様子に目を凝らし、それから下を覗き見ると、螺旋階段に、二人組の姿はなかった。女は、同じ過ちを繰り返したと思った。二人組も、きっと、女の体の中の何処かに入り込んだに決まっている。魚より、言葉の通じるだけマシか。女は、言葉を掛ける代わりに、盥に顔を近付けて、啄むように、魚を食い始めた。

　身はとろけるように柔らかく、骨もない。魚は見掛けだけで、別のものでもありそうだ。口の中で、血の味を選り分けられて、それを唾と一緒に、盥の中に戻した。魚を全て食い終わると、盥の中は、女の血と唾だけになった。唾は泡立って、その中に血が一滴ずつ入り込み、それらはまた、魚の卵のようだった。その表面に、魚の青い背が浮いて直ぐに沈んだ。まだ、底の方に、魚が残っている。女は、盥を持っている腕をぐるりと大きく振って、盥の中のものを、出来るだけ満遍なく、壁にぶちまけた。空の盥は階段の穴に放って、血を含む唾を、壁中に塗りたくった。流石に、泡は潰れて、壁はピンク色に染まった。

　盥が螺旋階段を落ちて行く、虚ろな金属音は、なかなか已まなかった。その音は、穴を突き上がって、狭い部屋に響き、女の背中を蛇のようにクネクネと這い登った。女は、狭い床の上で、腰を捻り、脚を上げ、胸の前で交差させた腕を震わせて、それを堪えるしかなかった。足元で、青い魚が一匹、跳ねた。

女は、それを掴んで、胸に付けたままの血糊をしっかり擦り付けてから、口に入れた。穴を見下ろすと、盥は、階段を一段ずつ、のろのろと落ちて行くようだ。魚の身をよく噛み砕いてから、その盥に向けて吐き付けた。それは、真っ直ぐに流れ落ちて、盥の側面に命中した。音は、急に籠もって、背中は何でもなくなった。

音が収まったせいか、壁をよく見ると、血を含む唾が、ポツポツと泡立ち始めている。金属片で、その泡立つ唾を、壁から刮げ取って回った。貝殻の形の上に、魚の卵にそっくりな唾が盛り上がった。話し声に見上げると、天井の穴の縁から、二人組が笑顔を覗かせて、女を見下ろしている。山盛りの赤い唾を、二つの笑顔に向けて掲げた。魚の匂いが、余りの強さに、渦を巻くようだった。それに巻き込まれるように、二人は、天井の縁から舞い上がったかと思うと、螺旋階段の穴へと逆様に落ちて行った。それにぶつけるように、女は直ぐに、泡立つ血の唾を乗せた金属片を、投げ付けた。

暫くして、先程よりずっと鋭くて重そうな金属音が、穴から突き上がってきて、先程よりもっと耐え難く、女の背中を、蛇のようにクネクネと這った。金盥を、螺旋階段に、思い切り打ち付けているのだろうか。金属の階段全体が震えて、その至る所から音が鳴っているかのようだ。昇ってきた音は、狭い部屋に渦を巻くように響いて、壁までもビリビリと鳴らした。壁の表面に貼られた

薄い紙が、浮き上がって、震えるようだ。いや、本当に、殆ど透けたピンク色の薄い膜が、壁一面から剥がれ掛けていた。壁に塗り込まれたまま、泡立たずに残った、女の唾と血の乾いたものに違いない。女は、それを、破れないようにに丁寧に剥がし、体に巻き付けて行った。それで、音から逃れられそうだ。全て剥がすと、足を踏み外して、螺旋階段の中へと逆様に落ちて行った。手摺りにでも沿って、グルグルと螺旋状に落ちて行くようだった。

二人組は、螺旋階段の心棒の根元の辺りにしがみ付いて、反動を付け、全身を使って、階段を揺すっていた。それで、階段全体が唸るように震え、その唸りの中から、階段の上で女が聞いた、金属同士を打ち合うような音が、湧き起こるのだった。その一人の脇腹には、歪な盃の形の金属片が突き刺さっている。

その側に置かれた金盥の中に、女の体は収まっていた。

女は、頭の天辺から爪先まで、薄い膜で綺麗に巻かれていて、音からは守られたが、横になったまま、金盥の中で、身を拗らせているしかなかった。しかし、何とか頭を起こして、床を眺め回し、泡立つ血の唾が、水浸しの床にバラバラに飛び散っているのを見付けると、易々と盥を滑り出て、水の表面を泳ぎ回るようにして、その飛び散った赤い唾を一ヶ所に集めた。それから、口の辺りだけ薄い膜を食い破り、その集めた唾を啜って、残らず口に含み、それを金盥の中に戻した。その一粒一粒が、口の中で脹れたのか、それは盥いっぱいに

満ちて、少しずつ赤味が失せながら、光りを帯びていった。
　口の辺りの膜を食い破れば、階段の金属音は、そこから耳にも届いて、女はまた、その耐え難さに身を拗らせた。已めさせようと二人に飛び掛かり、先ずは、一人の脇腹の金属片に食らい付いて、それを取り戻した。その脇腹の傷口からは、血は一滴も出なかった。女が、それを銜えたまま、二人に向けて振り回すと、二人は、柔らかい身のこなしで素速く避けた。女の口の刃物は、空を切るばかりで、女が蹌踉けた隙に、二人は、階段を駆け登った。その間ずっと、階段全体は震えるままで、音は少しも已まなかった。だから、このまま諦めて、二人の好きにさせる訳には行かない。女は、二人を追って、体を拗らせながら階段を這い登ったが、途中、体が階段に絡み付き、螺旋状のまま、動きが取れなくなった。見下ろすと、白い床は何処にも見えず、一面、ギラギラ光る青い魚で埋まっていた。どの魚も、クネクネしながら、のっそりと跳ねて、女の身の丈を越えていそうだ。階段を登りきった二人が、上の小部屋で談笑している声が、金属音の間から漏れてくる。（二〇〇二年八月十一日）

＊　　　＊　　　＊

牛乳

　川から汲んできた泥水が、恐ろしく大きな布袋に順々に流し込まれる。袋から水が染み出て、その中に泥が溜まって行く。私独りは、腰を下ろして、ずっしり重い硝子の器を胸に抱き、その中になみなみと注がれた牛乳をちびちび飲みながら、その作業を眺めている。皆、喉が渇いているのか、恨めしそうに私の側を行ったり来たりする。流し込む泥水が溢れるようになると、閉じ合わされて四隅に縄を結えられた袋は、総掛かりで何時間も掛けて、空中に吊り上げられた。直に水は捌け、袋の底から滴る雫も止まって、作業を終えた男達は、その泥の袋の下に、バラバラになって腰を下ろした。何十人と居たが、それでも、その袋の落とす影の中に、一人残らず収まった。

　牛乳は、殆ど減らない。その器の中を空にしない限り、立ち上がる事も出来そうにない。彼らが帰ってくれたら、何処へでも、牛乳をぶちまけられるのだ。それとも、残りは全て、喉の渇いた彼らで、回し飲みして欲しいものだ。声を掛けたが、泥の袋を吊っている四本の縄が、ギリギリと凄い音を立てて、私の声は、私の耳にさえ届かない。器を脇に置ければ良いが、胸にきつく抱いていなければならない器を、どうして脇に置けるだろう。蹌踉けて、牛乳を全て零してしまうのがオチだ。

　私は、そこに腰を下ろしたままで、仰向けにひっくり返った。牛乳が全身に

浴びせ掛かり、ゴロゴロと、硝子の器の転がる音が、頭の後ろでする。上体を起こし、腰を下ろしていた石のベンチに手を掛けて、そっと目を開けた。牛乳で真っ白な者は、私の両側にも、一人ずつ居た。やはり、石のベンチに手を掛けて、立ち上がろうとしている。遅れまいと、私も立ち上がろうとしたが、ひどくドロドロした牛乳が体にこびり付いて、その重みで、体が思うように動かない。やっと腰を浮かせて、石のベンチに抱き付くのがやっとだ。両側の真っ白な二人が、側に寄ってきて、私の体を撫で回した。私は、ベンチの上で何度もひっくり返され、二人の手で、ドロドロの牛乳を全身に塗り込まれた。

真っ白な二人と比べてさえ、私の体は、真っ白であるに違いなかった。私の体は、ベンチから起こされた。見るとしかし、私の白い体は、何処となく黒ずんでいた。型に嵌め込まれたように、愈愈動きが取れない。二人は、泥の袋の下に行って、男達に声を掛けて回った。彼らは直ぐに八方に散って、戻って来た時には、二人一組になって、石のベンチを抱えていた。それらは、私の前で、段差を付けて順々に積み上げられ、幅の狭い石段になった。白い二人を残して、男達は皆、同じ方向に帰っていった。

白い二人は、私の左足をやっとの事で持ち上げて、石段の一段目に乗せた。その途中で、力を込める二人の唸り声を聞きながら、私は、自分の体の自由が利くのが分かった。しかし、それを悟られないように、わざと体を固くしてい

た。二人は、私の後ろに回って、足踏みしながら、低い声で抑揚のない歌を歌い出した。私は、逃げ出したくなったので、左足を戻し、後ろを振り返った。二人は、警戒するように、後ろに飛び退いた。牛乳は乾いて、もうそれ程白くなかった。それに比べて、私の体は、艶々と真っ白で、何処も黒ずんでなどいない。私は、二人の間を擦り抜けた。

　そこから、何処へ行けばいいのかが、分からない。闇雲に歩き回れば、穴に落ちるか溝に嵌るかしそうだ。足を止め、鳥が羽ばたくように、伸ばした腕を振った。飛べる筈もなかったが、真っ白な腕が空を切った跡に、虹のような色の帯が、波打って浮かび上がる。その色の帯の、端から黒ずむ方へと腕を伸ばすと、自ずと進む方向は決まった。しかしそれは、真っ直ぐではなく、ひどくジグザグで、そうして何度目かに、急に体の向きを変えた時、目の前に、波打つ色の地面が拡がった。目の錯覚であっても構わない。私はそこへ、左足を振り上げた。

　そこは石段の一段目で、私の足は、独りでに石段を登り切って、宙吊りの泥の袋の縁に立った。表面をずっと濡らした大きな袋は、縄を結わえた四隅だけは真上を向いて尖っていたが、レンズのようになだらかに窪んで、その真ん中の一番低い所は、うっすらと水が浮いているようだ。低く霧が垂れ籠めていて、泥の袋の反対側の縁までは、見通せなかった。その奥に、淡い色の青空が覗い

ているのは、見上げられた。私の後を付いて来たらしく、さっきの二人が、私の両側に立った。その内の一人だけが、空の硝子の器を胸に抱えている。二人は、直ぐに私を追い越して、泥の袋の上に踏み込んだ。横顔を見比べると、二人の間には、随分歳の差があるようだった。何歩か行って蹌踉けた二人は、同じように尻餅を搗き、そのままの恰好で、真ん中の窪みに向かって、濡れた布の表面を、シュルシュルと音を立てて滑り降りた。水が浮いた所に突っ込むと、片方ではだけ、水飛沫が上がり、一人が、びしょ濡れの姿で起き上がった。もう片方では、水飛沫は上がらず、その姿は、呆気なく水に沈んだ。硝子の器だけが、静かに水に浮いた。

その器を自分のものにしてしまえばいいと思って、私は、手ぶらで、泥の袋に踏み込んだ。私は少しも蹌踉けなかった。足の裏に吸盤でも着けたように、滑り易そうな傾いた濡れた布の上を、しっかり踏み締められた。水に沈まなかったのは、歳取った方だった。一歩も動こうとしないのは、直ぐ脇の深みに嵌って、若い方の後を追いたくないからだろう。しかし、何処も、水がうっすらと浮いているようにしか見えない。私は、器を拾って胸に抱き、水の上の至る所を歩き回った。残った一人は、その私をジッと見詰めて、

「あなただから、そんな事が出来るのです。」と、言った。嗄れ声で、女のようだった。

私は、その女を軽々と腋に抱えて、水の外に出た。女を下ろすと、女は蹌踉けて直ぐにしゃがみ込み、ゆるゆると水の縁まで滑って、そこで俯せになって両腕を拡げ、やっと滑るのを止めた恰好だった。私は、今度は登り斜面の濡れた布の上を、やはり、一歩一歩そこに足の裏が吸い付くように進んだ。

そうして、泥の袋の反対側の縁まで来ると、幅の狭い石段が、上に向かって延びていた。石段の両側には何もなく、見下ろすと、黄色く濁った川がゆったりと流れていて、帰っていった筈の男達が、そこで溺れ掛けていた。私は、石段の数を数えながら登った。登り切ると、黒い肌の女が、待っていて、

「石段は、何段？」と、尋ねてきたので、

「七段。」と答えて、私は、胸に抱いてきた硝子の器を、彼女に渡した。胸の上っ面が、硝子の器にくっついて、剥がれたようだった。そこは、石畳の敷かれた円い部屋で、奥の半分にだけ、壁があって、その壁に背を向けて、七人の男達が、半円を描いて並んでいた。どの顔も見覚えがある。泥水を運んでいた者達だ。彼らだけは、川で溺れたりはしないらしい。私が、その半円の真ん中に進むと、彼らは、私をそこで逆さ吊りにして、私の体のあちこちらを、指で千切っては、口に入れていった。肌だけでなく、私の肉も内臓も真っ白だった。滴り落ちる血は、黒い肌の女が、硝子の器で受けた。その血も、真っ白だった。七人の男達に食い尽くされて、残ったのは骨だけだが、骨は黒かった。

男達は、その骨の、気に入ったものを一本ずつ手に取って、それを石畳に擦り付けて、削り、磨き上げて、ナイフを拵えた。

　男達は、そのナイフを握り締め、黒い肌の女は、硝子の器を胸に抱いて、石段を下りて、泥の袋に足を踏み入れた。霧は晴れ、袋の表面はすっかり乾いていて、歩き易かった。窪みの真ん中に浮いていた水も干上がって、そこで、歳取った女が、冷たくなり掛けた若い女の口に息を吹き込んでいる。男達は、若い女の服を剥いで、全身にナイフを突き立てた。それから、肌の黒い女が、器の中の私の白い血を、その傷口に擦り込むと、若い女の紫色の肌に、また血が巡りだした。それを見ていた七人の男達と、歳取った女と、生き返った若い女は、私の真っ白な血を回し飲みして、器を空にした。

　独りだけ、それを飲まなかった肌の黒い女は、空の器を受け取って、円い部屋の方に戻った。石段まで来て、見下ろすと、七人以外の男達が、黄色く濁った川に入って、水浴びをしている。石段を登り切って、振り返ると、男達は、四つん這いになって、泥の袋の表面に盛んにナイフを突き立てていた。その甲斐あって、泥の袋は真ん中から真っ二つに裂け、物凄い量の泥が、その下に流れ落ちて拡がった。男達だけが、黒いナイフを振り翳して、直ぐに泥の中から這い出した。女二人は、何処からも出て来なかった。

　肌の黒い女は、円い部屋の真ん中に進んで、散らばった私の黒い骨を集め、

それを、硝子の器の上で握り潰しては、その骨の中に残った血を、最後の一滴まで搾り出した。それだけでは、器を満たせなかったので、自分の脇腹を切って、白い血を流して足した。いっぱいになると、それを胸に抱いた。

泥の袋が裂けてなくなった下にも、ずっと石段は続いていて、女は、そこを降りて川縁まで行き、一人だけ水から上がって来てふらついている男を、石のベンチまで誘って、真っ白な液体で満たされた硝子の器を、その男の胸に預けた。（二〇〇二年八月十五日）

＊　＊　＊

串刺し

足元だけは、そこを炎が流れて行くので明るいが、その炎は冷たくて、踝から下はもう感覚がない。その若い男は、昔住んでいた所に戻ろうと、ずっと独りで歩いて来た。横になるどころか、しゃがむ事も、立ち止まる事も出来ない。絶えず新しい炎を蹴散らしていなけば、みるみる全身の熱を奪われて、凍え死ぬだろう。

少し先に、やはり足元に炎を煌めかせて歩いている三人の人の姿が見えて、

若い男は直に追い付いた。三人とも男で、大分歳取っていたが、若い男とは顔見知りで、彼が後にしてきた土地の人間だった。三人もまた、そこに居られなくなったに違いない。行く先を尋ねると、同じだったが、彼らには全く初めての土地だろう。三人は、足元を流れる炎を、足の運びが軽やかになってとても具合が良い、などと言って喜んだ。向かっているのは南だった。ずっと北で暮らしてきた三人には、炎の冷たさは、何でもないのか。

　側で見ると、三人の脚は、透き通ったような銀色をしている。彼らの身の丈より長い、同じ銀色の杖をつき、透き通った炎が、その途中までチロチロと這い登っている。杖は、一々振り立てられたりせず、地面に着けた先が滑るように進んで、彼らの足の運びは、杖に引っ張られて行く体のバランスを取っているだけのようだ。実際、歩く姿勢にしては、背筋をピンと伸ばし過ぎている。

　杖の事を尋ねると、少し驚いた顔をされ、こんなものは何処でも手に入ると言われた。若い男は、三人の姿を見失わないよう気を付けながら、独り離れて、辺りを手探りして回ったが、何も掴み取れなかった。三人の姿が、滑り落ちるように遠ざかる。叫ぶと、その内の一人が、向きを変えて若い男に近付いて来た。両手に一本ずつ杖を握っていて、その一本を若い男に渡し、そのまま先へ進もうとした。

「方向が違うんじゃないですか。」と、若い男は言った。他の二人の後ろ姿

はもう、米粒程だった。

「戻れば、ずっと遅れたままだから。」と歳取った男は言ったが、若い男は、ついた杖を両手で握ってしまえば、その導く方にしか進めないと、直ぐに気付いた。杖は熱を持っていたが、少しくらい火傷してでも、放したくなかった。彼らの足元から、炎の流れが緩やかに下って、一本の真っ直ぐな筋になって延びて行く。その先の方が、途中から青く滲んでゆらゆらと揺れ、まるで海の底を進んで行くようだ。それが途絶えた奥に、ぼんやりとした輪郭の何面かの壁が、闇の中にゴチャゴチャと入り組んで並び立つ。窓灯りのようなものも一つ見えるので、何面かの壁を持つ大きな建物だろうか。雨が落ちてきて、足元の炎の明かりが、掠れて行く。若い男だけが、杖を出来るだけ前に傾けて、流れる炎の上を、窓灯り目指して急いだ。雨が地面を打つ音が、段々と大きくなり、巨大な雨粒が足元に落ちると、炎は消され、そこだけ真っ暗な穴が開いた。

炎が青く滲み始める境目で、杖が弾け飛び、杖をなくした男は、余勢で前のめりになる事もなく、そこにずっと立ち尽くしていたように立ち尽くした。足元を照らす炎は跡形もなく、振り返ると、炎の筋もすっかり消えていて、追い付いて来る筈の歳取った男の姿もなかった。青く滲んでゆらゆらと延びる筋は、明るく光ってはいたが、炎とは全く別のもののようで、遠くから見たよりは短くて、壁までは、もうそんなにはなかった。炎が消えたなら、横になっても凍

えないだろうと思うと、男は疲れがどっと出て、棒のようにそこに倒れ込んだ。直ぐに、低い方から、高く響く足音が近付いて来て、逆さに見上げると、白い服を雨に濡らした坊主頭の小柄な男が、息を切らしていた。

「どうしてここで横になるのか、説明して下さい。」とその男は言って、手を差し出した。その手の指が余りに細くて当てになりそうになく、若い男は、独りで立ち上がろうとして、足を滑らせた。青く滲む光る筋に沿って、体が、ゆっくりと低い方へ降りて行く。そっと壁に行き当たって見上げると、窓の灯りは、一段上の壁の、少し奥まった所にある。坊主頭の男が、足音を高く響かせて追い付いてきて、

「説明出来ないなら、中に入って下さい。」と言って、壁の縁の狭い隙間を両手で押し拡げた。その姿がひどく滲んでいた。若い男はそれを、水の中から見ていた。ひっくり返るように起き上がると、壁際の、溝のように窪んだ所に、勢い良く雨水が流れ込んでいて、彼はそこに、膝の上まで水に浸かっていた。流れる炎がまた、足元だけを照らしていた。炎は、雨水と一緒にどんどん低い方に流されていたが、明るさは保たれた。冷たくはなかった。銀色の杖が、水の中に突き立てられていて、炎は、その杖から止め処なく噴き出している。坊主頭の男は、居なくなっていた。

若い男は、杖をつきながら、足元の炎の明かりを頼りに、雨水の流れに逆ら

って、壁の縁の脇の、狭い急な上りを、回り込むようにして登っていった。そうしてやっと、一つ上の壁の前まで来ても、窓灯りには、手が届かなかった。仕方なしに、杖を振り上げて、その先で窓を叩いた。何の音も聞こえてこない代わりに、杖の先の炎が、窓に移った。窓は、見る間に炎に包まれて銀色に輝き、丸ごとドロリと壁から剥がれ落ちた。それは、直ぐに、雨水に流されて、男の足元を過ぎ、下の暗い水の流れに落ち込んで、壁際の窪みの底を照らしてクルクルと回った。目の前の壁は、やや奥に向かって傾いていたが、一面ただのっぺりと白いだけで、窓灯りに見えたものがどの辺りに貼り付いていたかさえ、分からない。杖を振り立てて、隅々まで調べても、汚れ一つ見付からなかった。

　窪みの中でクルクル回っているものは、水の中なのに、その纏う炎の衰える様子はない。それより、振り立ててばかりいたからか、杖から噴き出していた炎が、消えてしまった。男は、火を貰いに行こうと、壁の縁の脇を回り込んで、狭い傾斜を降りた。窪みの側で見下ろすと、それはもう、クルクル回るのを已めていて、炎も鎮まり掛けていた。男は、急いで、杖を水に突っ込んだ。炎が杖に移ると、窪みの底は、すっかり暗くなって、その杖の先の炎に照らされるだけになったが、そこに人の姿の影が映るように見えた。その窪みの底から浮き上がってくると、今まで炎に包まれていたものは、寝かされた人の形をして

いて、若い男に瓜二つだった。雨はやんだようだ。

また、坊主頭の男が現れて、水に浮いた人の姿をジッと見詰めた。若い男は、同じ科白を聞かされたくなかったので、杖を坊主頭の男に預けて、水に入った。助け起こそうとする筈が、窪みの底で水が渦を巻いていて、それに足を取られて、自分に瓜二つの者に抱き付いたまま、水の中に倒れ込んだ。二人は、何も見えない窪みの底に沈んで、水に弄ばれるまま、クルクルと回った。それでも二人は、向き合ったままで、若い男の目の前に、同じ若い男の二つの丸い目が、暗く小さく輝き続けた。

水を飲むと、甘く生温くて、クルクル回りながらでも構わないから、そこで眠りたくなる。急に体が軽くなったようで、渦を巻く水が、二人を窪みの外へ押し出した。いや、押し出されたのは一人だけで、もう一人はまだ、暗い水に捕らわれたままだ。

坊主頭の男の白い服に、杖の炎が移っていた。燃える服を脱ごうにも、濡れていて、なかなか脱げずにいる。若い男が手伝って、やっと服を脱ぐと、坊主頭なので男に見えただけで、痩せていて分かり難いが、どうやら女のようだった。服を脱いでも、その体にもすっかり火は移っていた。炎を纏う裸の女が、暗い水に飛び込むと、水の中の若い男の姿は、濃い影を引いて、眩しく浮き立った。その体に、女は絡み付いた。水の底の二人は、水の動きに従ってクルク

ル回るだけでなく、もっと色々な動きをした。水の上の若い男は、それを見下ろすだけだった。
「そっちの方が、早かったな。」と、側で男の声がした。歳取った二人の男が、杖をついて立っていた。
「もう一人はどうしました。」と、若い男が尋ねると、
「それは、こっちが聞きたい。」と言って、歳取った二人は、ぴったり声を揃えてから、水の中を覗き込んだ。見られてはいけないものを、見られているのかも知れない。もう終わりにしようと、若い男は、力を込めて、杖を、水の中へ突き立てた。絡み合う二人を、串刺しにする積もりだった。杖の先は鋭くて、命中すれば必ず二人纏めて刺し貫けるだろうが、何度やっても、硬い窪みの底に、杖の先を強か打ち当てるだけで、掠りもしない。杖が折れてしまうと、歳取った男達の杖を借りて、動き回る二人を狙い続けたが、息が上がって杖を三本折っただけだった。杖を持たずに肩を寄せ合う歳取った二人の男は、顔も体付きも瓜二つだった。居なくなったもう一人の歳取った男の顔を、若い男は、どうしても思い出せなかった。（二〇〇二年八月十九日）

＊　＊　＊

集まり

　案内状の小さな地図だけが頼りで、入り込んだ狭い道は、行き止まりだった。安楽椅子に横座りになった小さな女が、立ち塞がるブロック塀の方に脚を伸ばして、スケッチブックにグルグルと鉛筆を走らせている。一目で雨晒しと分かる椅子は、泥濘に脚が埋もれ掛けて傾いていた。男は、女に地図を見せて、道を尋ねようとした。肩を痛めていて、差し出そうとされる右腕は、いきなり、ほぼ決まった角度にピンと伸びて突き出されるしかなく、案内状は、女の鼻先に突き付けられた。左手は、肘も手首も痛めていて、紙を掴むのさえままならない。
　女は、きつい目付きで、男を見上げた。男は、腕を突き出したままの恰好で、狭い中を斜めに後退ったが、女は、眉を顰めたまま、男から目を離さなかった。スケッチブックには、黒い線だけで、鳥の絵が画面いっぱいに描かれていて、男の顔を見詰めながらも、女の手は、画面の端の一ヶ所ばかりを、小さな円を重ねて塗り込めるように、動いていた。
　「穴が開いてしまいますよ。」と、男は言って、顔を背けようとしたが、首が動かない。右と揃えて左腕も突き出せば、首は回るかも知れないが、振り出された左手で、ちょうど女の頬をひっぱいてしまいそうな所に、女の顔がある。

鳥の絵から目を離し、案内状の地図を見直す事しか出来なかった。小さな地図には、細い線が三本、並んでいるだけだ。そこへ、鉛筆を持つ女の手が素速く伸びて、その三本の線全てと交わるように、斜めに直線を一本加えた。その新しい線が邪魔で、男は、益々方角が分からなくなった。女の手は、スケッチブックに戻り、また何処か一ヶ所をグルグルと塗り込めてゆくが、女は、男の顔を見詰めるままだった。

三本の線は、果たして地図だろうか。三本の線とそっくりに、三本の道が並んでいる所を、男は知っていて、その三本の道にも、まだ行き着けないでいる。女の引いた線のような道でもあれば良かったのだろうが、その線のせいで、どのように近付こうとしていた自らの足取りが、さっぱり見えなくなった。尤も、それが地図でないなら、見えなくて当たり前だ。それに、仮に三本の道に行き着けたとして、地図の通り、ただ三本並んでいるだけなら、どの道をどちらから入っても、行き止まりであるしかない。それとも、行き止まりが目的地か。

女が立ち上がり、男に、安楽椅子に掛けるよう勧めた。男が、のろのろとその通りにすると、女は、ブロック塀に背をして、男にスケッチブックを翳し、鳥の絵を指差した。男が、碌に絵を見ずに、「鴉ですか。」と言うと、女は、音

がする程強く、指で何度も鳥の絵を突っつきだした。男は、また案内状に目を落とした。三本の線が、拡げた鳥の翼で、女の引いた斜めの線が、鳥の胴体に見えて来た。ただ、その新しい線の両端は、どちらが頭とも尻尾とも見える。男は、案内状を縦にしたり横にしたりして、その線だけの鳥の、飛ぶ角度を色々に変えた。或る角度でだけ、頭と尻尾が、見間違えようも入れ替わりようもなく、くっきりと見て取れた。男の体は、左に傾いていた。安楽椅子が、左に倒れ、男の体の下になって、呆気なく潰れた。

　男が、椅子の端を踏み付けながら立ち上がると、泥だらけの椅子は、弾みで、弓なりになって、斜めに大きく引き起こされた。それもまた男には、翼を拡げた鳥の姿に見えて、その事を女に言うと、女は、愈愈激しくスケッチブックを突っついた。

　絵を見ると、鳥の下腹が、丸く真っ黒く塗り潰されていて、大きな穴が、ぶち抜かれたようだった。女の指は、そこを叩いていた。しかし、鳥の足元のやや後ろ側にも、真っ黒く塗られた同じ大きさの丸があって、二つの黒丸を見比べると、下腹の肉が、足元にボトリと落ちたようにも見えてくる。或いは、鳥は、丸い塊を呑み込んでしまっていて、その呑み込んだものの影だけが、足元に落ちているのか。或いは、足元は静かな水辺で、暗い塊を孕む下腹が、そこに映っているのか。

いや、男の顔をジッと見詰めて描かれたのなら、それはどちらも、女が見た男の姿であって、鳥とは関係ないのかも知れない。しかし、それなら、どうして二つあるのか。鳥の下腹ばかり叩くので、そちらだけ段々と黒い色が落ち、丸い形もぼやけてきて、ふわっとした鳥の下腹のような質感さえ出て来た。その分、足元の黒丸は、今にも鳥の脚に蹴飛ばされて、何処へでも転がって行きそうだ。

「私を、半分だけ鳥の腹に閉じ込めるんですね。」と、男が言うと、女は、鳥の絵の描かれたその頁を破って、宙に放った。男は、首を低く突きだし、紙の端を辛うじて口に銜えた。紙は、泥で汚れずに済んだ。女は、泥塗れの潰れた安楽椅子を引きずって、ブロック塀に凭せ掛け、そこを短い足で、跳ねるようにチョコチョコと這い登り、塀を越えて姿を消した。それに続いて、男が、安楽椅子に足を掛けても、泥で滑るだけだし、手も使えず、女のようには行かないと思い知らされるだけで、引き返すしかなそうだった。

それ程長くは掛からなかったが、随分とあちこち歩き回って、三本の道の手前まで辿り着いた。そこに、「受付」と書かれた紙を垂らした細長い机が一脚置かれ、背の高い女が一人、立っていた。男が案内状を渡すと、女は、三本の道と斜めに交わって、それを貫いて行くもう一本の道を、指し示した。その道は、初め下りで、直に緩やかな上りがずっと続いた。

そうして、三本の道を横切ってその先まで進むと、熱く高い陽を受ける、禿げ山のなだらかな頂のような所で、そこから、その周りの高い山低い山が数え切れず見晴らせたが、全ての山が、青々と緑で覆われていた。その頂を越えて下りに掛かる辺りに、地面の焼けたような跡があり、そこに人がしゃがみ込んで背中を向けている。背中は、地面と同じ焼け焦げたような色をしていて、見過ごしてしまいそうだった。呻く声が聞こえてくる。男は、その者の前の方に回り込みながら、「雷が落ちたんですか。」と言った積もりだったが、鳥の絵を口に銜えていては、自分でも聞き取れないような発音になって、ただ絵に描かれた黒い鳥を、ビリビリと震わせた。

また、女だった。しゃがんだままで、急に背筋だけ伸ばし、紙を銜えた男の顔を見上げた。腹に何かを抱え込んでいるらしいと見えたが、その脹れた下腹から、何かが出て来て、黒い地面に転がった。それもまた黒くて、形は見づらい。それでも、斜面を転げ落ちて行きそうだとは分かったので、男は、それに向かって倒れ込み、口だけで、その塊を、銜えてきた紙に包み込んだ。

「まだ我慢出来たんだ。もっと時間を掛けて産めば、モノになったのに。あんな絵を見せるなんて、信じられない。」と、女は、荒い息で、ゆっくり横になりながら、男を詰るように言った。包んだ紙の中で、カサカサと音が聞こえた。

「産んだのは、鳥ですか？」と、尋ねながら、男は、女の体が斜面を滑って行きそうに見えて、手を差し伸べた。腕を普通に伸ばせた。女の体は、冷たくなり掛けていて、目だけがギラギラと虚ろで、返事は期待出来そうにない。女の体を止め、立ち上がって腕をグルグル回し、久し振りのその自由になる感触を確かめてから、男は、紙に包まれたものを拾い上げて、来た道を引き返した。また、三本の道を横切ったが、その度に左右を見通し、どれも直に行き止まりであるのを確かめた。まだ「受付」に同じ女は居たが、独りだけで、男は、

「今晩の集まりは、私達だけですか。」と言って、紙包みを、机の端に置いた。女は、四つん這いになって机の上に乗り、紙包みを腹の下に持って来て、ゆっくりと覆い被さるように、それを腹の中に抱え込んだ。手足を折り、女の姿はすっかり丸っこくなって、そこにそのまま、固まって行くようだったが、目の奥の光りは、しっかり据わっていた。そして、

「鳥の絵を見せて。」と言って、微笑んだ。

男は、机の縁から「受付」の紙を剥がし、その裏に、ボールペンで鳥の絵を描いていった。大体、小さな女がスケッチしたのと同じ具合に仕上がったが、問題は、下腹と足元の黒丸だ。それを描くべきか、どうか。

「早くして。」と言ったきり、女は動かなくなった。丸い背中に触れると、冷たくなってゆくようだった。男は、小さな女なら、どうしたらいいか分かる

だろうと思って、ブロック塀の行き止まりに行ってみる事にした。グルグルと歩き回ってばかりで、なかなか行き着けず、ひどく長く掛かった。行き着いてみると、何もかも、そこを後にした時のまま、静まり返っている。そんな事は、予想出来た筈だ。どうして、こんな無駄な事に時を費やしているのか。男は、急いで、真っ直ぐに戻った。

　机の上の女は、すっかり冷たくなって、硬く固まり、押しても引いてもビクともしないので、机をひっくり返すしかなかった。ゴトリと地面に落ちた女を裏返すと、紙包みは、小さくなって、女の腹に埋まり込んでいた。それでも引っ掻き出せそうだ。鳥の絵は、腹の奥に貼り付いたまま、どうにも出来なかったが、黒い塊は、綺麗に取り出せた。これもすっかり丸くなって、拳二つくらいの大きさだった。それを見ながら、男は、「受付」の裏の鳥の絵の、下腹と足元に、真っ黒な塊を描き加えた。

　それからまた、三本の道を横切って、禿げ山の頂きに来た。横になった女には、まだ息があった。男は、女の口を裂いて、持って来た黒い塊を、女の喉の奥に押し込んだ。そうして、鳥の絵を見せ、何が起こるか待った。自分が、その女の足元で黒い塊になったら、その自らの体を「受付」の紙に包んで、三本の道を横切る斜めの道へ、転がそうと思った。（二〇〇二年八月二十五日）

*

*

*

木の根

大きな切り株を囲む女達が、お喋りしながら、石ころ混じりの地面を掘り返して、腐り掛けた根っこを何本も引っこ抜いている。男は、素通りする訳にもいかないので、手頃な根っこを一本拾って、それを分けて貰う事にした。ポケットから、クシャクシャのお札と硬貨を一握り、お座なりに掴みだし、女の一人に渡すと、女は、側でよちよち歩いている女の子を抱き上げて、男の胸に押し付けた。男は、おまけだろうと思って受け取った。子供を象った風船かも知れない程、軽かった。

それを左腕に抱えて、そこを行き過ぎようとすると、他の女達が、根っこを掘り起こす恰好のまま、ちょこまかと動いて、男の行く手を塞いだ。それを避けている内に、方向が分からなくなった。男が立ち尽くすと、女達は、根っこをそこに放ったまま、散り散りに切り株から遠ざかって行く。金を受け取った女だけが残って、切り株に腰を下ろし、不味そうに煙草を吹かし始めた。紫の煙が、一塊りになって、ゆっくりと立ち昇る。

男は、煙の流れ方から風を読み、方向を見定めようとした。しかし、女が体

の向きを変えると、煙も向きを変え、読めそうな風も向きを変えてしまう。男は、女の頭の上に木の根を振り回して、女と煙を分断した。女の頭の上の煙は、どちらへも流れなくなった。男は、木の根を放って、女から煙草を奪い、口に銜えた。それだけで唇が痺れ、急いで吸うと、煙は恐ろしく苦くて、唾と一緒に直ぐに吐き出した。

火の着いた煙草を女の膝頭に投げ付け、木の根を拾いに行こうとすると、男の腕を擦り抜けた女の子が、先に走ってその木の根を拾い、直ぐにその先に放り投げた。そしてそれをまた拾いに行って、先に投げる事を繰り返した。よちよちしていても、女の子の足は速くて、男は、追い付けないまま後を付いて行くしかなかった。痺れたままの唇から涎が垂れて、それが男の足を遅くしていたかも知れない。男は、女の子を見失い、川縁に立っていた。

川幅は狭いが、流れは速く、水面は真っ白になって躍り、地面に水音を響かせて、かなり深そうだ。向こう岸はまるで、川を境に、そこにあった世界が丸ごと切り取られて持ち去られたかのように、何もなかった。木の根も女の子も、川に流されてしまっただろうか。それとも、木の根は、向こう岸まで放られて、それを拾いに行こうとした女の子が、流れに呑まれただろうか。流れに呑まれた方が、まだ助かる見込みもあって、川を越えたら、一瞬にして、跡形もなくなってしまいそうだ。

女達が、そろりそろりと集まってきて、男の左右と直ぐ後ろに、固まって寄り添った。根っこを掘っていた女達だが、人数は大分減っていて、姉や妹が川を渡ろうとして流されてしまったと、口々に嘆き始めた。男は、芝居掛かっているると思ったが、背中を押されれば川に落ちるしかないので、彼女達の気分を害さないよう、真剣に耳を傾ける風を装った。その男の背中に、女達が盛んに手を伸ばしているようだった。肩越しに背中を覗くと、男は斧を背負っていて、女の幾つもの手が、それを撫で回している。男は、木を伐りに来た事を思い出した。女達は、川に渡す木を、男に伐って来て欲しいのか。男が斧に手を掛けただけで、女達は、囲みを解いた。

見渡した限りでは、木は、何処にも生えていなかったが、川の上流も下流も、直に途切れているのが、見て取れた。川は、地下からいきなり湧き出して、また地下に潜っていた。元々地下を流れる川が、この辺りでだけ、地上に現れているらしい。男は、上流に向かった。直ぐに川の湧き出る所に辿り着いたが、そこから先は、向こう岸と同じように、何もなかった。しかしここで引き返せば、女達に、川に突き落とされるかも知れない。

踏み出しても、何一つ、新しいものは見えて来ない。それでもそこに、男は、消えてなくなったりはせずに、歩いて行けた。何処に向かっているかは分かる筈もないが、水音が遠ざかりそうになると、水音の方に足を向け直した。急に

足元に、白い水の流れが現れた。先程までと流れる向きが逆だ。男は、そこから少し離れて、下流の方に歩き出した。水際が見難くて、何度も、水の流れの方に引き寄せられ、その度に踏み止まって、川縁をジッと見詰めては後退った。そうして、何度目かに後退った時、川を見失った。水音も聞こえなくなっていた。

　何もない所を歩き続けるしかないと覚悟を決めると、そこに、木の根が一本、転がっていた。さっき、金を払って手に入れたものかも知れない。拾おうとしたが、そこに貼り付いたまま、ビクともしない。根を張っているようだ。それとも、長い根っこのそこだけが、地上に現れているのか。背中の斧を手に取って振るっても、木の根は、バネを利かせたように、斧を跳ね返した。打ち下ろす度に、斧は段々と強く跳ね返される。それはつまり、木の根は、少しずつでも浮き上がっているからではないか。男は意を強くして、力を込めて斧を打ち下ろした。直ぐ間近の女の子の顔が、目に入った。手が滑って、斧は、弾け飛んでコロコロと転がっていった。女の子は、クルリと背を向け、斧の方によちよちと歩き出した。

　男は追わなかった。斧や女の子を失ってでも、木の根に拘った。しかし、女の子の足取りがひどく遅い。男は、女の子を追い越せると思い直して、斧を拾いに走った。一瞬早く、女の子が、斧を拾い上げ、いきなりそれを、男の足に

振り下ろしてきた。男は、辛うじて避けて、女の子の小さな手から斧を奪おうとしたが、女の子は身を躱して、尚も斧を振り回した。男は、女の子にのし掛かって取り押さえ、やっとの事で斧を取り上げた。それを背中に収め、女の子を抱き上げようとすると、重くて、まるで持ち上がらなかった。
　仕方なく、その手を取って木の根の方に向かうと、女の子は大人しく付いてきた。木の根に近付くと、女の子は男の手を振り払い、木の根まであっと言う間に走り寄って、それをそこからベリベリと引き剥がし、先に放って、それを拾いに走っては、また先に放り投げた。男も、走って後を追ったが、なかなか追い付けなかった。
　川が見えてくると、男は、目標が見付かって、足を速められた。川縁に辿り着いた女の子が、木の根を拾うと、追い付いた男は、その木の根の端を掴む事が出来た。もし、そう出来ていなかったら、女の子は木の根を向こう岸に放って、自らは、川に入っただろうか。木の根を掴む手を放してみれば分かるだろうが、もちろんそんな事は、試すべきではない。
　向こう岸に、女達の姿が見えた。また少し数が減っているようだ。さっきよりも、川幅が広くなっていたが、声が届かない程ではない。女の子が、木の根を持ったまま、川に入ろうとした。男は、踏ん張って木の根を引っ張ったが、女の子の力には、まるで敵わない。男は、女達に、已めさせるよう言ってくれ

と声を張り上げた。それで女達が、口々に喚いたので、女の子は戻った。
　男は、木が見付からなかった事と、上流で直に川は地下に潜っていて、そこからこちらの岸に回り込める事を、女達に説明し、男と同じ道を通ってくる事を勧めた。女達は、納得したようで、川を挟んで、男と女達は、互いの姿を見失わないようにしながら、上流に向かった。女の子は、木の根の端を掴んで、また大人しく男に付いてくる。
　女の一人が、足を滑らせて、川に落ちて流された。男は、自らの足元の水際を見詰め直した。こちらの方がもっと見難い筈だ。余程気を付けないと、今の女と同じ目に遭う。男は、足元と女達の姿とを交互に見ながら、慎重に歩いた。しかし女達は、ずっと男の方ばかり見て歩いている。さっきは直に行き着けたのに、なかなか、川の湧き出る所が見えて来ない。そうする内に、一人また一人と、女が、川に落ちて消えて行く。
　女が残り三人になってしまったところで、男は足を止め、女達にも止まるように声を掛けた。そして、「上流から回り込むのは諦めた方が良さそうだ。三人ならまだ、力を合わせれば、木を伐って来られるだろう。」と女達を説得し、男は、背中の斧を、女達の方に放り投げた。直ぐに、女の子が、木の根から手を放し川に入った。首だけが水の上に出て、その首は少しも流されず、真っ直ぐに向こう岸まで辿り着いた。川幅は、更に拡がっていた。三人の女が立ち尽

くすのを尻目に、女の子は、斧を拾い上げて、それを女達の足に向けて振り下ろしていった。三人とも川に落とされると、そこへ、煙草を銜えた女が、預けて置いた自分の子供を取りにでも来たかのように、のろのろと現れた。
女は、血の付いた斧を女の子の手から振り落とし、それを足で蹴って、川に落とした。それから、吸い掛けの煙草を川に投げ入れ、川を挟んだ男の方を冷たい目でちらっと見て、女の子を軽々と抱き上げて行ってしまった。木の根だけは、男の手元に残った。(二〇〇二年八月二十九日)

＊　＊　＊

スクリーン

見知らぬ同士の男二人が、肩を並べて鉄の階段を駆け上り、分厚そうな鉄の扉の前に立ち、それぞれ手にしている鍵を、同時に、扉の鍵穴に差し込もうとした。二つの鍵は、鍵穴のとば口でガチャガチャとぶつかり合って、どちらも鍵穴に入らない。男の一人は、二つの鍵がそっくり同じに見えて、鍵を開けた者だけが中に入れるのだから譲れないと言う。もう一人には、二つの鍵は違って見えて、先に差し込んだ鍵だけが使い物になるのだから譲れないと言う。

私は、彼らより先に、そこに居た。独りでずっと、真っ直ぐに延びる石畳の道を見下ろしていた。道は、遠ざかるに連れて暗くなり、その暗く遠い石畳の縁に、円椅子に掛けた男の姿がポツンと見える。私は、その男からの合図を待っていた。それを受け取って送り渡すのが、私の役目だった。

下手に仲裁して、争いに巻き込まれたくはないが、場所を移る訳にも行かず、直ぐ側で殴り合いなど始められても困る。どちらかの鍵で、さっさと扉を開けて、争い事は扉の奥でやって貰えれば、一番いい。しかし、どちらの鍵にしろ、本当にそれで扉を開けられるだろうか。競り合う二つの鍵を、改めて見直すと、それは、ほんの少しだけ違って見えて、その違いのせいで、どちらの鍵も、鍵穴には入らないように見えた。どちらの鍵もダメと分かれば、二人共、諦めるしかない。或いはもし、片方が使えてもう片方が使えないなら、使えない方の鍵を先に試せば、決着は付く。しかし、どうやってそれを、二人に分からせるのか。

石畳の縁の男から、光りの合図が送られてきた。それを次に送らなければならない。そのための、木箱に入った機械は、直ぐ脇に置いてあるが、それを動かすには、何か肝腎なものが一つ足らない。箱の角の一ヶ所だけが欠けていて、そこへ、その肝腎なものを押し当てて、機械に嵌め込めば、後は、機械が独りで遣ってくれる筈だ。辺りにそれらしきものが見当たらないなら、扉の奥に仕

舞ってありそうだ。ポケットを探ると、十字に結んだ短い針金が出て来た。男二人が邪魔だ。私は、二人の手首に、手刀を振り下ろした。二人共、鍵を取り落とした。

「所番地を間違えてるんじゃないですか。この辺は、似た建物ばかりでしょう。」と私は、鍵を拾おうとする二人に言った。二人の目にも、二つの鍵は、ほんの少しだけ違って見えて来たらしい。二人は、どちらが自分の鍵か分からなくなって、盛んに二つの鍵を見比べている。その間に、私は、針金で鍵を開けた。扉を開けようとすると、取り敢えず鍵を一つずつ拾った二人が、扉に腕を突っ張った。一人は、木箱に足を掛けている。蹴落とされたら堪らないので、一先ず私は、扉から離れた。鍵穴の前でガチャガチャ音を立てていれば鍵にも見えたが、二人が手にしているのは、どうやら鍵ではなさそうだった。二人にもそう見えたようで、二人共、片腕を突っ張って黙ったきり、手にしたものを、矯めつ眇めつするばかりだった。

「これが鍵ですよ。」と言って、私は、指で抓んだ十字の針金を示した。それを見て二人は、鍵に見えなくなった二つのものを、一つに組み合わせようとしだした。十字を手本にするようだったが、埒が明かない。ほんの少しだけ違う所同士を向き合わせれば、ぴったりくっつきそうだが、もしそうなって、それが絆となって二人を結び付け、二人掛かりで立ち向かって来られたら厄介だ。

私は、十字の針金を、彼らの直ぐ目の前に振り翳して邪魔をした。二人は、その結び目をもっとよく見ようとして、手を滑らせた。二つは、足元に転がったが、少しだけ違う所がちょうど向き合うと、さすがに二人も気付いたようで、それを拾って、一つにした。一人は、それを鍵だと言い、もう一人は、穴を開ける道具か何かだろうと言い張った。絆どころか言い争いの種になって、私は、ホッとした。

「鍵だとしても、しょうがないでしょう。」と、私は口を挟んだ。私の言葉に力を得たように、穴を開ける道具だと言い張る方が、それを奪い取ると、もう一人は、あっさりそれを諦めて、扉を開けようとした。今度は私が、扉に腕を突っ張って、

「私が鍵を開けたんですよ。」と言うと、男は、渋渋のように扉から後退った。私は、針金で、鍵を掛けた。そうしている内に、もう一人の男が、私の木箱に穴を幾つも開けていた。穴は綺麗に一列に並んでいて、男は、得意そうに、その穴を開けた道具を、猫でも撫でるように撫でている。穴を覗くと、箱の中は空っぽだった。持ち上げて振ってみたが、軽い箱からは何の音もしなかった。

そうやって箱を振っている私の姿を、彼は、重い箱を抱えて、階段の下から見上げていた。彼が声を掛けると、二人の男が階段を駆け下りて箱を受け取り、また階段を上って、箱を私の直ぐ脇に置いた。彼も直に階段を上ってきて、そ

の箱の直ぐ後ろに立ち、扉が開かないのを確かめてから、「鍵を渡すように」と言って、柔らかそうな尖った手を、私に差し出した。彼の顔には見覚えがあった。そして、色々思い返しても、他人の顔が、ただの一つも浮かばなかった。それなら、彼の顔は、私の顔であるしかないが、彼は、それきり黙って冷たく私を見詰めるだけなので、私も見知らぬ風を装った。

　十字の針金は、ポケットに仕舞ったかも知れないが、空の箱を抱えていて、両手が塞がっている。それに、彼が針金で鍵を開けられるかどうか、分からない。

「これが鍵だ。」と言って、男の一人が、穴を開けた道具を、鍵穴に差し込んだ。大きな音がして鍵が開き、直ぐに扉が開けられた。いきなり、扉と同じ色に塗られた同じような凹凸のある鉄板が立ち塞がり、そこに重ね合わされた扉の、手前側の一枚だけを開けたような恰好だった。それとも、その扉にそっくりな鉄板にはノブも鍵穴も見当たらないので、それはただ壁に打ち付けてあって、扉は、それだけのものかも知れない。彼が、開いた扉の裏側に、小さな額縁が掛かっているのを見付けた。それを取り外して、彼の箱の側面に開いた四角い穴に宛うと、ピタリと嵌まった。箱の中の機械が唸って、微かな光りが、箱のあちこちから、外に洩れ出した。額縁の中の小さな絵にも、裏側から光が当たって、その彩りを明るませた。人の体が描かれているようだった。しかし、

音も光りも、直に勢いをなくしてそのまま消え失せ、それ切りになった。
　空の箱を抱えたまま、私は、それを横目で見ていたが、私とは何の係わりもないように、顔を背けた。一つ息を吐くと、何処からか鳴り出した間延びした音が、耳元で伸び上がった。抱えた箱の、一ヶ所だけ欠けた角に、私の唇が触れていて、そこに当たった息が、箱の中の空気を振るわせたのだ。並んだ穴に順に指を置いて、その指を動かせば、音程を操る事も出来た。見掛けとはそぐわないが、空の箱は、笛に違いなかった。知らぬ間に中の機械を抜き取られた訳ではなく、初めから、私の箱は空だったのだ。重い箱を抱えて、階段を上った覚えもない。光りではなく、音で合図を送るのが、私に委ねられた遣り方なのだ。しかし、ここからでは、音は届かない。階段を下りようとすると、男二人が、私に組み付いて来た。その腕を振り払って、私は、ポケットから十字の針金を取り出し、彼の足元に放った。男達は私を放し、私は階段を下りて、暗くなった石畳の方へ駆け出した。
　針金を拾った彼は、一旦扉を閉め、穴を開ける道具で鍵を掛け直し、それからもう一度、針金で鍵を開けた。鍵は音もなく開いて、扉を開けると、その奥は明るい部屋で、早速男二人が、彼の重い箱を中に運び込み、部屋の真ん中の大きな机の上に乗せた。彼も部屋に入り、立ったまま、手早く箱を取り除けると、機械が、独りでにブルブルと震え、あちこちから光りを放つのを、男二人

が力尽くで押さえた。機械の側面から額縁が外れ、床に落ちた。彼は、穴を開ける道具であり鍵でもあるものを、二つに引き離し、それをスッと十字に組んでまた一つにし、それを使って、機械をみるみるバラしていった。部品を一つ外す度に、機械が中から光りを出して、明るい部屋は益々明るくなり、男二人は目を遣られて、何も見えなくなった。彼だけは、せっせと機械を弄り続けるようだが、それから先は、私もまた目が眩むのか、何も分からないし係わりもない。

いや、私はずっと、箱を斜めに抱いて、石畳の道をゆっくりと歩いていたのだった。笛の音が第一なので、走ったりは出来ない。石畳の縁の、もう誰も腰掛けていない円椅子を行き過ぎると、真っ暗で、ただ笛の音の響きの伸び上がる方へと向かうしかない。それでも、石畳の道は続き、そこを踏み外す事はなかった。遠くの少し高い所に、四角い灯りが見えて、その下に続く階段をうっすらと照らしていた。私は、笛を吹くのを已め、箱を抱えて、その灯りを目指したが、途中で石畳が終わり、そこからは砂地で、なかなか前に進まない。その灯りを目指したのが、間違いかも知れなかった。足を止め、もう一度、箱の角を銜えて笛を吹きながら、周りをぐるりと見渡していった。

殆どあらゆる方向から、小さな灯りが湧いて出て、それらがチラチラと揺れながら近付いてくる。笛を已めると止まり、笛を吹くとまた動き出す。合図は

届いたのだ。しかし、或る所まで私に近寄ると、それらは、私が初めに見付けた四角い灯りの方に向きを変えた。私もまた、笛を吹きながら、そちらに向かって歩き出した。そうして私は、小さな灯りを手にした者達に、すっかり取り囲まれていた。彼らが笛の音に引き寄せられているのは、間違いなかった。

　四角い灯りの下まで来て、私は、笛を已め、彼らに混じって、鉄の階段を上り、開けっ放しの扉から、ゾロゾロと明るい部屋に入って行った。天井の高い、幾らでも人の入りそうな広々とした部屋で、部屋の真ん中の太い脚の大きな机の上に、彼が、一人で乗っていた。円椅子に腰を下ろして、膝の上の木の箱を抱えるようにしている。額縁を箱の側面に嵌め込むと、そこから強い光りが出て、額縁の中の絵が、正面のスクリーンに大きく映し出された。それはやはり、人の姿だった。彼に促されて笛を吹くと、その人の姿は白く輝き出して、スクリーンの上で色々に動き回った。その体付きや、肩や背中や腰や脚の線や、手足の指の形には、見覚えがあった。色々思い返しても、他人の体は、一つも浮かばなかった。しかし、私の体でも決してなかった。

　私と一緒に部屋に入った者達は、二人ずつになって、私の笛の音に合わせるように、私の周りで抱き合っていた。手にした灯りで、クネクネと絡む互いの体を、間近に照らし合い、二つの体は、その灯りに溶かされて、輪郭も影も、一つになって行くようだった。そうして、一つになった体が、また別の体と抱

き合って一つになり、段々と人の数が減って行くとしか見えない。
　その中に一つだけ、抱き付こうとされる度に身を躱し、ずっと一人のままで居る人の姿を、見付けた。私は、出来ればそれに抱き付こうと駆け寄った。それは、彼だった。彼は、私から空の箱を奪い、蓋を開けて、箱の中を私の方に向けた。箱の中は光に満ちていて、私の体は、その光に溶けながら、少しも彼と抱き合わないまま、彼の体の中に呑まれて、一つにされて行くようだった。その一つになった体を、私なりに眺め回すと、スクリーンの上でのたうつ体とそっくりに見えた。
　見上げるとしかし、腕も脚も四本ずつある。そこに映し出されているのは、十字に交わる二つの体で、私達の体とは全く別のものだった。それと私達の、どちらかがどちらかの影であれば、何とか収まりが付くようでもあったが、十字の二つの体が、二つのまま、まるで溶け合いそうにないのが、どうにも目障りで、目障りである程、それをとことん見詰めるのを已められず、それで目を遣られたのか、直に何も見えなくなった。その何も見えないのも、また目障りで、無理にも虚空を見詰めなければ気が済まなかった。甲斐あってか、虚空に疲れた目が、そこにただ彼の姿だけを捉えた。
　その彼は、手にした額縁の中の小さな絵を、覗き込んでいた。絵は、光りで焼けたのか、すっかり消えてしまっていたが、私が近付いて行くと、その消え

た中にまた、段々と人の姿が浮かび上がってきた。それは、私の体だった。私は、絵の中で、そこから抜け出そうと、一人で色々に体を動かしていた。絵の中から彼の顔を見上げると、彼の瞳の中に、絵の中の私の姿が映っている。私は、ありとあらゆる恰好を晒して、そこでのたうっている積もりだったが、彼の瞳の中の絵の中の私は、腕と脚をだらしなく拡げて、ただジッとしたままだった。彼が、目を上げて辺りを見回すと、色んな恰好で抱き合う二人の姿が、至る所に転がっていて、それらのどれも、やはり凍ったように動かなかった。

（二〇〇二年九月三日）

＊　　＊　　＊

木の葉

木立の間を真っ直ぐに抜けて行く、濡れたアスファルトの坂道を登っていた。木々の一本一本に謂われがあるらしい。木の脇を通る度に、後ろから、その謂われを語る声が聞こえてくる。私は、決して振り返らなかった。どのようにその声が私の耳に届くのか、知らずにいたかった。木立と坂道が終わると狭い草叢で、まだそう古くない一艘のボートが置き捨てられ、その底は、色とりどり

の木の葉で埋まっていた。木の葉は、カラカラに乾いていて、手を近付けるだけで、掌の熱に煽られるように、縁を反り上がらせ、カサコソと回ったりする。幾つか手に取ったが、どれも違う形をしていた。見上げても、木の枝は何処からも延びていない。少し遠い所に小さな崖が切り立っていて、取り残されて寄り添うように、その上に何本か生えているのは、常緑樹らしい。

　ボートの縁を掴んで、揺らそうとした。木の葉は、私の体の動きに釣られて、丸ごとふわりと浮き上がろうとするようだったが、ボートはビクともしない。ボートに背を向け、舟縁に腰を下ろした。ボートがグラグラと揺れ、私は、尻に痛みを感じて直ぐに腰を上げた。振り返ると、男が、笑いながらもう一方の舟縁を揺すっていて、「ボートに触るには、紙が要る。」と言う。

　私は、尻の小さなポケットに指をこじ入れて、指輪を取り出した。石が取れていて、そこが爪を立てたようになって、尻を刺したに違いない。男は、「そんなものが何の役に立つ。」と言って、笑い声を上げた。指輪を胸のポケットに仕舞おうとすると、ポケットに紙が詰め込んであったので、取り出した。拡げてみると、身分証明書のようだったが、見覚えはない。念入りに、それを細かく千切って、舟底の木の葉の上に紙吹雪を降らせた。男は、笑うのを已め、それを、のろのろと一片ずつ抓み上げて行くが、木の葉が波打って、紙切れは次々に木の葉の中に沈んで行く。それは直に全て見えなくなり、男の掌に残っ

たのは、僅かに五、六片だった。

男は、シャツを捲って、腹を出した。ツルツルした真っ白な肌で、背中からの光りに貫かれて、内臓の影が、朧に透けて見えた。影は、どれも違う色をしている。男が、掌の紙切れを飲み込むと、それらが腹の中を降りて行くのも透けて見えて、内臓の影の中に一片ずつ収まり、そこに一枚ずつラベルを貼ったようになった。

「石を探しに来たのか。」と、男は、私の指を見て言った。私は、指輪をなくしたのに気付いた。足元の草叢を探すと、指輪は直ぐに見付かった。ただ、確かにそれも、石が取れてはいたが、どうも、私の落としたものではないようだ。また探すと、石の取れた指輪は、草の根元の間などに、草に取り付いた虫のように、幾らでも見付かった。私の尻のポケットから出て来た指輪も、私のものではなく、何かの弾みに、勝手にポケットに紛れ込んだだけのものか。

「石を探すのにも、紙が要る。」と言って、男は笑顔を取り戻したが、直ぐに、クルリと後ろを向いて、舟縁に腰を下ろし、私に丸い背中を向けた切りになった。案外小柄で、しかも無防備過ぎるようで、私は戸惑った。木切れを拾って、試しに男の背中に投げてみたくもなる。しかし先ずは、男のしたように、ボートを揺らそうとした。ボートはビクともしなかった。私は、男の背中に木切れを投げ付け、それが背中に当たったどうか確かめないまま、ボートに背を

向けて、舟縁に腰を下ろした。水に浮いているように、ゆっくりと左右に揺れ出した。

ボートは、草叢を分けて、その向こうの暗い方へと滑り出た。乾いた地肌が続くだけのように見えていたが、その上を、空気と見分けられない程に透き通った水が、被さっていた。脹ら脛から下が、その水に浸かって冷たかったが、少しも波立たず、水面には何も映らず、ただ足の感覚だけで水の高さが知れる。

私は、ボートの縁をしっかり掴んで身を乗り出し、重心を出来るだけ前に掛けた。ボートは、私の側に傾き、膝から腿に掛けてまで冷んやりした。そうして低くなった分、揺り戻されて私の側が持ち上がった。そこからまた、勢いを付けて低くなるに違いない。身構えたが、こちらが高くなって傾いたまま、ボートはそこから先へ進まなくなった。舳先が上を向いて、浅瀬に乗り上げたようだ。見下ろすと、男は、仰向けにすっかり水に沈んでいて、のし掛かる舟腹と水底の間に挟まっている。女のように長い髪の毛が、水の中で拡がっているが、傾いた舟底の木の葉が、水の上へゆっくりと流れ出て、隙間なく浮かび、男の体を隠してゆく。どの葉も、少しずつ違う色に見える。

ボートの縁から飛び降りると、水は思いのほか深く、胸の辺りまで浸かった。底の辺りでだけ、水が流れているのが分かって、それに圧されて足が縺れそうになる。流れに逆らわずに足を送り出してさえいれば、倒れずには済みそうだ。

ボートから離れるしかなく、回り込むように崖の方へ向かった。水は、その崖を中心に回っているらしく、それに従うしかない。見る向きが変わっても、崖はずっと崖だった。元々は山で、頂だけ残して、周りを全て削り取られたようでもある。裏へ回っても、崖の上には、青々とした常緑樹しか見えない。何人か、私と同じように、下半身を水に浸けて、崖の周りを巡っていたが、皆、私よりずっと崖の側近くに居て、更に崖に近付いて行くようだった。私とは大分隔たっていたが、声を掛けると、一人一人から、甲高い声が返ってきた。

私だけが、段々と大回りになっていたらしく、一回りして、水の流れから解き放たれた。舟底からすっかり流れ出た木の葉は、それでも隙間を作らずに水面に拡がって、綺麗に、円くボートを取り囲んでいた。そちらに足を向けると、その木の葉の円の中から、いきなり男の体が伸び上がった。体中に濡れた木の葉が纏わり付き、円を歪ませた。男は、木の葉を払おうともせず、艫の方からボートを押した。

ボートの進んで行く先は、お椀を伏せたような小さな山で、山一面、様々に色付いた落葉樹で覆われていた。ボートを囲んでいた木の葉が、航跡のように、ボートの後を帯になって続き、木の葉の円はみるみる萎んで、帯の尻尾になって消えた。その尻尾を掴むようにして、私は後を追った。時々、その尻尾の先が割れて、そこから紙切れが吐き出される。私は、それを一々手に取って、掌

の上に並べていった。もう片方の掌も使って、元通りに並べ直し、数ケ所、欠けているのも特定した。どこも、数字が書き込まれている筈の所で、手元の紙切れには、数字は一つも見て取れなかった。身分証としては、通用しそうにない。

ボートが、山裾の石段に着いた。帯状だった木の葉が、またボートを囲んで円くなってゆく。男は、水から上がり、全身に濡れた木の葉を纏ったまま、石段を登った。石段は直ぐに終わって、男は、振り返った。

「石なら、向こうだ。」と言って、男は、崖の方を指差した。纏わり付いていた木の葉が、早くも乾き始めて、石段の上に舞い落ちてゆく。私は、水に浮く木の葉の円の手前で、下半身を水に浸けたまま立ち止まり、紙切れをくっつけた両掌を、男に翳して見せた。

「紙も向こうだ。」と、男は言って、私に背を向け、山の斜面に向かって、朗々と太い声を張り上げた。歌っているようにも聞こえる。私は、掌の紙切れを全て、引っ掻いて剥がし、一つに丸めて、ボートの中に投げ込んだ。男の声は、已みそうになかった。私は、水に浮いた木の葉を掬い取った。息を掛けると、直ぐに乾いた。そして、その乾いた木の葉も、ボートの中に投げ入れていった。ボートを囲んでいた木の葉を全て舟底に移すと、水が引いていた。男の姿もなかった。木立の間を響いて来る声だけは聞こえて、山を登って行ったに

違いない。
水から上がり、石段を登り掛けると、男の落としていった木の葉が、鳥の羽のようにフワフワと舞い上がって、濡れた下半身に、吸い寄せられるように貼り付いて来る。構わずに石段を登り切った所で、私は動けなくなった。木の葉に覆われた下半身は、石のように硬かった。物音に振り返ると、女が何人か、ボートの周りに群がって、舟底の木の葉を掻き回し、浮き上がってきた紙切れを抓んでは、口に入れていた。頬を膨らませて、紙は、飲み込まずに口に含んでいるらしい。
私と目が合った者から、石段を登ってきて、口移しで、唾でドロドロになった紙切れの幾片かを、私の口に流し込んだ。それから、「男は何処へ行ったのか」と、口々に尋ねた。さっき崖の周りを巡っていた者達と同じ、甲高い声だった。「口を噤んで耳を澄ませれば、男の声が聞き取れるのではないか」と私が答えると、女達は、私の言う通りにして、木立の間を響き渡る男の声を頼りに、山を登っていった。口移しの紙切れが、私の腹の中でグルグルと回り出すと、硬かった下半身が段々と元に戻って、私も、男の声を追う事にした。歩くのに支障はなかったが、木の葉は、ぴったりと貼り付いたままで、愈愈肌に食い込んで、下半身全体に、木の葉の刺青を彫り込んだようだった。木々の葉は、すっかり色付いているのに、地面に、落ち葉は殆ど見当たらない。下草も疎ら

で、土は乾いていた。

　聞こえてくるのが女の声ばかりになって、私は、立ち止まった。離れ離れになってしまったのか、互いを、大声で呼び合っているようだ。それで男の声を掻き消している。だから、離れ離れにもなるのだ。私の声が届くなら、どうして口を噤んだままに出来ないんだと言ってやるところだ。女達が、あちらこちらから斜面を降りて来て、私の前に集まった。皆、足取りも危なっかしい程に、大きな腹をしている。その透けて見えるどの腹の中にも、五色の男の内臓が、食い千切られたように細かくなって、グルグルと回っていた。よく見ると、私の身分証のものに違いない数字も、バラバラにされて回っていた。女達は、連れ立って山を降りようとする。

　別に、男を探しに行く理由も、女達と一緒に居る理由もなく、私はどうすべきか迷ったが、女達の足がひどく遅くて何時でも追い付けそうなので、先ずは、男の行方を確かめる事にした。女達の声は収まっているのに、男の声は聞こえなかった。それでも、そぞろに山頂を目指していると、その少し手前で、そこだけ土の湿って軟らかい、埋め戻したらしい所を見付けた。その縁から、男の長い髪の毛が食み出していては、男が埋まっているに違いない。その辺りを歩き回ったが、他には何も見付からなかった。山頂にも行ってみたが、金色のツルツルした地面しかなく、木々に囲まれて空しか見えなかった。引き返すと、

待っていたのかと疑いたくなる程、直ぐに女達に追い付けた。女達は、木の一本一本について、代わる代わるその謂われを語った。木はどれも、女の名前で呼ばれて、まるで女の一生が語られるかのようだった。特に興味もそそらないが、私は、枝葉を見上げては、それを耳に入れてゆくしかなかった。

　石段を下りて、ボートの脇まで来ると、女達は、舟底のフワフワした木の葉を手に取り、それに、水のような唾を垂らしては、脹れた腹になすり付けていった。そうして、濡れた木の葉で、色とりどりに腹を覆い尽くすと、一斉に、その互いの腹を蹴り始めた。木の葉は、剥がれたりせず、却って肌に食い込んだ。歯を食い縛っている女達の顔が、歪みながら段々と紅潮してゆく。私は、吐きそうになったが、吐けなかった。こんな事になってしまっているのは、崖を登ろうとしていた女達を、私が、ここへ招き寄せてしまったからではないか。私は、石段に立って、出来る限り仰々しく、さっきの男の真似をして崖の方を指差し、「石なら、向こうだ。紙も向こうだ。」と怒鳴った。女達は、一人として、私の方を見向きもしなかったが、蹴り合うのを已め、皆、口をへの字に結んで、赤い顔のまま崖の方に歩き出した。

　今にも産まれそうに腹の大きな女に、崖を登れる筈もない。私は、独り、先を急いだ。崖に辿り着いたら、女達を待たずに、そこを登ろうと思った。しかし私は、何処に向かっているのか。ぐるりと見渡しても、落葉樹の小山と、腹

を抱えてヨタヨタと後を追ってくる女達の他に、何も見て取れなかった。女達の所まで戻って、その向かって行く方を見たが、崖は見えて来ない。女達は多分、私が指差した方向に歩いているだけだ。それなら私は、何処を指差したのか。石段まで戻るしかなかった。

　葉が落ち始めている。その山を背に石段に立っても、見えるのは、少しずつ遠ざかっている筈の、ぷっくりとした腰付きの女達の後ろ姿だけだった。その方向を指差したかどうかも、覚えがない。風もないのに、山全体がカサカサと囁くような響きを立てた。落ち葉が一斉に、山の斜面を滑り落ちていた。山に向かって、男は何を言っていたのだろう。あの太い声に震えたせいで、葉は落ちるのではないか。掘り返して、骸を確かめた訳ではない。落ち葉の響きの湧き出す奥に、男の生の声が隠されているように思えて仕方なく、もうすっかり敷き詰められた落ち葉を踏んで、私は、山を駆け登っていた。

　見当を付けた辺りの落ち葉を掻き分けたが、軟らかい地面も、男の長い髪も、見付からなかった。山頂だけには、葉は積もっていなくて、緩やかな曲線を描いて盛り上がる金色の地面が、際立っていた。そこに立って見渡すと、葉を落として透けてゆく枝の間から、片側にだけ、同じ金色の地面の拡がって行くのが見えて来た。ここは、山頂ではなかった。私は、半分だけ山の形をした、落葉樹で覆われた膨れた斜面を登って来たのだった。木々は、ただの一本もその

斜面を食み出さずに生えていて、その先の平坦な高地は、金色の乾いた地肌を剥き出しにしていた。
　葉が大方落ちてみると、しかしやはり、ここは山頂だった。ここから一続きと見えた高地は、幾らか隔たった所から始まる。そして、その金色の地肌は、片側だけでなく、一段高い所から、この低い山を輪になってぐるりと取り囲んでいた。それを見晴るかす内に、どちらから登ってきたのか、方角を見失った。どちらを向いても、同じように葉を落とした木立と、その背景の金色の高地だけだ。常緑樹を乗せた崖は、金色の高地の下に埋もれたのか。
　落ち葉の滑り落ちる音が途絶えて、静まり返った。下から、男の呼び声が微かに聞こえる。勇んでそちらへ降りて行こうにも、なぜか足が止まって、直ぐ側の木の姿を見上げてしまう。そして、女達から聞かされたその木の謂われを、一々声に出して呟いて、女の一生を語り終えてからでなければ、その木を行き過ぎる事が出来ない。その呟くだけでも、男の声は掻き消され、その度に、静けさの中に耳を澄ませて、それを探り直さなければならない。しかも、ブツブツ言っている内に、その木のすっかり落ちてしまった葉の色が目に浮かび、その謂われと同じ色を、下半身の刺青そっくりの木の葉の中から見付けて、その木と謂われと葉の色を、一々覚え込まなければ先へ進めなかった。
　そうして、木立の間を彷徨いながら、やっと石段まで辿り着いた。石段の途

中まで水が来ていて、横付けにされたボートに、男は乗っていた。私が、男の後ろに乗り込むと、ボートは、水の上を滑り出した。男の髪は、短く刈られていた。

崖が見えて来て、ボートはそこへ、回り込むように近付いたが、さっきと同じように一回りするだけか。男が、ボートを下りると、そこで水は終わって、金色の乾いた地面が、緩やかな傾斜で、崖まで続いた。私もボートを下り、男の後を付いて、艶々した斜面に滑りそうになりながら、垂直に切り立つ高い崖の真下まで来た。見上げると、崖のあちこちに、雨蛙のような恰好の女達が、張り付いていた。それでも、どれも大体、崖の三分の二位までは登っている。別に腹が脹れている訳でもないのに、男も、やはり蛙のような恰好で、腹をぺたりと崖に張り付けて、そこを登り出した。それを見て、私は、急に瞼が重くなり、とても立っていられなくなった。金色の斜面をクルクルと滑り降り、ボートの中に転がり込んだらしい辺りまでは、辛うじて覚えがあった。

眠っていた感じの僅かにも掠め過ぎない、深い眠りだった。そして、目の前に、今にも沈みそうな小さな島が揺れていた。取り残されて寄り添うように、何本か常緑樹が生えていたが、葉の青いのは上の方だけで、下の半分以上は枯れていた。それに気を取られてか、私は、立ち上がっていたようだ。ボートから、その島の硬い地面の縁に転げ落ちた。

その私を、女達が見詰めていた。女達の脹れた腹にぴったり貼り付いていた木の葉は、丸く突き出た臍の辺りを中心に擦り切れていて、そこから透けて見える腹の中に、五色の男の内臓が、食い千切られた形のままで、回っていた。私は、男を探した。女達の中に隠れているに違いない。山に向かって歌うようだった男の声色を使って、大声で呼び掛けると、一人がフラフラと前に出て来た。男だった。女と全く同じように腹を脹らませていたが、その透けて見える中は、ただ透けているだけで、影一つなかった。それを見て、私は、吐きそうになった。私が口を押さえるより早く、男が抱き付いてきて、私の口を吸った。男の喉が鳴って、私の腹の中のものが、そのまま男の喉の奥へと流し込まれた。内臓まで吸い出されるようだった。吸うものが尽きて、男は、私を突き放すと、その場に仰向けに倒れ込んだ。透けた腹の中で、白いものが、ドロドロと回っていた。女達が私に口移しした紙切れの、なれの果てに違いなかった。時間が経っているのに、紙は、消化されても白いままなのか。私の下半身は、また硬くなり、動けなくなった。

女達が、男を囲んで男の腹を裂き、裂け目に手を突っ込んでは、その白い液を競って啜った。それから、女達は、それぞれ木の根元に抱き付いて腰を落とし、木を揺さぶりながら、子供を産み落としていった。股から出て来たものは、男の内臓の五色が渦を巻くように入り交じった、宝石の丸っこい原石のように

も見えた。根はすっかり駄目になっていて、引っこ抜かれた木もあった。私の下半身の刺青のようだった木の葉が、乾いて剥がれ出した。私は、それを、木々の謂われを呟きながら山を下りた時に覚え込んだ通りに、順番に剥がした。石のような赤ん坊達が、私の方に這い寄ってきて、口をいっぱいに拡げる。私は、手にした木の葉と同じ色の口に、順々に木の葉を与えていった。赤ん坊は、それをカサカサと噛み砕いては、呑み込んでいった。木の葉が全て、赤ん坊の腹の中に収まると、女達は私を取り囲み、私の裸の下半身を蹴った。粉々に砕けた私の下半身は、砂のような音を立てて、水縁まで転げ落ちて行った。

男の骸が、ボートに乗せられて流されると、少しだけ水が引いて、島の周りに、金色の濡れた地面が現れ、輪になって島を囲んだ。その上を、私の下半身の粉々になったものが、キラキラと輝いた。どれも、指輪の石にぴったりの大きさではないか。石の取れた指輪が幾ら出て来ても、もう石には事欠かないだろう。女達が凹んだ腹を並べると、その中に数字だけが透けて浮かび、私は、身分証の数字を読み取った。（二〇〇二年九月十五日）

＊

＊

＊

ジグソーパズル

いつも泊まる宿屋とはそんなに離れてはいないが、この辺りに来た事はなかった。人の往来が激しくて、ひどく埃っぽい。私はまだ子供で、青白い髭面の小柄な男に、手を引かれていた。その日だけ、私はその男に預けられていて、そこへ連れ出されたのは、会いたくない人に会うためだった。男に巧く言い包められてしまった。その人は何度か訪ねて来たので、その姿はもう見飽きた程だったのに、初めてこちらから会いに行こうとすると、話しに聞いただけの見知らぬ人のように、その輪郭までがひどくぼやけて、道の途絶えた先の何処か薄暗い所に引き寄せられて行くようだった。

　女の声も聞こえたが、窓越しに呼び掛けてくるような少し遠い声ばかりで、往来に溢れ返っているのは、胸板の厚い大柄な男共が殆どだった。彼らは、ただ真っ直ぐ前を睨み、その思い思いの方向に大股で突き進んだ。怒らせた肩と肩をわざとのようにぶつけ合い、ビシビシと音を立てた。音は響き合って、唸りを上げた。たまに現れる女は必ず、真っ黒に日焼けして、むっつりと口を閉じ、重そうな大きな荷物を前屈みになって背負い、やはり足早に行き過ぎた。荷物は、硝子瓶がびっしり詰まっているに違いなく、ギシギシと硝子の擦れ合う音を立てて左右に振り立てられたので、小さい私には、男共と全く同じに恐

ろしかった。
　そんな中で、髭面の男は、擦れ違う者達に散々小突かれて、耐え難いようなムッとした赤ら顔になっている。しかし、男は、この辺りをよく知っているのではなかったから。私を言い包めた時の口振りでは、そんな感じだった。確かに初めの内は、よく撓る木の棒を得意げに振り回して、近付いてくる者を寄せ付けずにいた。それが直に、その棒を杖にして、寄り掛かるのがやっとになってしまった。尤も、そのふらつく杖と男の体の間に挟まって、辛うじて私は守られていた。逃げ場はない。
　喉の奥までカラカラになって唾も出なくなると、大きな構えの果物屋の店先で、私は、迷わず駆け込んだ。振り返ると、髭面の男は、私の狭い溝を跨いで、隣の小さな薬屋に入ろうとしている。歪んで傾いた肩は、私の方を振り向きそうにない。私を果物屋まで連れて来るのが、彼の役目だったかのようでもある。
　店の中は、地面が泥濘んでいるせいか、ひんやりしていた。目が慣れても闇のままの、高い天井を見上げていると、魚臭いベタベタしたものに、顔からぶつかった。汗塗れのでっぷりした男の腹で、その柔らかい肌に顔が埋まって、私は、肉の中に吸い込まれそうだ。男のギョロ目が間近に私を見下ろし、直ぐに離れたかったが、男の肌に頬っぺたが貼り付いて、動きが取れない気がした。
男は、小さな円椅子に掛けていて、左手で、赤茶けた食い掛けの大きな果物を

地面から拾い上げ、大口を開けて、一囓りした。そのブヨブヨした唇の間から、腹よりずっとひどい匂いの息が吐き出され、囓ったものも果物には見えなくなった。

男が急に大きく息を吸い、その反り返った腹に弾かれた私は、よろめいて後退った。男の汗が、私の顔一面に、粘っこくへばり付いている。それは、空気に触れて魚の腐ったような匂いを出し、私の顔に染み込んで来るようだ。そうして、その匂いに頭の芯まで侵されれば、私の頭は、ポトリと落ちてしまうのではないか。男が囓ったのは、そんな子供の頭かも知れないと思えて、私は、男の左手に目を遣った。その食い掛けの塊の端からとろけたものが、ボタボタと零れ落ち、その下の地面は、渦を巻いて薄く盛り上がっていたが、地面と同じ色をしていて、地面の中にゆっくりと浸みて行くようでもあった。

男が立ち上がり、目の前は、その垂れた腹の肉が揺れて波打つだけになった。それに釣られて、私の足は縺れ、尻餅を搗きそうになった。手を付くと水溜まりで、しゃがみ直して両手で水を掬った。掌の底を、ザラリと泥が撫でたが、それで顔を洗うしかない。顔にへばり付いた男の汗は、乾き掛けて、私の顔を皺くちゃにしそうだった。

左の頬に風が当たって、草の匂いがした。風の方を向くと、少し離れた壁も何もない所に、ドアだけが開いていて、その脇に、痩せた男が、突っ立って微

笑んでいる。男が、濡れた長い髪を掻き上げると、そこから、草の匂いが香り出すように見えた。ドアの暗い奥は、風が鳴っている。

　男の微笑みに応える積もりで、掬った泥水をそっと水溜まりに戻すと、その戻した水だけ色が違って、それは、魚の青っぽい影のように、揺れながら斜めに沈んだ。掌の底に残った泥の色も、魚のように青い。両手を水溜まりに浸してその泥を落としてゆくと、掌から魚が何匹も放たれるようで、それらは、そのまま水溜まりの中を泳ぎ回った。それは何匹なのか。私は、身を乗り出して、どれか一匹でも掴み取ろうとした。腕が、自ずと、水の中に深く差し込まれ、更に誰かに尻を押されたような気がして、私は、四つん這いになって、すっかり水溜まりに入ってしまっていた。腹まで水に浸かって、水を飲まないためには、口を結んでいなければならない。水面スレスレからでは、魚は見えない。

　キョロキョロしている内に、水底がひどくヌルヌルして、四つん這いのまま、進む事も戻る事も出来なくなった。水面は、隅々まで真っ青で、私の体まで、それに染まりそうだ。ドアの脇の痩せた男に、私が何色に見えるか尋ねようと顔を上げると、顔の魚の腐ったような匂いが耐え難くなって、私は、長い金切り声を上げた。痩せた男が、耳を塞いで近付いて来て、私を水溜まりから抱き上げた。それでも私の金切り声は已まず、自分の声でないようだった。男は、ずぶ濡れの私を負んぶしてドアに引き返し、吹き上がる冷えた風に逆らって、

ドアの奥の階段を駆け下りた。金切り声は、その途中の何処かで已んでいた。
顔の魚の腐ったような匂いは、多分、少しも変わらないが、私の鼻は、それだけを嗅がずにいられるのかも知れない。階段の下は、草の匂いと水の匂いが入り混じっていた。ほんの少し顔の向きを変えるだけで、二つの匂いは入れ替わる。男が私を残して階段を駆け上ると、直ぐ横に、コップを手にした色の白い女がしゃがみ込んでいて、「喚いてたのは、あなたなの？」と、呟くように尋ねてきた。その女の両脇にぴったりくっついて、男二人が、やはりしゃがみ込んでいて、一人が、「子供の相手なんかするな。」と言うと、直ぐにもう一人が、「魚ならあっちだ。」と、鼻声で奥の方を指差した。三人とも酒臭くて、私が、その指差された方に歩き出そうとすると、男二人に耳を舐められた女が、けたたましく笑った。
コンクリートの床は、直にボロボロに砕けて終わり、地肌が剥き出しになったその直ぐ先は、円い池だった。池の縁に、大柄な三人の男が、肩を寄せ合い、脂の浮いた眠そうな顔で、釣り糸を垂れて腰を下ろしている。近付くと、その後ろにもう一人居て、びしょ濡れで横になって、呻きながら盛んに寝返りを打っている。階段を駆け上った筈の痩せた男が、息を切らして遣って来て、私に小さな包みを手渡し、「戻るなら今の内だ。」と言って、直ぐまた階段の方に身を翻した。私には、その言葉が、「仕舞うなら今の内だ。」とも聞こえて、受け

取った包みを、慌てて胸にねじ込んだ。

階段の下で、女と男二人は、階段に背を向けて立ち上がっていて、抱き合ったまま、高ぶった調子で何やら喚き立てている。三人共、かなり足元が怪しいが、階段の方に向き直りそうになると、急に醒めた目になって、しっかりと踏み止まった。その階段の上のドアを、ギョロ目の太った男の体が、隙間なく塞いでいた。臍の辺りで捩れる程に肉の弛んだその腹は、ドアより幅があって、通り抜けられずにいるのだ。そこへ向かって、痩せた男が、ぎこちない足取りながら、しっかり顎を引いて、勢い良く駆け上って行く。私は、目を背けた。

一人、横になって呻いているのは、どう見ても、昨日までずっと私と一緒に居た者だった。今日だけ私を人に預けたのは、大人だけの演奏会でギターを弾くためだと言っていた。それがどうして、こんな薄暗い地下の池の脇で、転げ回っているのか。それに、この者は、男だったろうか、女だったろうか。服は泥塗れで、男モノか女モノか分からない。ただ、もし、この者が男なら、女の服を着ているに違いなく、女なら、男の服を着ているに違いない。別の性を装っているのは確かだ。そうして性を偽った方が旅をするのに何かと好都合だと、何時も聞かされていたが、それが男装だったか女装だったかが思い出せない。

男と女と、どちらが旅をし易いか考えてみたが、何も浮かばなかった。

「何が釣れるんですか？」と、私は、男達に尋ねた。黙っているので、顔を

覗き込むと、どれも石で出来ていた。腰を下ろす恰好の石の彫像に、服を着せ、靴を履かせ、手袋をはめ、帽子を目深に被せたものだった。私は、池の水に手を浸けようとした。水の表面は石のように硬く、ツルツルに磨かれた石に、水の色が塗られているらしかった。また、顔の魚の腐ったような匂いが、鼻に襲い掛かって来て、自分の声でないような金切り声を上げなければならなくなった。

男二人を振り払って、女だけが、私の金切り声に調子を合わせようとする積もりか、歌うような笑い声を振り撒いて、踊りながら近付いて来た。男二人は、口を閉ざし、怯えるような目をしていた。女を取り返したいが、恐くて、それより池の方には近付けず、どうにも出来ないでいるようだ。

「子供と思ったら、あなたの顔は皺くちゃなのね。」と、女は言った。それを聞いただけで、私の金切り声は已んだ。私は、石の水に、顔を映した。そこへ、私の顔から、泥の色をした雫がポタポタと落ちて行った。こびり付いて干涸らびた男の汗が、溶け出しているのであれば良いが…。それは初め、石の水の上を玉のように弾けていたが、段々と魚の形になって、石の水の上っ面を溶かし、沈みながら泳ぎ出すようだった。その内に、雫は、初めから魚の形で、音も立てずにスッと水に沈んで直ぐに泳ぎ出したが、泥の色をしたままだった。

私は、池の縁をきつく掴んでいて、突っ張っている両腕は、硬そうな肉が盛り

上がり、日焼けした肌はギラギラと輝いて、すっかり大人のものだった。その腕で私は、三つ並んだ彫像を揺さぶった。池の水が戻ったのなら、彫像も、血の通った男の体に戻りそうではないか。

　女は、スカートをたくし上げ、池に入って、喚き声を立てて、水を蹴ったり、両手で跳ね上げたりした。池全体に、深い波紋が入り組んだ。離れた所で見ている男二人には、それは耐え難いようで、後ろを振り返り振り返りしながら、階段の方へと駆け出した。階段の上のドアには、まだ、太った男の腹が挟まったままで、痩せた男は、そこへ頭から突っ込むが、跳ね返されて、階段を転げ落ちた。顔も手足も痣だらけで、同じ事を繰り返しているらしかった。また階段を勢い付けて駆け上ろうとする男を、駆け戻った男二人が、両側から腕を抱えて引き留めた。釣り人の彫像は、硬いままビクともしなかった。

　「石の池に入って、石になったらどうするんですか？」と、私は、女に尋ねた。女は、甲高い声を長々と引き延ばし、歌っているようでもあった。その声に、波打つ水の表面が、細かく震えるかとも見えた。女は、声を止め、

　「じゃあ、顔を洗うなら、今の内かしらね。」と、水の上に出た上半身をクルリと回しながら、私からそっぽを向いて言った。私は、水に映る自分の顔を見て取ろうとしたが、水面が波打って震えていては見える筈もない。仕方なく、手で顔を撫で回してみると、皺くちゃでもなく、汗でベタベタしてもいなかっ

た。それならと、じっくり時間を掛けて顔を撫で回し、その手に感じ取れた凹凸の感触だけで、自分の顔を目に浮かべようとした。そうして浮かんできたのは、今日私が会いに行こうとしている、会いたくない人の顔だった。体を眺め回しても、その人の体付きに違いない。体の匂いを嗅ぐと、強烈な魚の腐った匂いがしたが、その少しも苦にならなかった。私は、頭から池に飛び込んだ。

　水の中は真っ青で、向きを変えてばかりの泥の色の魚が、そこら中でぶつかり合って、池の底を掻き回している。水の上に顔を出すと、女は、池の縁を、両腕を拡げて平衡を取って、爪先立ちで歩いていた。白い脚が、交互に振り出される。私も、それとそっくりな脚をしているのではないか。立ち上がろうとすると、却って顔まで水に沈んだ。水の中でも、自分の脚は見える筈だ。目を開けようとすると、却ってきつく閉じ合わさるようだった。咄嗟に、胸に手を突っ込んで包みを取り出すと、それだけは目に見える。包みは、丸い帽子のような形で、中に、封筒が束になっていた。私は、それらを、真っ白な平らな池の底に、カルタを並べるように、縦横に揃えて置いていった。封筒の表には、様々な風景画が描かれていて、池の底は賑やかに彩られていった。水の中は、全く透明になって、そこへドブンと音を立てて入って来た、泡を纏った女の下半身の輪郭も、くっきりと見て取れた。泥の色の魚達は、何処へ行ってしまったのか。

女の下半身が近付いて来て、私は、封筒の束を拡げてしまったのを悔いた。女は、今にもそれらを蹴散らしそうだった。私は、空の包みだけを胸に押し込み、水の中から体を起こそうとしたが、私の足は、虚しく水を蹴るだけだった。その足が、やっと池の底を掠めただろうか。並べた封筒が、一斉に水底から浮き上がり、私の体は、誰かに抱き上げられるようだ。私は、封筒を一通でも掴み取ろうと、慌てて水を掻いた。

池の真ん中で、上半身を水から出した女が、片腕を振り上げていた。その手は、尻尾を激しく振る泥の色の魚を掴んでいた。その側で私は、誰かに抱き上げられたままでいたが、女は、手にした魚を指先だけで乱暴に二つに裂いて、それを池の外に放った。女はその場を動かずに、体を時計と反対回りに回しては、腕を水に突っ込んで魚を掴み取り、同じように裂いて、次々に放った。腕の動きは素速さを増し、魚は、幾らでも獲れた。水面まで浮かび上がった封筒も、その内に、ゆるゆると時計と反対回りに回り出した。

私は、封筒を一通だけ掴み取っていた。封を切って、中の手紙を読むと、昨日までずっと私と一緒に居た者が、私を騙して怪しい場所に出入りしている事が、書き連ねてあった。そして、その当人が、私を抱き上げて、私の読んでいる手紙を覗き込んでいた。私が、手紙を裂くのと同時に、私の体は、池の外に放り出され、裂かれた魚の肉が飛び散っている上を、滑って転がった。

金切り声が鳴り渡り、私の体を震わせたが、私の口から出たものではなかった。そちらに目を遣ると、階段の上のドアに挟まったままの男の腹が裂け、痩せた男が、その裂け目に腕を突っ込んで、青っぽい色の泥を掻き出している。幾らか泥を掻き出しても、男の腹は萎んだりせず、ドアに挟まるままのようだ。階段はもう、上から下までその泥に塗れていて、その下で、泥の塊が二つ盛り上がった。泥塗れの男二人が、震えながら立ち上がろうとしている。二人に絡まれては厄介なので、私は、先に立ち上がろうとした。私の体も、上から下まで、魚の肉に塗れて、見掛けは肉団子と変わりないだろう。せめて何処に頭があるか位、はっきりさせようと、胸から空の包みを出し、その形の通り、帽子として頭に被った。男二人は、そんな帽子を持ち合わせていないからか、その場にへたり込んで、尚も流れ落ちてくる泥に埋もれた。

　魚の肉を振り落としながら池に戻ると、池の真ん中で、上半身を水から出した二人が、互いの背中を撫で回しながら、一つの体に見えてしまう程、ぴったりと抱き合っていた。私は、頭から池に飛び込んだ。池の表面は、石のように硬くツルツルしていて、俯せの私の体は、その上を滑って、二人の脇を通り過ぎてやっと止まった。私は、なるべく二人から目を逸らし、這い回って、石の水の表面の封筒を剥がしては、中の手紙を読んでいった。一通一通内容は違うが、どれも、今女と抱き合っている、昨日までずっと私と一緒に居た者の行状

を暴き立てていた。背中を撫で回していた二人の腕が、動かなくなっている。二人もまた石になったのだと決め付けて、私は、手紙を全て細かく破って池の上に撒き散らし、色とりどりの封筒は束にして胸に押し込み、池から下りた。

階段は泥塗れのヌルヌルだし、ドアは男の腹で塞がったままだ。上に出ようとすれば、他を当たるしかない。まだ体のあちこちにこびり付いている魚の肉を口に運んでは空腹を紛らし、池の奥に向かってグングン歩いて行ったが、緩い上りが何時の間にか下りになると、その先に見えてくるのは、決まって元の石の池だった。ずっと、真っ直ぐ前だけを睨んで歩いている積もりだったので、堂々巡りをしている気はしなかった。同じに見えるが、池は一つ一つ違うのかも知れない。二人の姿は、なくなっていた。私に隠れて、石の水の中で、抱き合ったまま横になっているに違いない。

薬屋に入っていった髭面の男の名を、知らず知らず呼んでいた。魚の肉を食い尽くすと、足は止まり、男の名前も忘れて、その場でまた、胸に押し込んだ封筒を、縦横に並べていった。それぞれ別の風景だったのが、ジグソーパズルのように、全体で一つの絵が、輪郭を取り始めた。それは風景ではなく、池の底を描いていないだろうか。赤く細い根っこが、池の底を縦横に巡り、男の囓っていた果物が、まだ青い色をして生っていて、まだ太る前のその男が、水に潜って、それをもごうとしている。

私は、その絵を蹴散らし、来た道を急いで戻った。上りも下りもない何もない所を、このままずっと何もないのではないかと危ぶみながら、長い間走り続けて、やっと元の池に戻った。澄んだ水の中で、青い魚が二匹、ジッと動かずに並んでいる。水に入ってその魚を掴み取ろうとすると、池の水は、みるみる濁って、青っぽい泥の池になった。二匹はそれを喜ぶように、泥から跳ね上がり、白い腹を見せて、激しく身を振り立てて絡み合った。私は、それを追って、泥ばかりを掴み取っていたが、頭に被っていたものを泥に浸すと、直ぐに魚の方からそこに入って来た。私は、その包みの口をきつく閉じて、それを胸に押し込んだ。それからまた段々と水が澄んで、私は、水に潜って、池の底の果物を探した。入れた包みが胸から零れると、それは果物にそっくりだった。拾おうとしても、すばしこく動き回って、触る事も出来ない。他には何も見付からなかった。

諦めて水から顔を上げると、肩に湿布薬を貼った髭面の小柄な男が、池の縁に立っていた。子供の私は、池から出て、男に手を引かれ、乾いた暖かい風の降りてくる、別の短い階段を上った。上は薬屋で、低い天井にずらりと並んだ蛍光灯が煌々と照り、明る過ぎる店の中は、何時まで経っても目が慣れなかった。口を尖らせたすらりとした若い女が、壁際の棚と間近に向き合い、手に取った黄色い小さな硝子瓶を顔に近付け、ラベルに印刷された能書きにジッと目

を凝らしている。（二〇〇二年十月九日）

＊　　＊　　＊

逆

　葉を全て落とした縦横に延び拡がる赤っぽい枝が、空いっぱいに、網を掛けたようだった。そこに高くまで登ってる太い枝を跨いでいる男が、遠くを眺めている。私は、木の根元に仰向けに横になって、それを見上げていた。かなりの大木で、木はその一本だけだった。空は、空色にうっすらと明るい。男は裸足で、男のものなのか、私の胸の上に、ビニールの靴が一足、揃えてある。私が目を覚ましたのは、その男に、耳元で何か囁かれたからだろうか。靴を払い除けて、ひんやりした幹にしがみ付きながら半身を起こすと、木の中に埋め込まれた大きなエンジンが、爆音を鳴らすようだった。音は、そのまま私の胸に伝って、心臓をグラグラさせた。私はまた、湿った草の上に仰向けになった。男は、長い髪を向かい風に靡かせていたが、その風は、木の根元には少しも吹かなかった。何が風を遮るのか、私は、体を捻って俯せになりながら、その風の来る方に顔を向けようとした。腰が草の上を勝手に滑って、私は、逆の方を向

いたようだった。
　そこから緩い草の斜面を下った先の円い窪地で、十人くらいの男女が、輪になった踊っている。暮れ掛けた陽が、窪地の剥き出しの地肌ばかりを照らすようで、跳ね回る彼らの足が、明るく淡い色に滲んだ。いきなり踊りの輪が解け、彼らは、肩を寄せ合って、私の方に斜面を上ってくる。踊っている時は男女と見えたが、皆、真っ白な柔らかそうな服を着ていて、その服が風を孕み、ふっくらした女ばかりに見せた。私は、草の上の左手首に耳を押し付けて、細かな振動を微かに聞き取っていた。先頭の女は、もう直ぐ側まで来ていて、俯せの私を見下ろし、時間を尋ねた。首を起こし左手首を上げると、嵌めていた腕時計の革のバンドはボロボロで、私の息が掛かると直ぐにバラバラに千切れて、腕時計の中に消えた。円い時計の部分だけが、三日月型に縁を輝かせて、草の上を跳ねて転がった。女はそれを拾おうとして、ビニールの靴の片方を見付けたようで、それを拾い上げた。転がった時計が、その靴の中の透明な爪先に入り込んでいるのが、歪んで見えた。女は、靴を受話器のように耳に当て、その時を刻む音に聞き入るようだった。
　後に続いてきた女達は、辺りに散らばっていた。腰を落とし、腕を振って、手刀で草を払っては、歩き回っている。そして、一人が、もう片方の靴を拾い上げると、一斉にその周りに駆け寄り、靴を奪い合って、それを自分の耳に押

し当てようとした。
私は、起き上がりたかったが、木の方を向いて、その根元にしがみ付いても、また心臓がグラグラするだけだ。手を貸してくれと頼んでも、誰も相手にしてくれそうになく、巧く口実を設けて、私に手を差し伸べるよう仕向けるしかない。しかし、何も思い浮かばず、代わりに、口を衝いて出るままの歌の一節を、まるで涎でも垂らすかのように口ずさんでいた。靴を奪い合っていた内の、もう靴に興味をなくしたような一人が、私の方にそっと歩み寄り、腰を高くしたまま、膝に胸を押し付けるまで腰を折って、私の口に、耳を近付けて来た。そんな姿勢の女の腕に縋っても、女を草の上に押し倒すだけだ。間近の、上気した女の顔から出る熱が、私の額に溜め込まれるようで煩わしい。口を閉じたかったが、歌の一節は、少しずつ歌詞を変えながら、次々に継ぎ足されて止まらない。
開き掛けの女の唇から涎が垂れているのが見えて、私の口は閉じた。それから私は直ぐに、女の耳に向かって、「涎が…」と言い掛けた。女は、唇の端を指先で拭いながら素速く顔を上げ、腰を伸ばしてから、不愉快そうな顔付きで、私に手を差し伸べた。私は、その冷たい手を掴んで体を起こし掛けたが、いきなり女は、私の手を激しく振り払った。浮いた腰を中心に、私の体は、クルリと回ったようだ。別の女が、その私の左手首を受け止めて、そこに、二重三重

に縄をきつく巻き付けた。脈が、浮き上がるようにズキズキと痛んで、私は、草の上をクネクネと這い回る、銀色の光跡のようなものを目で追っていた。
「靴を返してくれませんか。」と、私は、絶え絶えに、縛った縄の上から私の手首を掴む女に向かって、頼んだ。暗くて見難いが、女は微笑んでいるようだった。別の女が、私の頬に頬を擦り寄せてきて、
「今、何時か、教えてくれたらね。」と、低く囁いた。時計を入れた靴を受話器のように耳に当てる女だった。銀色の光跡は、私達の足元を這い回り続け、私は、目を離せなくて、女に言葉を返せそうになかった。その女に向かって、
「時間が分かると、どうなるの？」と、目を丸く見開いて、私の手首を掴む女が尋ねた。
　私の口ずさんでいた歌が、甲高い女の声で歌われ出した。私の口に耳を近付けて歌を聴き取った女だろう。その女は、万歳をした両腕を柔らかく左右に振りながら、また窪地の方へと、斜面を下りて行く。他の女達は、手を繋いで後を追った。私に纏わり付く二人だけは、付いて行かなかった。
　光るものが見当たらないのに、光跡ばかりが見えてしまうのは、手首を縄で締め付けられるからに違いない。女の手を振り払おうとすると、縄は、何時の間にか、水平より少し低い角度を向いた枝に、何重にもグルグル巻きに縛り付けられていて、私の左腕は、水平より少し高い角度に伸ばされたまま、殆ど動

きが利かなくなっていた。手首は、すっかり痺れて痛みすら感じられず、左腕は、青白く痩せ細ったようにさえ見える。私の手首を掴んでいた女は、縄を縛った枝にぶら下がり、私の方を見ながら体を揺すって、枝を撓らせた。私の両足は、それに釣られて軽く浮き上がった。足元の光跡が消えていた。私は、靴を耳に当てる女を振り返り、

「時間を知りたかったんですよね。でも、手首が痺れてしまっては、もう分かりません。」と、言った。靴を耳に当てる女は、私の言う事など興味ないかのように、ジッと自らの足元を見詰めていた。右足を前に踏み出していて、その下に何かを踏ん付けているようだった。私は、

「そうだ、何が光っていたんだろう。」と、やや芝居掛かって、独り言のように言った。女は、腰を折って、踏ん付けているものを抓み上げた。銀色の羽を激しく震わせる、脹れた青黒い腹をした大きな蛾だった。女は、それを私の鼻先に突き付けながら、

「つまりあなたは、血の巡りで、時を計っているのね。」と、弾む声で言った。私は、何も考えないまま、

「ええ、心臓の鼓動でね。」と、同じ調子で言葉を継いだ。

「心臓？」と言って、女は、蛾を抓む指を開いた。蛾は、片方の羽が少し欠けたらしく、私達の周りを、ほぼ同じ軌道を描いて、傾いたまま飛び続けた。

それから女は、その蛾の羽の粉の付いた銀色の指先を、私の胸に鋭く差し込んで来た。私は、その骨張った指で、心臓が抓み出されるような気がしたが、女の手は、私の胸のポケットに突っ込まれて、そこから、ドングリのような形の白い木の実を、何粒か纏めて掴み出していた。私には、覚えのないものだった。

「ひょっとして、私の心臓なんですか。」と、少し戯けた調子で尋ねた積もりだったが、その声は、平板で真面目腐ったように聞こえた。女は、無表情で、私の胸のポケットの中を覗き込んだ。その奥に、自らの顔でも映るのか、乱れた髪を整えるような手付きをしたり、顔の向きを変えて、眉に指を這わせるような事をした。私は、胸の底がひんやりするようで、ポケットの中に、何か見えるのか尋ねようとすると、

「もしそうなら、時間が分かる？」と言って、女は、微かに口元を綻ばせて顔を上げ、片手の細く尖った指先だけで、硬そうな木の実の皮を器用に剥いていった。中の実は、蛾の腹と似た青黒い色に輝いて、女はその実だけを、指先で弾いては、辺りに飛ばした。一粒でも手に取ってみたくて、私は、それを目で追ったが、見えるのはどれも、空中を飛び上がるところまでだった。枝にぶら下がる女が、また体を揺すったようで、私はまた、フワリと足を浮かせた。足元で光跡が甦っていたが、それが、猛スピードで草を掻き分けて転げ回る、銀色の羽の蛾であると、直ぐに分かった。蛾は、同じ所ばかりを小さく回り出

し、飛び散ったその羽の粉が草の葉に塗されて、そこに段々と、小さな銀色の輪が描かれた。私は、その真ん中に、たっぷりとした唾を一つ吐いた。唾もまた、銀色に輝くようだったが、中に赤い血が少し混じっているのが見えると、締め付けられている左手首が、また、脈に従ってズキズキと痛み出した。私は、その一々血管を切り裂くような脈を、痛みを紛らすように計るしかなかった。

　女は、腰を屈めて、木の実の皮ばかりを零れんばかりに握った手の指で、そっと蛾を抓んだ。羽は動きを止めていた。それから女はそれを、私の吐いた唾の上に横たえた。もう死んでいるような蛾だったが、唾の上を滑って、ゆっくりと向きを変えながら、仰向けの腹は、微かに震えるようだ。その姿が、時を計っているようにも見えた。唾で濡れた青黒い腹の縁のピンクの細かな筋が、短い間隔でチカチカと輝いて、時を刻む規則正しい音が聞こえてくるようではないか。女は、腰を屈めたまま暫くそれを見詰めてから、ずっと耳に当てていた靴を、草の上に放って、満足そうな笑みを浮かべた。その笑みに向かって、すかさず私は、

　「それで、時間が分かるでしょう。」と言って、左手首の縄を解かせようと、枝にぶら下がる女に掴み掛かろうとした。女は、目を丸くして私の手を避け、素速く枝の上に飛び乗った。とても小柄で、しなやかそうな剥き出しの黒い両脚が、目の前に眺められた。それは、揺れる枝の上をキビキビと動いて、平衡

を取るようだった。女の匂いはしない。女でないのかも知れない。その脚の持ち主は直ぐに、私と反対側に飛び降り、草の中に姿を消した。その辺りから、急に草の丈が高くなっている。そのざわつく草の中から、同じ種類の銀色の蛾が、次々に驚いたように飛び出し、枝の間をジグザグに縫って、高くへと舞い上がった。空は、空色ではなく、すっかり赤味を帯びていた。

「解いて欲しいなら、私が頼んであげようか。でも、何かで締め付けてないと、手首が寂しくない？」と、後ろから、笑いを噛み殺すような女の声が聞こえた。私は、振り返った。

「誰に？」木に登って遠くを眺める男にか。他には居ない。

そのしゃがんでいた女は、笑顔で立ち上がり、丸いままの背中を傾けて、高い所を指差した。私は、見上げなかった。別に人に頼らなくても、右手は空いているのだから自分で縄を解けば済む。その私の右手に、女は、白い木の実の皮を全て掴ませて、

「あなたは横にならないとね。あなたも、そろそろ、時間を知らなくちゃいけないでしょう。」と言って、手ぶらで窪地の方に行き掛けた。

「そんな筈はない。時間が分かったからと言って、何もかも分かったような振りをしたって、通じませんよ。」と、私が言うと、女は、私に見せ付けるように、直ぐに踊るような足取りで戻り、私から目を逸らして、

「じゃあ、何をしなくちゃいけないなんて事は、あなたにはないのね。」と言ってから、さっき私の口ずさんだ歌をいい加減に鼻歌で歌って、草の上のビニールの靴を、左右の手で片方ずつ拾い上げ、それを振り回すようにして、また斜面を下っていった。振り上げられる度に、靴の縁が、窪地の方からの光りを受けて、魚の頭のような形に白く光った。窪地では、先に行った女達が、輪になって踊っていた。そこでは、暮れ掛けていた陽が、逆に幾らか輝きを取り戻したようで、女達の全身の輪郭を淡い色に滲ませて、それはぼんやりと燃え立つようだった。さっきより明るくなったのだとしても、まさか、陽が昇り出す訳でもないだろう。空気の淀みは、間違いなく夕暮れのものだ。

その更に先の黒っぽい坂道を、五、六人の男達が、ゆっくりと上って行くようだったが、その上る姿のまま、彼らは、段々と窪地の方に下りて来ていて、斜面で腕を拡げて独楽のように回ったりしているビニールの靴を持つ女より先に、踊りの輪の直ぐ側まで近付いていた。男達は、黒っぽい服を着ていたが、踊っている女達よりも、その輪郭をくっきりと輝かせた。

握らされた右手を拡げると、白い木の実の皮は、ネバネバと指に纏わり付いて、振るい落とそうとしても全く駄目だった。歯を立てて囓るようにしても、皮は、歯の動きを躱して、指の股へと擦り抜けて行く。右手が、唾だらけになるだけだった。その手を草に擦り付けたいが、左腕を縄に持ち上げられたままで

は、腰を落とす事も出来ない。女に蹴散らされたのか、草に描かれた銀色の小さな輪も、唾の上で震える蛾の姿も、見当たらなかった。女がわざと蹴散らして行ったのなら、女は、私を、時間の外に置き去りにしようとでも企んだのか。その代わりに、皮を剥かれた青黒い木の実が、尖った草の先に、露のように乗っているのを見付けた。それらは、私を取り巻いて、綺麗に円く並んでいた。

その円の中に留まれば、私次第で、時を計ろうとも出来るだろうか。窪地の者達を真似る積もりで、独りで踊り出した。そこに、窪地の方では、男達も混じって、踊りは、先程よりずっと激しかった。そこに、ビニールの靴を持つ女が加わると、激しさは急に和らいで、踊りの輪はうねるような動きを始めた。その動きから、私が口ずさんだ歌が聞き取れる訳ではないが、どんな歌だっかか思い出そうとしただけで、彼らの踊りは、みるみるその歌に合わさっていった。女は、ビニールの靴を、踊りの輪の真ん中に放った。遠いし、彼らの足の間に見え隠れして見難いが、その靴は、妙に光り輝いていた。火が着けられて、燃えているのだろうか。その爪先の小さな時計が、炎の中で、パチパチと火花を吹いて、細かく砕け散って行くのも、一瞬見えたように思えた。

私は、その場で足踏みしながら、クルクルと回った。木の実の円から、決して食み出さないと決めていて、だからこそ、草を蹴り上げて、激しい動きに身を任せられた。手首の痛みさえ、気にならなくなった。丈の高い草の中に、二

つの目が、その私を見詰めるように丸く光っているのを、見付けた。私は、その目に目配せして、草から出て私と一緒に踊るよう誘った積もりだったが、却って警戒されたかも知れない。クルクル回ったせいだろう、縄は、グルグル巻きの枝の結び目の方で、解けた。手首の方は縛られたままだ。私は、つんのめって、丸い目の光る方へよろめきながら突っ込んで、密集した硬い草の葉の上に、俯せに倒れ込んだ。

いや、その倒れ込んだのは、私ではない。木の上で遠くを眺めていた、髪の長い男に違いない。私は、相変わらず枝に結ばれたままの縄に、左腕を取られて、木の実の円の中で、つんのめって斜めにはなっていたが、何とか立っていた。私は、草の中でゆっくりと仰向けになろうとする男に向かって、

「縄を結び直したのは、あなたですか。」と尋ねた。男は黙って軽く頷いた。自分で尋ねておきながら、すんなり首を縦に振られると、却って信じられなかった。「また凄い早業ですね」と言おうとすると、草の中に隠れていた筈の者が、木の実の皮のこびり付くままの私の右手を取って、口に含んでいた。顔付きからして、若い男のようだ。細い日焼けした項の肌はスベスベしていて、光らせていた丸い目は、切れ長で、閉じ掛けて濡れていた。その口の中で指を舐められるだけで、木の実の皮は、直ぐに私の指を離れた。そうして、口の中を木の実の皮でいっぱいにし、頬を脹らませた若い男は、尚も私の指にしゃぶり

つくまま、また吃驚したような丸い目で、私を見上げた。
「呑み込め。」と、髪の長い男が囁いた。言われた通りにしたようだが、木の実の皮は、一塊りになって喉に詰まったようで、若い男は、剥き出しの黒い脚をバタバタさせて、私の周りを転げ回った。私を円く囲んでいた皮を剥かれた木の実が、全て、草の中に蹴散らされた。私は、何とか彼を掴まえて抱き起こし、きつく口付けをして、その口の中に思い切り息を吹き込んだ。喉に詰まっていた木の実の皮が、音を立てて食道を突き破り、男の体の中のあちこちに、細かく砕けて飛び散って行くようだった。抱いている体が、木の実の皮のように硬くなって行く。

　若い男は、私の腕を振り払い、女のような声を張り上げた。まだ声変わりしていない程に若いのだ。その男の唾で濡れたままの私の口から、さっきと同じ歌が、洩れて出た。それに合わせて、男は、その高く張り上げる声のまま、その同じ歌を朗々と歌い出して、木の幹にしがみつくと、腰から下をクネクネさせて、そこを登り始めた。彼の剥き出しの脚が、木の実の皮とそっくりの、白い色に見えた。恐らく、白いのは脚ばかりではないだろう。私は、綺麗になった右手で、枝に縛り付けられた縄の結び目を解き、直ぐに後を追おうとした。エンジンの爆音は已んでいたが、幹が太すぎて、ただそこに抱き付くだけで少しも登れない。それでもまだ、男の脚は直ぐ先にあって、左手首から垂れたぐ

るぐる巻きのクセの残る縄を、鞭のように振り上げ、その白い足首に絡ませようとした。巧く行かなかったが、そうして縄を振り上げると、縄は、幹の表面をクネクネと這い上り、それで左腕が引っ張られて、何とか登って行けた。聞こえているとも思えないが、私が歌を口ずさんでいれば、男もまた、歌い続けられるらしい。ただ、歌声は立派だが、ひどく聞き取り難かった。

　私達の間は、少しずつ隔たって行った。もう大分高く登ったろうと思って見下ろすと、それ程でもなくて、木の根元を髪の長い男が歩き回る、草を踏んだり蹴ったりする音さえ聞こえた。男の足取りは、随分ぎこちない。木から落ちた時、脚を痛めたに違いない。それでもう木に登れないで、腹立ち紛れにでも、歩き回っているのか。それに気を取られる内に、私の口は閉じていた。木の上の若い男の声が、息継ぎもされず、ただ引き延ばされるだけの叫び声のようになっていた。木の中で、爆音が唸りを上げ、私の胸を強く揺さぶった。心臓は、こうもグラグラ出来るものか。心臓などもう吹っ飛ばされて、そこに開いた穴が、水流に捩れる泡のように、躍っているだけではないか。だとしたら、事態は差し迫っている。時間がない。

「何か探してるんですよね。そうですよね。」と、私は、急くように、下に向かって叫んだ。その声は、草の中で和らげられるのか、落ち着いた静かな調子になって跳ね返ってきた。そして今度は、その聞き取れた調子を真似て、初

めから静かに、
「私の心臓を探しているんですね。」と言った。その声は逆に、鋭い調子で跳ね返ってきた。聞こえないのか、男は、顔を上げなかった。私は、声の調子など構わずに、「私の心臓…。私の心臓…。」と繰り返した。しかしそれは、声にならず、歯の間から息が洩れるだけのようだった。ただ、その度に、皮を剥かれた青黒い木の実が一粒ずつ、一瞬だけ、草の中から輝き出し、それらの表面が独りでに震えるのさえ見て取れた。どうしたらそれを、男に伝えられるか。
見上げると、若い男は、揺れる細い枝に、尻を落とした恰好でしがみ付き、そのままズルズルとずり落ちて来ている。その甲高い声に引き寄せられるのか、体のあちこちに、銀色の羽の蛾が貼り付いている。男が、私の頭の直ぐ上まで来た所で、私は、左手首の縄で男の体を打って、蛾を叩き落とそうとしたが、銀色の羽を破って、その破片をバラバラと飛び散らせるだけだった。若い男は、私の脇を通って、幹をずり落ちて行き、その叫び声は、萎んで柔らかくなった。
木の中の爆音は、更に間近に大きく響いたが、却ってそれで、私には力が漲って、若い男がやったように、私も、腰を拗らせて軽々と木を登って行けた。遠く殆ど木の天辺まで来て、やっと冷たい風が吹いて背中をゾクゾクさせた。夜空には星も月も出ていない。ひどい寒気が襲った。直に、体中がかじかんで、枝に掴まっていられ

なくなるだろう。左手首の縄を、右手で枝にきつく巻き付け、感覚をなくし掛けた右手を、胸のポケットに突っ込んだ。そこはしかし、風に晒すより、ずっと激しく右手を冷やすようだった。堪らずに引っ張り出した右手は、女モノの手鏡の柄を、きつく握り締めて固まっていた。鏡は、ずっと下の、木の根元に居る二人の男の姿を映した。そこだけは、明るいようだった。

　若い男は蹲って、丸めた白い背中だけを見せていた。木から落ちて怪我を負ったのか、背骨の上の方から脇腹に掛けて、大きく裂けている。剥かれた木の実の皮にそっくりだった。叫ぼうにも、顔は、草を払って、地面に打ち付けられたままだ。蛾はもう全て、その体から離れていたが、私が羽を散々傷め付けたので、どいつも殆ど飛ぶ事が出来ず、草の根の間を、青黒い腹を見せる程に傾いて、這い回るばかりのようだ。

　髪の長い男を見失った。私は、手鏡に顔を近付けて、その映っている中の隅の方まで見通した。男は、一番低い枝の先の方に、腕と脚を使って、仰向けにぶら下がっていた。私に見付けられたのが分かったようで、私の方に向けていた顔を逸らし、片腕を伸ばして、隣の枝に移ろうとし出した。男の半開きの歪んだ唇が、規則正しく細かく動いている。それには見覚えがある。私が口ずさんだのと同じ歌を歌っているに違いない。囁くような声だったが、鏡を通して、ちゃんと私の耳に届いた。それは、私が歌うのよりも、ずっとはっきりしてい

た。それに比べ、私の歌い方は、どこもかしこもぼやけていて、誤魔化してばかりだった。覚えはないが、恐らく歌は、男から私へと口伝てにされたに違いない。ただ、はっきりと歌われているのは分かっても、それを聞き取ろうとすると、私の口から洩れるのと同じように、ぼやけてしまう。

鏡を通さず、直に男の姿を見下ろそうとしてみたが、暗いばかりの中を風に振り回されて、どちらが上か下かも、よく分からない。私は、また手鏡の隅を覗き込んで、

「あなたも、そろそろ、時間を知らなくちゃいけないでしょう。」と、枝にぶら下がる男の姿に囁き掛けた。歌は途切れ、男は、小さく丸まって、背中からポトリと地面に落ちた。

草の上に、銀色の小さな円が、幾つも一斉に浮かび上がった。それらは、綺麗な輪になって並び、髪の長い男を取り囲んでいた。男は、四つん這いになって、のろのろと円の一つに近付き、その上を転げ回っている、殆ど羽の擦り切れた蛾を一匹、抓み上げた。蛾は、男の指先でも、ブルブルと回った。その蛾の動きを見詰めていると、私の口から、男のようにはっきりと、同じ歌が歌い出された。歌と一緒に涎も垂れたが、両手共塞がっていて拭えなかった。男の口からも涎は垂れるようで、それは、男の手にしている蛾に降り掛かり、すっかり涎に塗れると、蛾は、動かなくなった。男はそれを、足元に捨てて踏み潰

し、隣の円の上の蛾を、また抓み上げた。私の口は、涎を垂らしながら歌の続きを歌い、また男の口からも涎が垂れて、その蛾を涎塗れにし、男はまた、その蛾を踏み潰した。

　そうして順々に、男は一回りして、蛾を全て踏み潰した。私は、歌を最後まで歌い終わって、私の口は、「私の心臓…。私の心臓…。」と繰り返した。或いは、「私の時間…。私の時間…。」と繰り返しただろうか。それは微かな囁き声だったが、その声が、小さな鏡の表面に投げ込まれ、鏡のずっと奥まで届いて行くのが、波紋の拡がりのように見て取れる。その声の届く果てで、蛾の腹と同じ色をした、皮を剥かれた青黒い木の実が、散らばってヌメヌメと輝き出て、震えていた。

　それらは、銀色の小さな円の真ん中に、一粒ずつ収まっていて、だからそれらもまた、輪になって男を囲むのだった。男は、その一粒一粒を抓んでは、口に運び、喉に詰まらせないよう、慎重に飲み込んでゆくようだった。段々と、男の身のこなしはぎこちなくなり、最後の一粒を残して、男は全身、剥かれた木の実そっくりに青黒くなった。それから、蹲るままの若い男の方によろめきながら歩み寄り、その上に覆い被さった。しかし、その青黒い男が、木の実の中身で、白い若い男が、木の実の皮なら、剥かれた皮が、その中の実を被った事になる。内と外が逆だ。二人の体が、大きなドングリのような一塊になって

ゴロリと転がると、木の根元を根刮ぎ道連れに、鏡の縁から、闇へと落ちて消えた。

　残された最後の一粒は、草の根の間で、艶々した黒い表面に微かな赤味さえ帯びて、表面を震わせるどころか、ドクドクと脈打っている。その辺りだけは明るいままで、繰り返されるままの私の囁きが届くと、それは、ゆっくりと、眠るように土の中に隠れていった。

　縄で縛られた左手首が、ズキズキと痛み出し、木の中から聞こえていた筈の爆音は、私の胸の奥から響き出すようになっていた。手鏡から少しだけ顔を離すと、踏み潰された蛾は、まだどれもしぶとく生きていて、青黒い腹を脹らませて身を起こし、散らばりながら、鏡の中に、羽の銀色の粉を振り撒いた。直に鏡は、一面、その銀色に塗されて何も映さなくなった。私は、その手鏡を、左胸の奥に仕舞おうとした。そこはやはり、穴が開いているだけで、心臓はなかった。

　銀色の手鏡は、爆音に導かれるように、私の胸の底を突き破って、そのまま真っ暗な中を、ヒラヒラと進んで行った。その一回一回裏返るのと、私の脈とが、同じリズムを刻んで、それを頼りに、私は、後を追った。間は隔たるばかりだったが、銀の板片は、或る所まで行って止まり、チカチカと点滅した。そこは、木の根元の少し上辺りに違いなく、伸び拡がった幹や枝が、その一ヶ所

へと集まるのが、ぼんやりと照らし出されている。クネクネとそこへ近付く私の体は、どうやら、その木の枝のどれか一本の中を通って、吸い上げられて行くようだった。しかし、それでは、枝の先から木の根元に向かって吸い上げられる事になる。向きが逆ではないか。

　銀色の点滅の更に奥から、微かに歌声が洩れてくる。私は、グングンと引き寄せられた。歌声が爆音を掻き消すと、私は、いきなり明るい中に出て、私自身が輝き出るように、更に真っ直ぐに伸び上がった。私は、ひょろ長い細い若木で、根元の土は、少しだけ焼け焦げていて、ビニールの燃えた匂いがする。その下には、赤い根が張っていた。そこは、窪地の真ん中で、踊りの輪が、私を囲んでいる。歌うのは女ばかりだ。やはり聞き取り難いが、それは少しも構わなかった。暮れ掛けていた筈の陽は、また更に明るさを増して、踊りの輪を照らし、女達の脹らんだ白い服をキラキラさせた。長い髪は、風に吹かれて乱れるままで、その風に逆らって、女達は、息を弾ませながら歌い続けるのだった。地中から水分を吸い上げる度に、若木の私の全身は、脈を打つようにズキズキと痛み、風の冷たさに震えた。そうして、新しい時が計られて行くようだった。（二〇〇二年十月二九日）

*　*　*

虹色

外は、ガスが立ち込めたように真っ青な、暗い竹藪ばかりが、動いたり止まったりしている。左右の壁にズラリと並んだ窓は、全て閉まっていたが、細かく揺れて唸りを上げ、隙間風が吹き込んで底冷えがした。窓硝子の縁で、灰色の水滴が踊っている。混んでいて、年寄りばかり目に付く。天井から黒っぽい雫が垂れて、彼らの頭はびしょ濡れなのに、それに気付いてさえいないように、誰も黙り込んでいた。竹藪の隙間から、たまに覗く空は、真っ黒く曇って、その中に必ず、淡い色の小さな楕円の青空が浮いているのが遠くに見えた。

何やら呟き出した隣の年寄りの腰が砕け、仰け反りながら倒れ掛かって来た。後ろから頭を支えると、中身が空っぽのように軽い。私は、年寄り達を掻き分けて細長い部屋の端まで進み、ヒビの入った歪んだ木のドアを開けた。少し油臭いその奥の狭い中で、湿った濃い紅色の制服を着た男が、小さな金属製のハンドルとレバーを握り替えては、ジッと前を見据えていた。細い肩を聳やかして寒そうだった。ドアを閉めると、外側は古びた木だったのに、こちら側は鉄で出来ていて、一分の隙もなく閉じた。前は、張り出すような大きな窓で、その外は、ゴツゴツした地面が、二、三メートル白っぽく照らされるだけで、先

には何も見えない。床や壁は細かく震えて音を立てたが、窓は、音を立てなかった。
「動いているんですか、止まっているんですか。」と、私は尋ねた。男は、私の方を見ないまま、ぞんざいに片腕を伸ばし、その濡れた手を私の額に当て、「熱があるんじゃないか。」と言った。私は、男の手を払って、額を拭く布か何かを探した。窓硝子の右下の隅が、ほんの僅か欠けていて、外からの飛沫が、そこで火花のように小さく弾けて輝いている。前屈みになって顔を寄せると、飛沫は、逃げるように硝子の向こうに引っ込んだ。その直ぐ上の辺りを、拳で強く叩くと、拳は血の気が引いて白くなり、そのまま小さく固まってしまいそうだった。男の見立て通りなのか、目の奥が圧し潰されるように痺れて、私は、その場にしゃがみ込んだ。直ぐに、後ろから誰かが覆い被さって来て、私がしたのと同じように、窓の隅に顔を寄せるようだ。見上げると、うっすらと脂肪を纏った、柔らかそうな白い顎の裏側から喉元が、間近に覗けた。
「熱があるんじゃ、手も滑るわね。でも何をしたかったの？」と、その喉が震えて、女の声になった。
「上に上がりたいんだ、多分。」と男が言うと、「それは、あなたじゃないの？」と、女の声が被さった。横を向いた男の口元が、しっかりと閉じた。私は、女の腹の下を擦り抜けて立ち上がろうとした。思い掛けず、床が大きく揺れてい

る。足が縺れて、二、三歩よろめき、男の腕に縋ると、男は、やはり私の方を見ないまま、片手をハンドルから離し、黙ってその腕で私を支えた。男の直ぐ後ろの壁に、見るからに華奢な、幅の狭い金属製の梯子が備え付けてあり、その上の天井に、真四角な穴が開いている。ボンボンと立て続けの低い音に振り返ると、女が、腰を捻っては、私が叩いたのと同じ辺りの窓硝子を、腕を投げ付けるように叩いている。直ぐに目を逸らし、梯子の方へ向き直ろうとすると、女は、ふらつきながら体当たりして来て、男の腕を掴んだ。男が、私を突き放した。私は、何とか踏ん張れたが、私の腕を掴んでいた手を、咄嗟に女の額に押し付けた。濡れていて、ひどい熱があった。そのせいで、私の掌は、その額に貼り付いてしまうようだった。

　力を込めて、それを剥がそうとしたが、女の上体を左右に傾けるだけだ。弾みで、手が壁に当たり、女の顎が、骨を軋ませるような音を立てた。梯子を掴みたいが、窓を叩いた方の手は、拳のまま固まってしまっている。仕方なく、梯子を腕で抱えて、一段目に足を掛けた。女の額に貼り付いた掌は、もう火傷を負っているようにも感じられた。もっとひどい事になる前になんとかしたいが、女の方から額を押し付けてくる。女の顔を覗き込むと、小さな目を真ん丸くし、頬骨が突き出て、毛でも生やせば猿だ。

　飛沫の弾けていた窓の隅の硝子の欠けた所から、勢い良く水が噴き出してい

いる。私は、手首を捻って、女の顔をそちらに向けた。肩を揺らし出す女は、笑いを噛み殺しているようだ。水は、殆ど床を濡らさずに、二メートルと離れていない向かい側の壁の下の、床に開いた三角の穴に向かって、放物線を描いて落ちて行く。その穴の上に、女の頭を持って行けば、床を濡らさずに、額の熱を冷ませそうだ。腕を突っ張って、女の頭をそちらに押し出そうとするが、指をいっぱいに拡げた女の小さな手は、両方とも吸盤のように壁に張り付いて動かなかった。

　私のもう片方の手の固まったままの拳を、女の首筋に押し付けて、そちらの腕も突っ張った。女は、首を強く捻って、私の拳を口に銜えた。小さく固まった白い拳は、女の口に難なく入った。女の狭い口の中で、とろけるように拳は解れたが、そのままでは、纏れた指が、女の奥歯で噛み砕かれそうだ。慌てて手を引っ張り出した途端、その手首に、女が噛み付いた。引っ張れば痛いが、そのままなら痛くない。噛まれているのではなく、大きく開いた唇で吸われているらしい。そうして、私の両手は、女の額と女の口とで動けなくされた。両腕は交叉し、関節が捩れている。女は、充血した目で、天井の四角い穴を見上げ、動きの取れない私の体を押し返して、壁に張り付けた両手を、ジリジリと梯子の方に這わせた。

　女が梯子を登り出したりしたら、私は、女の斜め後ろで、腕を決められたま

ま担がれるように宙ぶらりんになるしかない。女の尖った右肩の上で、おかしな具合に交叉した私の両腕は、体の重みに耐えられずに折れてしまうだろう。私は、腰を思い切り横に捻って、女の体に、後ろから巻き付くような体勢を取ろうとした。少なくとも、女の右肩から腕をずらしたい。出来る限りそうしたが、却って腕は絞り上げられ、肩の関節が外れそうだ。女はしかし、梯子を登ろうとはしなかった。額に当てた掌にも増して、銜えられている手首が、焼けるように熱くなった。女は、小さく唸るように、その吸い付く唇を細かく震わせた。何かを言おうとしている。手首に伝わる振動から、声を読み取ろうと努めた。命令口調で、短い単語を繰り返しているとしか分からないが、そう分かっただけで、熱は、収まる事はなくても、それよりひどくならずに済みそうだった。

　足元に目を落とすと、女は裸足だった。それなら、「靴を履かせろ」とでも言っているのか。見えるのは女の足だけで、動きの取れないまま幾ら首を伸ばしても傾けても、その後ろの私の足までは見えない。私が足元を見詰めているのに気付いたのか、女は片足を後ろに上げて、足の裏を上に向けた。土踏まずを除いて、そこにぴっしり並んでいるのは、吸盤にしか見えなかった。

　何をした訳でもないのに、女の額に当てていた掌が離れていた。私は、左腕の下の、ねじ曲げられた右腕を、何とか引っこ抜いた。右肩の奥に鋭い痺れが

走り、肩は上がらなくなった。掌は、たっぷりと蜂蜜を塗りたくったようで、舐めると見掛け通りの味がする。蜜の色は濁っていて、手の指は、ぼんやりとしか見えず、溶け掛けているようでもある。溶けた指を舐めたのか。その蜜の味を、たっぷり溜まった唾と一緒に床に吐き、見たくもないモノが目に入ったら素速く目を逸らす心積もりで、そっと女の額を覗き見た。溶け出してはいなくて、いかにも熱がありそうではある艶々したピンク色の、平べったい額だった。

　また足元に目をやると、女の足は揃えられている。ずっとそうして、床に着いたままだったのかも知れない。腕の痛みのせいで、ありもしない吸盤付きの足の裏などが見えてしまっただけか。そこへ、濁った泥水が寄せてきて、見る間に、女の足の甲までを隠した。私の足も同じで、また私の足を見損なった。足を上げようにも重くて駄目だった。床は水浸しになった。三角の穴に落ちた水が、逆流して来たに違いない。私の吐いた唾だろうか、水面に、薄く円く油が浮くように灰色掛かって漂うものが、虹色の輝きで縁取られている。それは、拡がりながら少しずつ動いて、女と私の足首を囲んだ。それを通して見ると、泥水は少しだけ透けて、私達の足の甲を、影のようにぼんやりと浮き上がらせた。

　足元にまた唾を吐いたが、水面に微かに泡を残すだけだ。しかし、指の蜜を

舐めて、唾を溜めてから吐くと、それは油が浮くように灰色に拡がり、初めの灰色の円と重なって、その下の泥水がまた少しだけ透け、足の影も幾らかはっきりする。そうして私は、何度も指を舐めては、唾を吐き続けたが、水位も少しずつ上がって、足の形は、はっきりしたりぼんやりしたりを繰り返すだけで、脹ら脛まで水が来ると、足の甲はすっかり見えなくなった。

　唾を吐くのを已めると、指の蜜を舐め尽くしていた。指は、細くなったかも知れないが、溶けずに指の形はしていた。ただ、殆ど透けていて、それなのに骨も血管も見えない。指だけでなく、掌も手の甲も同じだった。冷たく強張って、拳を握るのもままならない。その手を額に当てると、熱があるどころか、掌より額の方が冷たく感じられた。

　女の唇の震えは止まっていて、銜えられている左手首も、焼けるようだったのが嘘のように、冷たく感じられた。私は、強張った右手の指で、女の上唇をめくった。唇は内側に向かって分厚くて、指で抓んだのは、そのほんの縁で、歯は見えなかった。抓む指に力を込めて、そのまま引っ張ると、女の唇は、私の手首からゆっくりと剥がれ、剥がれた所から、直ぐまた捩れて閉じた。閉じた唇は、薄く見えた。銜えられていた私の手首から先が、なくなっていた。慌てて私は、それをまた女の唇に押し込んだ。女の口の中で、指が動いているのが分かったし、女の舌ビラが、左右に忙しく振れて、私の掌を擽った。しかし、

引っ張り出すと、その手は、なかった。壁に張り付いている筈の女の手も、なくなっていた。手首から先のない伸ばした腕が、壁に刺さって見える。壁は、シミ一つなく白く眩しい。私の透き通った右手だけが、辛うじてその輪郭を見せている。

水が膝まで来た。手がどうより、上がってくる水の方が恐い。後ろを向くと、男の姿がない。狭い中を、何度も何度も見返した。窓の外の照らされた地面が、ゆるゆると手前に向かって動いている。水を噴き出す窓の右下の隅は、もう水の中だった。梯子を登ったとも、ドアから出て行ったとも考え難い。それなら、水に潜ったのだ。水面の殆どに灰色が拡がって、泥の色をしているのは、四隅だけだった。半歩でも下がりたかったが、足は動かないので、立ち尽くす女の直ぐ傍らで、俯けた頭が女の体に触れないように、そろそろと腰を屈めていった。そうして、顔を水に浸けて、中を覗く積もりだったが、いきなり、両方の手首を掴まれた。

右肩に痛みが走り、呻きながらまた腰を反り返らせるしかない。掴むのは、女の手だった。透き通っていて、骨も血管も見えないが、輪郭は見て取れる。女の手首を掴み返そうとすると、女は手首を拗らせた。そうして争う内、私達の両手は、互いの掌を合わわせ、指をがっちりと組み合っていて、私達は、間近で正面を向き合っていた。女の背は、私と同じ位だった。掴み合う手は、大体

目の高さで動かない。透き通ってはいたが、見て取れる。なくなってはいない。その手に、私と女の荒い息が掛かり、微かな翳りが差した。見直すと、私の手も女の手も、透き通っているのではなく、真っ白なだけだった。それが壁の白さに埋もれて、なくなったようにも透けたようにも見えたのだ。そうと分かると、その手と壁の白さの中に、指の凹凸が綺麗に溶けて、掴み合う二人の手は、ツルリとした丸っこい白い塊にしか見えなくなった。

　梯子の上の天井の四角い穴を、私達は揃って見上げた。私が右足を上げると、女の左の腿も、鏡に映った姿のように持ち上がった。静かな中に、水音を響かせて水から出て来た私達の足は、足首から先が一つに溶け合って、手と同じで、真っ白な一塊りになっている。その足を梯子に掛けると、梯子は、壁から剥がれて、呆気なく水に落ちて沈んだ。私の唾と指の蜜が、やっと効き目を現したようで、水は、床まで透けていた。水の中で、男は、下着だけになっていて、床に這うようなまま、縦にした梯子を、床の三角の穴に押し込もうとしていた。梯子は滑るように穴に沈み、男は、窮屈そうに、足の方から穴に入っていった。男の吐く息は、真っ黒な泡になる。男の全身が穴に消えると、穴の中から、真っ黒な水が、重い煙のように噴き出し、ゆっくりと私達の方に寄せて来た。水がひどく冷たく感じられ、背筋が寒くなった。

　私は急いで、女の体を壁に押し付けた。額と額がぶつかって、擦り合わされ

た。熱くも冷たくもない。女も、私と同じように、熱は引いているのだ。そう分かって、私は、更に乱暴に、そのまま壁を攀じ登り始めた。私達の両手両足は、壁に押し付ければ、壁にしっかり張り付いた。女は、背中を壁に擦り付けられて仰け反ったりしたが、私の方も、右腕を持ち上げる度に、右肩の奥が刺すように痛んで、呻き声を押し殺すのでやっとだった。最後は、殆ど抱き合って、私達は、伸び上がるように穴の上に飛び出た。

私は、独りだった。いや、周りで、汚れた下着姿のふっくらとした子供達が、這ったりよちよち歩きをしていたが、女の体は消えていた。真っ白な手の指は、さっきよりまた細くなり、真っ白な裸足の足も、骨が浮き出るようだった。私は尻餅を搗いていて、その手足に、子供達の小さな手が纏わり付いてくる。冷たくも熱くもない。煩わしくて振り払った。軽くそうした積もりだったが、子供達は皆、強く突かれたように、後ろに跳ね飛んだ。その彼らの下に、女は、ひどく薄っぺらな体付きになって、仰向けに寝ていた。手足の白い塊は、そのままだった。指のない丸っこい手袋を嵌め、爪先も踵もない丸っこい靴を履いて見える。私の手足の肉は、殆ど女の方に持って行かれたのか。子供達の手は、今度は、その女の手足に纏わり付き、それを引っ張り始めた。形を変えても、白い塊は、粘っこく床に張り付くままだった。

そこは、奥に向かって細長い部屋で、左右にズラリと並んだ窓からは、山並

みの裾までを覆い尽くす密生した暗い色の竹林が、後ろへ後ろへと過ぎ去って行くのが見下ろせた。その上は、山頂を隠す真っ黒な低い雲ばかりだったが、西と思われる方だけは、濃い紅の渦が、潰れるように横に拡がろうとしていた。嵌め殺しの窓は、外気を遮断している。部屋の奥の端まで、何も置かれていない暗い床の上は、小さな子供達が、何十人も散らばっている。誰も、窓の外に興味はなさそうだった。

横たわる女の体が、灰色にくすんでいた。手足も灰色で、私と同じように骨張っている。白い塊は、私が窓の景色に気を取られる間に、子供達が剥ぎ取ってしまったのだろうか。女の体は、灰を固めて女の形にしただけのようで、抱き上げようとすれば砕けてしまいそうだ。額にそっと手を置くと、少し温かかった。手を退けると、私の指の形が跡を残した。子供の一人が転けて、女の体の上に倒れ込みそうになったので抱き留めた。子供の下着は捲れ上がり、真っ白な胸が剥き出しになった。そのまま、女の体を跨いで立ち上がると、床の振動が、足の裏に痺れるように伝わって、その痛みに足踏みするしかない。子供は、私の首に腕を回し、私の胸にぴったりと張り付いた。

他の子供達は皆、眠そうな顔でへたり込み、床の振動のせいで、竹林と同じ後ろに向かって、少しずつ床の上を滑って行く。私だけは、それに逆らって前に進んだ。振り返ると、部屋の後ろの端に寄せ集められた子供達は、灰に塗れ

て揉み合い、私と女が上がってきた四角い穴に、次々に転げ落ちていた。女の形の灰の塊は、子供達に蹴散らされていた。

部屋の前の端まで行き着いて、静かに閉ざされている鉄のドアのノブに手を掛けた。足の裏の床の震えが収まるのと入れ替わるように、震える短い声が落ちて来た。男の声に聞こえたが、見上げると、真上の天井に開いた三角の暗い穴の中に、頬骨が突き出て真ん丸の目をした、猿そっくりの女の顔があった。手招きしていたが、私は目を逸らした。鉄のドアは開かなかった。痩せこけた指には、ドアは重過ぎるのかも知れない。その手の甲に冷たいものが掠めた。足元に落ちたキラキラした唾は、少しだけ染み拡がって、虹色に縁取られた。子供も床を見下ろし、片腕を振って、それに触りたいかのようにむずかった。また震える同じ声に見上げてしまうと、窄めた女の唇の内側に虹色が輝いて、ゆっくりと回っている。そこからまた唾が吐かれ、足元で、跳ねるような軽い音を鳴らした。その唾は、初めの唾の上に、ぴったり重なっていた。私は、ノブから手を放し、半歩下がった。女は、同じ所に唾を吐き続けた。

私の指を舐めさせると、子供は落ち着いた。指はまた、蜜を塗ったようになり、子供の口の周りは、その蜜で見る見る汚れた。子供の小さな肩が震えている。その顔が、笑いを噛み殺しているようにも見えて、私は慌てて、口から指を放した。舐めてみると、蜜はひどく苦く、直ぐに干涸らびた。その手でまた

ノブを握ると、胸がいきなり、火に炙られたように熱くなった。子供を引き剥がしたいが、無理をすれば、柔らかい子供の肉は裂けてしまいそうだ。

鉄のドアが奥から少し開き、男が、ずぶ濡れの下着姿を覗かせた。私がドアを大きく開けると、男は、私の胸から子供を引き剥がした。私は、女の吐いた唾に足を滑らせ、俯せに倒れた。起き上がると、胸は、女の唾に塗れていた。手足に吸盤を付けた猿のように、女は、頭を下にして身軽に壁を這い下りてきて、両手で、私の胸をぬるぬると撫で回した。焼けるような胸は、火膨れだらけになった。私は、女を突き飛ばし、胸を冷やすものを探そうと、閉まり掛ける鉄のドアの奥に飛び込んだ。

直ぐ前は大きな窓で、その厚い硝子を拳で何度も叩いたが、水は何処からも噴き出さなかった。窓の景色は、左右に分かれて後ろへ後ろへと、勢い良く流れ過ぎて行く。子供が独りで、小さな金属製のハンドルを、背伸びしてやっと握っていた。男の姿はない。子供の額に手を当てると冷たかった。私は、子供を抱き上げて胸にきつく抱き締めた。胸が段々と冷えて行くのが分かり、全身の力が抜け、子供を抱いたまま油臭い床に横向きに寝そべった。迂闊に、傷めた右肩を下にしてしまって、目の眩むような痛みが襲った。子供が私の腕を擦り抜けるのを、どうにも出来なかったが、子供に逃げられたので何とか俯せになる事が出来た。

直ぐ先の、床に開いた真四角の穴が目に入った。壁に寄り掛かり上体を起こして覗き込むと、腕と脚を折り重ねて体を丸く縮めた男が、横向きに収まっている。その下側の半身は、灰色の水に浸かっていた。穴にぴったり嵌まり込んで、硬く固まってしまったようで、とても引っ張り出せそうにない。薄く開いた唇の下半分も水に浸かっていたが、水は全く動かなかった。その下はどうなっているのか。穴の深さは、男の体までしかないのか。それとも、男の体は、栓のようにそこに押し込まれているだけで、穴は、男の体の下まで、ずっと深く続くのだろうか。或いは、男の体の下には、金属製の梯子が突っ支えているのかも知れない。灰色に濁った水が少しずつ上がって来て、動かない男の体は、段々と水に沈んだ。水は、床スレスレで止まった。それはもう、穴には見えなかった。床のそこだけに、灰色の艶々した材質を嵌め込んだようだ。

私は、身を乗り出して、左腕を肩まで水に差し込んだ。ゴワゴワしたものが、手に触れた。掴もうとすると水の中を逃げ回る。首まで水に突っ込んで覗くと、灰色の水は透けて、華奢な梯子の上の端に、濃い紅色の制服が絡み付いているのが見えた。穴は、ずっと深くまで透けていたが、水底までは見通せなかった。梯子もまたずっと深くまで延びて、その下の端までは見通せなかったが、その途中を、頭を下にして逆様に降りて行く男の姿が、小さく見えた。誰も追って来られない所まで、逃げようとしているのかも知れない。しかし、どうして子

供を置き去りにして行ったのか。私は、紅色の制服を水から引っ張り上げた。
　胸の熱が、ぶり返してきた。私は、その場に座り込み、びしょ濡れの制服を丸めて胸に押し付けた。制服は直ぐに乾いて、そこに籠もる熱が胸に戻ってくる。またそれを水に浸けようとすると、震える短い声がした。男の声のようだった。それに呼ばれたように、子供が、閉じ掛けるままのドアの隙間から出て行こうとしている。私は、上体を投げ出して右腕を伸ばし、その足を掴んで子供を引き倒した。引き寄せると、子供は、嫌々をしながら、小さな拳で私の右肩を叩いた。まだ何の分別も付かない筈なのに、私の弱味だけは見抜けるようだ。肩の痛みのせいで、私は、子供と対等に渡り合う羽目になった。
　ドアは、向こう側は鉄だったが、こちら側は古びた木で出来ていて、その隙間から、女の尖らせた唇が覗いていた。それは細かく激しく震え、そこから響き出る太い声だけで、ドアは押し戻されそうだった。もう声は少しも震えていないし、長く引き延ばされた。男の声とも女の声とも分からない、刃物のように鋭いだけの声だった。私は、ぐらつくノブを掴んで、思い切りドアを押した。ドアに挟まれ掛けた唇は、虹色の飛沫を一瞬火花のように噴いてドアの向こうに消え、声も途切れた。
　私は、何とか逆様に抱え上げた子供を、力任せに四角い穴に突き落とした。子供は、灰色の水の上を、ゴム鞠のように跳ね返った。そこはもう水ではない

のか。乾いた制服を掴んで、そこに押し付けた。するとそこは水だった。上半身が、逆様に沈み込んで、そのまま穴の中に落ち込みそうになった。制服がまた、梯子の縁に引っ掛かった。きつく絡み付いてしまって、ビクともしない。無理に引っ張ると、私の体はいきなり水の上に跳ね上がって、制服の片袖だけを掴んでいた。それを右腕に通すと、その裂けた端は肩まで覆って、肩の痛みをジワジワと奥の方に押し込めた。試しに右腕を伸ばして、子供の首根っこを掴もうとした。肩の痛みは気にする程ではなく、子供は簡単に掴まえられたが、びしょ濡れの胸に抱こうとすると、子供の体は弾んで胸から飛び跳ねた。何度も掴まえては抱こうとしたが、同じだった。はっきり女と分かる声が、私と子供の間の空気を裂くように差し込まれた。ドアは閉まっていて、何処からその声が来るのか分からなかった。体が大方乾くと、火膨れで醜く凸凹した胸は、また女の唾でベタベタになった。子供が、床の真四角の灰色の角に手を触れ、そこから、灰色の水が溢れ出した。子供に係り切りで気付かなかったが、ドアの下から黒い水が浸み出ていて、もう狭い床の三分の一程を覆っていた。黒い水と灰色の水は、決して混ざり合わず、複雑に入り組んだ模様を床に描いた。子供を抱き上げると、子供の体は、私の胸にぴったり貼り付いた。私は、水を避けて、窓際伝いに窓の脇の方に逃げた。しかし、そこにも直に水は来るだろう。

　窓の景色が全く止まっている。私は、窓の脇の狭い乗降口を突き破って、外に出た。日の沈み掛けた海岸に向かう、岩肌を剥き出した急斜面を、つんのめったまま、凄い速さで駆け下りていた。濃い紅の渦は、すっかり潰れて、更にその暮れる色を深め、黒い水平線に重そうにのし掛かる。波打ち際の灰塗れの子供達は、寄り集まって、波に浮いたり沈んだりしている。灰は、少しずつでも洗い落とされているだろうか。女の声に振り返ると、真っ黒な厚い雲の垂れ込める中のずっと遠くに、淡い色の楕円の小さな青空が見えた。周りの黒雲は激しく動いて、虹色の輝きがその青空を縁取り、震える女の唇のようだ。私は、それから目を離さずに、急斜面に後ろ向きに倒れ込み、仰向けのまま岩肌を滑り落ちていった。目の奥が圧し潰されるように痺れ、ひどい熱を出しているに違いなかった。子供を抱く力もなくなったが、子供は、私の胸に貼り付いたままだった。固まった体が、急斜面の途中で、頭を下に向けたまま止まった。突っ張る手足に、吸盤が付けられたようでもある。胸にまた、焼けるような熱さが戻りつつあった。子供の体は、火のようだった。

　楕円の青空が、黒雲の中に消え掛けている。窄まって行く虹色の輝きが一つの円い点になると、大粒の冷たい雨が落ち、岩肌をピリピリと細かく震わすような音を立てた。私は、年寄りのように、何やら呟いた。それに応えるように、女の白く細い腕が、子供をすんなりと抱き上げた。子供の顔は、頬骨が突き出

て、小さな目は真ん丸で、平べったい額はピンク色で、猿そっくりだった。胸に降り掛かる雨水が、真っ黒く見えた。指を這わすと、火膨れの表面は、すっかり硬くなってささくれ立ち、指の腹を傷付けた。黒く濡れたゴツゴツした胸に虹色が浮き出て、クネクネと蠢く。そこへまた女の手が伸びて、倒れ込むままの私に、破れた紅色の制服を手際よく着せていった。右肩の破れ目に何度か女は噛み付いて、そこを綺麗に繕った。その冷たい制服のお陰で、全身の熱が冷まされるのは分かったが、制服を着た私は、ひどく歳を取っているに違いなかった。濡れた岩肌の傾斜を、その私の体は、ゆるゆると滑り降りて行く。海辺が近付くに連れ、波の音の混じり込んだ子供の声が、年寄りの呟きのように、低く掠れて聞こえた。逆さに見える黒い海面に、ゆっくりと灰色が浸み出し、その混ざり合わない二色の入り組んだ境目に、うっすらと虹色が滲んだ。（二〇〇二年十一月十五日）

＊　＊　＊

欠片

何人かの声が少し離れた風の中を揺らぐのが聞こえ、潮の香りを吸い込んだ。

目の前が木の板だった。狭い中の何処から光りが洩れて、板の上を斜めに拡がってくる。上下の感覚はうまく戻って来ないが、板に頭が落ちて行かないなら、私は仰向けになっていて、低過ぎる天井を見上げているらしい。深い木理が縦に細かく走っていて、布団の上で首を捻り回すと、恐らく布団と同じ大きさの、その天井の隅々まで見渡せる。木理が真横に動き、何かが引き擦られる音に背中が震えて、全てが消えた。眉間とこめかみは焼き切れるようで、その熱を遮ろうとする両手は、腰の脇の辺りで朧気な動きをしていた。

　光りばかりで、その縁を微かな青味が取り巻いて楕円を描いた。埃臭く柔らかいものが顔に掛かり、目が眩んでいるのかどうかも分からなくなった。それは布切れのようで、布目から点々と滲み出る青白い光りに、一つ二つと焦点が合って行く。眠ってしまって途中までしか聴けなかった音楽の事を考えた。旋律は全く浮かんで来ず、或いは音楽など聴かなかったのかも知れない。睫毛に被さる布の表面が黄金色にぎらつき、布目から洩れる光りが濁った緑色になった。直ぐ周りで先程の声音が入り混じり、それに立ち向かうように、私は身を起こした。膝に落ちた布切れは、掌くらいしかなく、端に鋲が二つ刺さっている。

　艶々した鋼色の短い線路が、直ぐ先の真っ暗な穴に通じている。何本もの腕が、私の尻や脚の下に差し込まれ、持ち上げられた私の体は、その穴と逆方向

に運ばれて行く。穴は、縦に長い楕円で、切り立つ白い崖の下に穿たれていた。線路には、木の箱に鉄の車輪を付けただけの小さな貨物車両が乗っていて、その側面は、箱と同じ幅の抽斗が開けっ放しにされている。その抽斗の中で、私は眠っていたらしい。線路は、その木の箱までで途切れていた。高い硝子の屋根の下で、私は降ろされた。空は一面真っ白く輝いて、地上の影を悉く消していた。

私を運んだ者達は、硝子屋根の直ぐ隣の、低い瓦屋根の四阿に入って、思い思いの方を向いて腰を下ろした。小さな石の椅子は全て埋まり、左目を真っ赤に腫らした背の高い女が、立ち上がって一言挨拶すると、他の者達は、盃をそれぞれ懐から取り出した。女は、膨れた形の大きな酒瓶を抱えて、酒を注いで回った。たっぷりとした冷たい風が海の方から吹き続けていて、彼らの髪を靡かせたが、誰も気にしていないようだ。震えが来て分かったが、私だけが裸同然の薄着だった。少しだけ残った瓶の底の黄色っぽい酒を波打たせて、怪しい足取りで近付いて来た女が、いきなり倒れた。酒瓶が地面に音を立てて叩き付けられた。畳まれて横にされた細い脚立に躓いたのだった。立ち上がろうとする女の体の動きから、酒の匂いが噴き出た。私は、酒臭さを我慢しながら女の足を振り解き、脚立を立てて開いた。それに上って、上に立つと、硝子の屋根の裏側に辛うじて手が届いた。そこにしっかり手を置いて、震える体を支えた。

懐から小さな尖った工具を取り出し、爪先立ちになって屋根に穴を二つ開けた。女が透き通った細い縄を放り投げ、私は、それを受け取って穴に通した。縄の端は輪になっていて、女がそうしろと言えば、私はそれで首を吊ってしまいそうで、両手に掴んだ輪の中を覗き込んで女の言葉を待った。爪先立ちのままの私の両方の足の裏に、女の冷たい掌が滑り込んできた。土踏まずから踵に掛けてをゆっくりと撫でさすり、そこに私は、刺すような痛みを感じた。先程の布切れの端の鋲が思い浮かんだ。それが針を上に向けて女の掌に乗せられているなら、爪先立ちを已めれば、足の裏に鋲を打つ事になる。

見下ろすと、女の脇で、制服姿の小柄な二人組が、裸の痩せた男を抱えている。だらりと垂れた土気色の長い手足が、地面に引きずられている。背丈は私よりずっと高そうだ。鋲が刺さるのを覚悟して踵を下ろし、女の掌を踏ん付けた。痛みは却って消え、柔らかい肉の厚味だけが感じられて、そのせいでまるで踏ん張れなくなった。膝がガクンと折れ、仰け反って頭から落ちるようだったが、くの字になった体は宙に浮いた。私は、両手で縄を掴み、女は、私の踵をしっかり掴んで持ち上げている。

制服の二人組が、痩せた裸の男を逆さに持ち上げて、無理な姿勢で脚立を上って来た。上の一人が、私の腿を裏側から抱き寄せた。折れていた腰が伸びて、私は、脚立の上に何とかまた両足を乗せ、女の掌を踏んだ。四人も乗せて捩じ

曲がってぐらつく脚立の上で、忙しく体を拗らせる制服の二人は、痩せた男の足を真上に掲げ、私の掴んでいる縄の輪に差し込んだ。その足がひどく汚く見えて、私は思わず縄を締めて、縄のそれより上の方を掴み直した。縄が、更にきつく男の足首を締め付け、二人組は、男の体を引っ張って縄が解けないのを確かめた。二人組が先ず脚立を下り、私も続いた。

　下り立つと、地面に腹這いの女が、揃えた青白い両腕を伸ばして、私の足の方に差し出していた。ずっと、女の掌を踏ん付けるままだった。首だけ起こして、女は、私の足元をジッと見詰めている。足の裏の捉えどころのない感触のせいで、今にも腰が砕けそうで、脚立を掴んでやっと立っていられる。見上げると、男は逆さ吊りにされて、脚立の上に乗った首は折れたように傾き、弧を描いて拗る両腕が、尖った肩から枝垂れるように延びている。二人組が脚立を掴んで引っ張ろうとするが、私の方が力が強い。彼らは脚立を片付けたいらしい。四阿の者達が、四つん這いで犬の吠える真似をしながら、一塊りになって近付いてくる。それを見て二人組は逃げたが、私は囲まれた。吠える声に混じって、隣同士で囁き合う声が聞こえる。私の足首を噛み切るか女の手首を噛み切るか、二つに一つしかないが、そのどちらにすべきか話し合っている。もし女の手首が噛み切られて、ずっと女の掌を踏んでいなければならない位なら、自分の足首を噛み切られる方が増しだろうか。脚立がひどく揺れる。

　二人組は、片付けようとしたのではなく、脚立を押さえていてくれたらしい。今にも脚立諸共倒れそうなのに、私を囲む者達は、それを避けようとする様子もない。酔っ払っているせいか、私を見る目は据わったままだが、彼らの吐く息は少しも酒臭くなく、濃い潮の香りがして、その香りに私の方が酔ってしまいそうだった。四阿の向こうの水平線が、時化に遭った船に乗っているように揺れ出した。顔を撫でる冷たい風の流れて行く方へ体が傾いて、目の前が暗くなり、先程と同じ布切れの埃臭さを嗅がされた。それを顔から取り払おうと脚立から手を離したが、その手が宙を彷徨うのに合わせてふらつき、蕩けそうな体でクネクネと踊っていたかも知れない。吠え立てる声が鋭くなって、息遣いまでが耳を掠めると、それを鎮める女の声が、遠くに向かって途切れ途切れに響き渡った。

　それが聞こえなくなると、直ぐ目の前は女の顔だった。赤く腫れた左目は何処となく黒ずんで、汚れて見えた。私は、突っ立って女と向き合っていた。私達は同じ背丈で、女の手は、黄金色の小さな布切れを弄び、その指の伸びた爪に真っ黒な垢が溜まっている。布に鋲は刺さっていないようだ。女の両脇に、制服の二人組が戻って来た。彼らの背は女の肩より更に低く、女の忠実な部下に見える。吠えていた者達は皆、四阿に戻って何事もなかったかのように椅子に掛けている。脚立はまた、畳まれて寝かされている。逆さに吊られた痩せた

男は、伸び切った両腕を真下に垂らし、横から見るとゴツゴツした棒のようで、足首を縛る透き通った細い縄は殆ど目に付かず、宙に浮いて見えた。足の裏がチクチクと痛んだ。

「鋲を埋め込むためだったんですね。」と言おうとして、私が口を開いた途端、女は顔を背けた。私の息が、何かが焼け焦げたような嫌な匂いだと、自分でも分かる。それに、声は少しも出ていなかった。私は足を揃えたまま周りを見回した。私の探し物を見透かすように、二人組の内の一人が、後ろ手から酒瓶を差し出した。瓶の開いた口に鼻を寄せると、息と同じ匂いがする。それを女が掴み取って、逆さに吊られた男に向けて叩き付けた。瓶は割れて、中の黄色い酒が男の腹を濡らした。それを女は、男の体を撫で回して、男の肌に擦り込んでいった。女の足元で、割れた瓶の欠片を二人組が集め出した。一人が、それで指を切って大袈裟に叫ぶと、四阿にいた者達の何人かが、一斉に駆け寄って二人を跳ね飛ばし、瓶の欠片を奪い合った。腕に噛み付いたり髪を引っ張ったりしても、男の体を撫で回す女の邪魔にならないよう、気を配っているようだった。

土気色のままの男の肌が、黄金色にぎらついた。女は、男の体を回転させて、その光沢の及んでいない所を探しては、そこに念入りに酒を擦り込んだ。女の手の届かない膝から先を除いて、男の体がその一色の光沢に包まれると、女は、

男の顎と頭の天辺を乱暴に掴んで、ガチガチと男の歯を鳴らした。歯茎は濁った緑色をしていた。火花が散って、ぎらつく男の唇に薄い色の炎が仄かに点り、それは、ゆっくりと男の首を囲んで胴体へと這い上り、腕の方へも延びた。女は、尚も男の体を撫で回して、その炎を導いて拡げて行く。割れた瓶の欠片を奪い取った者達は、舌や唇や頬が傷付くのも構わずに、急いでそれを舐めようとした。それでもそれを互いに妨げ合っているので、欠片は、何時まで経っても黄色い酒で濡れたままだった。たまに、頬張ってしゃぶり尽くして吐き出した小さな欠片もあり、それには彼らは見向きもしないので、二人組は、そういうものには手を伸ばせた。どれも、血と唾に塗れていた。

　肌に擦り込まれた酒だけが燃えたようで、炎が収まると、黄金色のぎらつきが消えた替わりに、土気色のままだが何処か透き通るような肌が、指先に至るまで艶々と光った。女は気付いているだろうか、その男の両膝から、薄い煙が上っている。女は、男の口の中が気になるようで、その開いた口から、緑の微かに焼け焦げた鋼色の舌ビラを引っ張り出して弄っている。煙は段々と濃くなって、膝が赤い火を噴いた。膝から足首までの色が急に変わって、その内側はもうすっかり焼け焦げているのが分かった。私からその男まで、ほんの二、三歩でも、足の裏に刺さっている鋲が恐くて、踏み出すのは躊躇われた。そうする内に、男の膝から足首までが黒焦げになって、男の脚は膝で千切れた。落ちて

くる逆さの男を受け止めたのは、瓶の欠片を奪い合う内の一人で、その肩や背中に、男の膝から足首までの粉々に砕けた燃え滓が降り掛かった。女はそこから数歩後退った所で、それを眺めていた。踝から爪先までは燃えずに、まだ宙に浮いて風に揺れている。透き通った縄も微かに焦げ目が見えたが、まだしっかりと足首を締め付けているようだった。

男の体が落ちたのを合図のように、他の者達の動きが激しくなった。硝子片を奪い合うより、一欠片ずつに一斉に口を寄せて、その上の黄色い酒を啜った。酒は舐め尽くされ、黄色くなった彼らの口の周りに薄い色の炎が点ると、彼らは、傷だらけの口を上に向けて開けたまま、瓶の欠片を捨てて海の方に走った。細切れに私の耳に届くその甲高い叫び声が、私を呼んでいるようにも聞こえる。後ろ姿からして、どれも女に違いない。それなら四阿に残ってのんびり雑談に耽っているような者達は、男ばかりだろうか。彼らは、四阿の外を見向きもしない。痩せた男を受け止めた者は、そのまま男の下敷きになっている。男の骨張った長い手足が地面に伸びて重そうだった。藻掻く程、男の足の燃え滓に塗れて、体中が黒く汚れていった。男か女かは分からない。制服の二人は、瓶の欠片を全て集めて地面に並べ、順に繋ぎ合わせている。血と唾が糊の代わりで、瓶の形に戻すのは、そう難しそうでもない。

女が私の方に来た。丸めた黄金色の布切れが、右と左の掌を行ったり来たり

している。女はそれを私の目の前で拡げた。縁をぐるりと黄金色に焦がした艶々とした鋼色の男の舌が乗っていて、女は、直ぐまたそれを布にくるみ、捻って布ごと二つに裂いて、私の足元に並べて置いた。それから女は、私の手を握った。両掌が女の爪の伸びた指で軽く引っ掻かれると、私の両足は前に出て、それぞれ小さな布包みを踏むのが分かった。女の掌を踏んだのと同じ位の大きさに感じられた。骨の髄まで粉々に砕かれるような痛みが、足首から膝まで突き上がってきたが、直ぐにそれは嘘のように引いて、痛みはそれきりだった。

　足の裏の温々した柔らかさのせいで、足は独りでにでも歩き出しそうだ。制服の一人が、復元された酒瓶を差し出した。埋めようのない細かな割れ目が、硝子の表面を幾つも走っている。女は私の手を放し、瓶を受け取って息を吹き込んだ。ポーという短い音が煙のように湧いて消えた。私はその匂いを嗅ぎたかったが、女は、瓶を左手に持って歩き出した。液体の跳ね回る軽い音が、瓶の中から聞こえる。制服のもう一人は、男の下敷きになっている者を助け出そうと、燃え滓で真っ黒な服を掴んでは引っ張るが、服が破れるばかりで、体は下敷きのままだ。破れた服から下着が覗いて、女だと分かった。

　硝子の高い屋根が先へ先へ延びて、柱廊のようだった。女に追い付いた私は、ずっと女の左斜め後ろを付いて行って、瓶から目を離せなかった。足の裏が地面から浮く瞬間だけ、刺す痛みが戻った。それならずっと足を引きずって歩い

たらどうなるだろう、などと考えていたら、女を見失った。そこで硝子の屋根は終わり、直ぐ先は縦長の楕円の穴で、見詰めると暗過ぎて目が眩む。その縁を、黄金色の光沢がうっすらと滲んで、暗さを抉るように環になって取り巻いた。暗いのではなく、余りに明る過ぎて、目を眩まされているのではないか。冷んやりした静けさに背中を撫でられたようで、振り返った。長い硝子の屋根はぼやけて更に高く見えたが、人の姿どころか気配もなく、風の吹き抜けるのも許さないように全てが止まっている。色は見て取れないが、地面に点々と小さな染みが続くのは、女のぶら下げていた酒瓶から漏れたものに違いない。女は、ここまで来て先に穴に入ったのか。目を凝らすと、どの染みも足跡の形をしている。私が、一つ一つ踏んで来たのだ。足の裏を確かめようとしたが、海へ行った女達の呼び声が聞こえたようで向き直ると、穴の中は光り輝いて地面を黄金色に照らし、その熱を浴びて足の方から焼き焦がされそうで、急いで私は、光りを抱くように胸を開き、黄金色に身を投げた。

よろけて、二、三歩進んだ。光る穴に飛び込んだのではなく、暗い穴から明るい外へ出たのだった。振り向くと、縦長の暗い楕円の穴は、切り立つ崖の縁に穿たれていて、その縁をゆっくりと降りてくる風が、私の息と同じ、何かが焼け焦げた嫌な匂いを振り撒いた。その匂いに囲まれて、私の息は濃い潮の香りになった。海は何処にも見えない。目が慣れると、辺りは、それ程明るくも

ない。空一面鋼色にくすんでいて、やはり地上の影を悉く消してはいた。
　何人かの声が風の中を揺らぐ方を向くと、細長い背中が幾つか、輪になって並んでいる。どれも私より背が高そうだ。思い思いの恰好で、色々な楽器を手にしたり抱えたりしているが、話し声ばかりで音は出ていない。足元に、割れた酒瓶の欠片が散らばっている。手に取れるものからそれらを拾い集めていると、制服の二人組の一人が寄って来て、両手いっぱいの割れた瓶の欠片を私に見せた。私の掌にも同じだけのものが溜まっていた。欠片はそれで全てだろう。二人でそれらを地面に並べ、しゃがみ込んで酒瓶をまた復元しようとするが、幾ら取っ替え引っ替えしても継ぎ合わさらない。どれも濁った緑色をしていて、どう見ても一つの酒瓶の割れたものだ。それなら、継ぎ合わさらない理由は、欠片とは別にあるのだ。それを見付けようと立ち上がった。輪になっている者達が、一斉に肩を震わせて演奏を始めた。その一人一人の息遣いの鋭さからして、男ばかりに違いなかった。
　制服の一人が、瓶の欠片を掻き集め、それを全て抱え込んで立ち上がった。それと私は同じ背丈だった。やはり私の足は、穴を抜ける時に、光りに焼き切られたか。しかし、制服は妙に胴が長く、中にもう一人隠れていて、肩車でもしていそうではないか。制服の脇腹を押してみた。思った通り、妙な具合に傾いてぎこちなくよろけたが、柔らかく身を躱したようでもあり、そのまま私か

ら逃げて行く。私は追い掛けた。そうして私達は、演奏する男達の周りを、グルグルと走り回っていた。胸に抱えている瓶の欠片が零れ落ちる度に、私はそれを拾ったが、どれも直ぐに手から滑り落ちた。制服がいきなり私の方を向き直って、何も抱えていない胸を開いて見せた。私の足も止まった。足は焼かれていなかった。地面に落ちた歪な硝子片は、演奏する男達の周りを楕円を描いて囲んでいた。その一つ一つから、地面に、微かな黄金色が染み出ている。掌を見ると真っ黄色で、雫すら垂れそうに濡れていた。制服の袖から出ている傷だらけの手は、その真っ赤な傷口までが凍ったように乾いている。私の手だけ濡れるのは、裸同然の薄着のせいに思えて仕方なかった。

　男達は皆裸足で、土気色の艶々した細長い脚でリズムを取っている。楽器が壊れているに違いなく、音は少しも出ていない。私は、硝子片を踏まないようにして、音が出ていないのを一人一人に伝えて行ったが、誰も私の方を振り向かなかった。一回りしてやっと、自分の声が出ていないと気付いた。そして、両足とも、瓶の欠片を踏んでしまっていた。足の裏は柔らかく痛みもないが、制服の腹が裂けて一人が二人になり、私の脛に片方ずつしがみ付いて、私の足を持ち上げようとした。男達の輪の中から、その二人に指図する女の声が、酒臭さと一緒に聞こえてきた。足の裏の刺すような痛みが戻った。私は、制服の二人の肩に手を置いて、自分で体を持ち上げた。体は、ずっと風に吹き曝され

ていたのだ。歯がガチガチと鳴った。楕円の穴の奥から、私を呼ぶような声が立て続けに聞こえた。歯を食い縛って何とか歯の音を止めると、海に向かった筈の女達が、互いの腕に噛み付いたり髪を引っ張ったりしながら、一塊りになって穴から出て来た。口の周りの炎は消えていた。彼女達も寒いのか、掴み合いを已めて、歯を鳴らした。歯が木で出来ているかのような軽い音が、うるさく響いた。それが已むと、私に向かって何か叫ぼうとするようだが、声は殆ど嗄れていて、まるで獣に威嚇されているようだ。口の周りは、ただ土気色に艶々して、唇や頬の傷を黄金色にぎらつかせた。体から、何かが焼け焦げた嫌な匂いが盛んに振り撒かれた。私は制服の二人に放り投げられ、穴を背に尻餅を搗いた。二人は四つん這いになって、男達の輪の中に素速く逃げ込んだ。

　その女達は楕円になって取り囲み、足元の瓶の欠片をそれぞれ二つずつ拾って、その一つを自分の口に銜え、もう一つを男の口に銜えさせて、男の首に横から抱き付いた。男と女の数は同じで、抱き合う者達の輪が出来た。銜えている硝子の欠片と欠片が、激しく擦れ合った。少し離れて見れば、硝子の欠片の重なりは、舌を絡ませているように見えただろう。硝子の嫌な音が、輪になって競い合う。男達はそれでも楽器は手放さず、抱き合う邪魔にならないように高く掲げた。楽器はどれも半端な壊れ方ではなかった。それを見て私は、黄色く濡れた掌で盛んに顔を擦っていた。

　また歯がガチガチと鳴って火花を散

らし、顔が炎で覆われるのが分かった。男女の口から、真っ赤な涎が垂れて地面を濡らした。

足の裏に左右一欠片ずつ突き刺さっている硝子片を抜き取ると、刺すような痛みは増してズキズキし出した。私は、その瓶の欠片を二つ重ねて口に銜え、食い縛った上下の歯をゆっくり横にずらしては、硝子を擦らせて音を立てた。輪になっている男女が一斉に私の方を向いて、抱き合うのを已めた。男達の口だけに、私と同じように、二つの硝子片が銜えられた。地面に投げ捨てられた女達に当てて肩を震わすと、音が出て演奏が始まった。男達が、その口を楽器は、赤い涎を拭きながら私の方に寄って来て、私の銜える硝子片を引っ張ったが、私の顎の力の方が強かった。私の顔の炎が女の手に燃え移って、女達は、途切れ途切れの叫び声を上げた。それが男達の演奏と混じり合うと、その音色に、犬の鳴き真似のような音が幾つも紛れ込んで唸り続けた。それもまた音楽の一部のように聞こえてくる。私は立ち上がって、更にきつく噛んだ顎をぶるぶる踊らせ、硝子の音を連続させて、その音楽に立ち向かった。女達は後退り、男の首にまた抱き付いた。その男の首にも炎は移って、火は大きくなって行ったが、音楽は同じ調子だった。忘れられてしまったかのように、誰も私の方を見向きもしなくなった。

その火と音楽を左右に分けて、制服の二人を両脇に従えて、女が出て来た。

左目を赤く腫らし、私と同じ薄着で、燃え滓の炭を体中に擦り付けて黒く汚れていた。目の腫れは、更に黒ずんで平べったく拡がっている。膝から下の足がなくて、制服の二人が、女の腿を抱き抱えていた。私は、女に抱き付いて、銜えた二つの硝子片を女の口に差し込み、体を揺さぶった。挑むように女もそれを銜え返して、私以上に体を揺さぶった。女の方が背が高く、段々と私の反り返った首が痛くなり、顎の力が弛んで、硝子の破片を二つとも女の口に奪い取られた。そうなってしまっては離れたかったが、女は私を抱き締めて放さなかった。女の土気色の艶々した顔は、私の顔の炎を跳ね返した。硝子の音を軋ませる女の口から、黄色い酒が涎のように溢れてきて止まらなくなり、それは私の体にばかり掛かった。女の腕の中で藻掻くと、女は、濁った緑色の歯茎を見せて高笑いし、私を放した。私は、降り掛けられた女の涎を掌で拭おうとしたが、却って、体中にそれを擦り込んでしまっていた。顔の炎が、体へ燃え広がって行く。熱くはないが、炎から噴き上がる蒸気が酒臭くて嫌だった。脚を見ると、膝から下は燃えていない。そこだけ青味掛かって、腿に垂れる黄色い酒も弾いていた。悪い兆しに違いない。逆さ吊りにされた男と同じで、燃えていないのは外面だけで、中はもう炭になっているのではないか。

　女の涎は止まっていて、硝子の擦れる音も已んでいた。演奏も終わったらしく、輪になっていた男女は、抱き合ったまま一列になって、私の直ぐ脇を通っ

て、楕円の暗い穴へ入って行く。地面の焼けた跡が、楕円を描いて残っているが、彼らの垂らした真っ赤な涎だけは焼けずに地面に染みたままで、それもまるた楕円を描いていた。私の膝は火を噴かず、膝から上の炎が収まっても、膝から下はどうもならなかった。足の裏の痛みは全く引けて、足は、感覚をなくしたように軽い。女の顔を見上げて、

「鋲を埋め込んだのが良かったんですね。」と言おうとしたが、声は出なかった。女が顔を背けた。私の息がひどく酒臭いのが分かる。女の体から、何かが焼け焦げた嫌な匂いが噴き上がって、私は仰け反った。そのまま、背にしている楕円の穴の中に吸い込まれたようだ。

暗い穴に落ち込んだのではなく、明るい穴の中から、暗い外に転がり出たのだった。冷たい岩肌の崖の斜面に、頭を低い方に向けて仰向けになっていた。直ぐ先の崖の天辺で、斜め上を向いた楕円の穴からの光りが、その周りを白く照らしている。真っ青な、広く高い夜空が見上げられた。焼け焦げた匂いは、どうやら穴の中からのようだが、そこから吹き下ろす温かい風は、やっと私の胸を撫でる辺りで掻き消え、周りは濃い潮の香りに満ちていた。その空気を吸っても、私の吐く息だけは、冷たく澄んで何の匂いもしなかった。頭をゆっくり捻ると、サラサラと砂の音が耳を擽る。そこでもう崖は終わって、砂浜なのだ。

身を起こすとしかし、崖の途中のほんの僅かな窪みに砂が溜まっているだけで、私の頭を受け止めていた。そこがそのようでなければ、もっと下まで滑り落ちていたかも知れない。耳の後ろが生温く、触ると血で濡れている。血は、白い砂の上にも細い一筋を引いていて、割れた瓶の欠片の緩く弧を描く縁をなぞっていた。四つん這いになって、砂からそれを拾い上げると、砂の中で、硝子の当たる音がして、それを頼りに、次々に濁った緑色の硝子片を掘り出した。

それを窪みの縁にぐるりと並べると、私は、女達に取り囲まれていた。女達の裸足の足は、青味掛かって仄かに光り出しそうで、真っ直ぐ静かに立つ炎を並べたようにも見えた。女達は、私の掘り出した硝子を一欠片ずつ抓み取って、唇に当てた。女達の唾に塗れて、硝子の表面は、濁った緑色のまま黄金色にぎらついた。細い指に揉み込まれて、硝子片は段々と柔らかくなっていないだろうか。指の爪は短く切られて、透き通る小さな花びらを指先に貼り付けたようだ。柔らかくされた瓶の欠片を、女達は次々に口に含んだ。全員の口の中に収まると、その口から一斉に、鋭く澄んだ声が湧き起こって、夜空に伸び上がった。縦に長く開いた口の中で、ゆらゆら震える硝子片は舌ビラにしか見えなくて、それによって精確な発音が刻み出されているに違いない。声が旋律を歌い出すと、それに共鳴するのか、硝子の震える音が、砂の下から微かに響き出た。そこの砂を掻くと、瓶の欠片が二つ出て来て、それに触れただけで硝子の音は

已んだ。その二つで最後だろう。女達は静かに身を翻し、一列に並んで、光る穴の方に斜面を登って行った。

入れ替わるように、男達が私を囲んだ。窪みの縁の残りの硝子片を一つずつ抓み上げ、それぞれ楽器の縁に差し込んで、その尖った先を素速く口に銜えて一斉に音を鳴らした。金属的な響きが、私を隙なく取り巻いて辺りを揺るがし、私の頭は切り刻まれそうに細かく震え、最後の瓶の欠片を拾い上げても、その度に手から滑り落ちた。登って行った筈の女達が、影のように一人ずつ男の後ろに付いた。また歌い出すと、女達の方が明るくなって、男の方が女の影のように見えて来る。楽器の音と女の声は互いに打ち消し合うのか、何も聞こえなくなった。男達の肩は震え続け、女達の口は動いている。私は、拾い直した瓶の欠片を、砂塗れのまま、左右に一つずつ握り締めた。尖った先が掌に突き刺さり、その痛みに叫びを上げるべきだろうが、声の出ないのはもう分かっている。

砂の上に跪き、手を合わせて、掌の二つの硝子片を捏ねるように擦り合わせた。硝子の擦れる音は出ない。その手の上に、幾つも硝子片が降り掛かり、砂の上に散らばった。見上げると、楽器の尖った先が欠けて、銜えるものをなくした男達の口元はだらしなく弛むだけだった。女達の口も大きく縦に開きっぱなしで、その口の中は、舌ビラを抜かれてしまって、ただ暗いだけだった。男

も女もどちらも互いの影のようだ。砂の上の硝子片は、どれも弾力があって濡れていて、継ぎ合わせると、直に酒瓶が復元された。埋めようのない細かな割れ目が、硝子の表面を幾つも走っているが、大きく欠けている所はない。掌に一つずつ硝子片が残った。形は瓶の欠片だが、鋼色をしていて、掌の上をコロコロと転がった。掌に、それが突き刺さった跡は見当たらない。

　また、女達は静かに身を翻し、一列に並んで、光る穴の方に斜面を登って行った。今度は、穴に入るまで見届けようとしていると、彼女達は、穴には入らず、その脇を通って崖の天辺まで登り、その向こうに姿を消した。穴からの光りに照らされても、影のような体の色は沈んだままだった。私の周りから、男達が居なくなっている。物音の響く方を振り返ると、遠い崖の下は、崖を縁取るように線路が走り、暗い中を鋼色に艶めいて浮き立っている。蓋のない箱の形のような小さな貨物車両には、壊れた楽器が乱雑に積まれ、それを男達が押していた。線路は、そこから始まり、緩やかな弧を描いた果てに、海の手前で途切れていた。車両はなかなか前に進まず、海まで辿り着くのは、まだずっと先になりそうだ。私は、鋼色の欠片を懐に押し込み、瓶を抱えて、崖を駆け下りて行った。瓶の底の液体の踊り回る音が聞こえ、男達が私を見上げた。その目線に押し遣られるように、私の足は、男達から逸れて、徐々に線路の方へ寄りながら緩い弧を描いて、崖の斜面を海の方に向かって下っていた。

線路が見失われ、足が止まった。もう崖ではなく、暗い海の高い水平線が間近に迫った。海岸は見えなかった。地面の焼けた跡が楕円を描く中に、私と同じ薄着の女が倒れている。畳まれて横にされた脚立を股に挟んで、膝から下の足がない。私は楕円の直ぐ外に居た。地面の焼けた跡は濡れていて、血と唾の匂いが鼻を突き、どちらを向いても何かが焼け焦げた匂いも潮の香りもしない。抱えていた筈の酒瓶が、楕円の中に転がっている。その瓶の方に、女が、脚立を引きずって寄って行く。女は瓶を手に取って振ったが、何の音もしなかった。私は、来た方を振り返った。地面に点々と滴った黄色い雫が、弧を描いて崖を上って行く。足元に、透き通った縄が飛んで来た。縄の端には、燃え残った男の足が縛り付けられていた。その左右の足の裏に、黄金色の布切れが張り付いていて、それを剥がすと、艶々した鋼色の柔らかいものが潰れてペチャンコになって張り付いている。どちらもを縁の片側を黄金色に焦がして、二つに裂かれた男の舌ビラに違いなかった。私は、自分の足の裏をひっくり返してみた。まるで生まれたままのようにツルツルしていて、ただ黄色いだけだった。指で撫でると、そこだけ黄金色にぎらつき、指先が黄色く濡れた。私は、女が私の方を見ていないのを確かめながら、懐から鋼色の欠片を取り出して、また両手に握り締めた。

　女が直ぐ側に来ていて、私の腕を引っ張った。するままにさせると、女は、

テキパキとした手付きで、私の左右の掌を拡げて、そこから鋼色の二つの欠片を掴み取って唇に当てた。女の唾に塗れても、欠片の表面は鋼色のままで、何処となく冷たい感じの艶を出すだけだった。それから、伸びた爪に真っ黒な垢が溜まっている指で、その二つの欠片を揉んで、またそれに唾を掛けながら少しずつ柔らかくしてゆくようだった。手持ち無沙汰な私は、男の足の裏に歯を立てて、潰れた舌ビラを二枚とも刮げ取った。その奥に鋲が埋まっていた。小さな尖った工具を懐から取り出して、男の足の裏に幾つも小さな穴を開けたが、鋲はなかなか抜き取れなかった。男の足の指の伸びた爪に、真っ黒な垢が溜まっている。先にそれが目に入ったら、足の裏に齧り付く事など出来なかっただろう。女が、鋼色の欠片を二つとも口に含んだ。女の真似をしなければならないと思って、慌てて私は、足の裏から刮げたばかりの舌ビラを口に押し込んだ。女は、汚い指を突っ込んで、口の中の欠片を指先で弄んだ。それもまた、私は真似た。

「始めましょうか。」と、女は言った。口の中で、ゆらゆら震える二枚の鋼色の欠片が、精確な発音を刻み出しているに違いなかった。私は、地面の焼けた跡を跨いで楕円の中に入り、脚立を立てて開き、その上に上って立った。女もぎこちなく体を揺すって上ってきて、私の背中にしがみ付いたので、私は、女を肩車した。微かに潮の香りのする風が頬に当たって、海岸が見えた。

水際の女達の体は、揺らめく影のようだが、その幾つかが入れ替わり立ち替わりに青味掛かって仄かに光り、その足元に寄せる波だけが黄金色に滲んで見えて、裸足の足を炎が舐めるようだった。女の顔を見上げると、左目の腫れはすっかり引いていて、細く伸び上がる眉毛の下のポツンと小さな目が、濡れたように黄色く輝いていた。弧を描いて崖を上って行く黄色い雫の点々とした連なりを、その瞳に映しているのだ。私にも声が出せるのではないか。聞きたい事が幾つかある。膝から下の足を、女は何時何処でなくしたのか。他の女達の指の爪は皆、透き通る花びらのようなのに、どうして一人だけ伸ばし放題に汚くしているのか。

「そんな小さな目で何を見るんですか。」と私は尋ねた。話すのを覚え込まされたばかりの犬の声のように聞こえた。（二〇〇二年十二月十三日）

*　*　*

文字

一面、サクランボが踏み潰されていて、嫌な匂いがした。緩やかな上り下りを繰り返す細い舗道を、私達は蟻のように、穴から出て一列になって歩いてき

た。道はそこから急に暗い森に入ったが、その森がいきなり終わって、その先で白い砂地が強い陽を受けているのが、小さくだが、もう見えていた。そちらへ近付くに連れて、白い砂地の上の空が段々と高くなり、木々の枝振りが影絵のようだ。それを、何時の間にか横目で眺めるようになり、遂には、来た方を振り返らなければ見られなくなった。私は、列から独りはぐれていた。足元がひどく泥濘んだ。

　それでも、森の中を進む列は、少し離れた所にまだ見て取れて、彼らと同じ方向に歩いてさえ行けた。それを妨げたのは、二両編成のずんぐりした青い列車と、それに寄り添うような小さな駅舎だった。森は、いきなりそこで終わっていて、強い陽差しが私の腰から下を照らして、目を眩ませた。両足だけは更にぎらついて見えて、泥塗れで濡れているのが分かった。

　駅の構内から、誰も居ない改札口を、鳥籠を抱えた背の高い痩せた男が、足早に通り抜けてきた。その顔を見て取ろうとするより早く、陽を浴びたその全身が透けるように輝き、銀色を滲ませた長い髪が、顔に覆い掛かるのが分かるだけだった。鳥籠の中に、薄紫の影が僅かに閉ざされた。男は何か急いでいるようで、私の足元まで延びている一段だけの石段を下り、少し遠い辺りに向かって腕を振った。それが片腕なのか両腕なのか確かめたくて、私も石段を下りた。両腕でなら、胸の前の鳥籠は首に掛けているに違いない。男の輪郭が周り

の光に殆ど溶けて、鳥籠の薄紫色も消えた。慌てて石段を踏み上がると、陽陰の境目に鳥籠だけが残された。光りの奥で風が揺らぎ、男は、その風に呑まれて水のように何処かに流されて行くのかも知れない。その見えない姿も追えなくなり、私の足は、改札口よりずっと奥の方から聞こえてくる何やら単調な物音に駆り立てられて、鳥籠に近寄って行く。

私より早く、別の小柄な男が、改札を出て片膝を突き、大切そうに鳥籠を抱き上げた。目鼻立ちははっきりせず、頭は角張っていて、首の上にただ真四角な箱を乗せたかのようだ。鳥籠には何の興味もない風を装って、私は足を逸らした。改札口の直ぐ横は硝子張りの小さな売店で、中の売り子は、陽の光りに胸を斜めに断ち切られて、右肩から下を輝かせ、左肩と首から上が陰になっている。光りにも陰にも目を慣らせず、売店の中は、明暗二色の他に見て取れない。私の脇を回り込んで、鳥籠を抱いた男が売店に近付くと、その脇腹の辺りから薄紫の列が滲み出て、並べて差し立てられた新聞が、光りの手前に食み出た。どの新聞も、似た写真を一面に載せている。荒らされた部屋に重装備の者達が踏み込み、無防備の二、三人は、汚い紙袋を抱えて、狭い戸口から部屋を出て行こうとしている。見出しは、難しくて読めない一文字だけが表を向いて、それは、木の名前を表す文字のような気がした。

「小鳥を貸してくれる店を知りませんか。」と、男が言った。売り子に尋ね

たのだろうが、男の顔は、私の方を向いている。売り子の体が狼狽えるように揺らぎ、小さな吊り棚に何冊か危なっかしく差し込まれている時刻表に、その頭が掠めた。小さな音が、私の足元で立て続けにして、男が、腰を屈めて手探りを始めた。風で紙の捲れる音が、私の足元で立て続けにして、男が、腰を屈めて手探りを始めた。風で紙の捲れる音が、私の足元で立て続けにして、男が、腰を屈

素速く踏み出した。男が、今度こそ遅れまいと、私は、その音のする辺りに片足を素速く踏み出した。男が、鳥の鳴くような耳障りな声を上げ、鳥籠を抱えたまま地面に仰向けに転がった。

売り子が身を乗り出して、売店と駅舎の壁の僅かな隙間を指差した。左肩は陰のままだったが、頭の天辺が陽に晒されて、突っ立った縮れ毛が赤く輝いた。私は、それから目を離さずに足を浮かせ、踏ん付けていた男の手の中の、砂でザラザラした小さな本を取り上げた。吊り棚から落ちた時刻表と思ったが、パラパラ捲ってみると、色々な鳥の巣の絵ばかりが出て来る。男は、両腕で鳥籠を抱き締めて、心地良さそうに腰を揺するだけで、立とうとしない。

「ここを抜けて、溝が掘ってある所を行けば分かりますよ。」と、男か女か分からない声で売り子が言った。その声を待っていたかのように、今度は小柄な女が、私達の方に首を伸ばしながら、改札口から出て来ようとしていた。足元の男と同じ位の背丈で、顔付きも何処か似ている。私は、男の手を踏んでいた足をそっと引いて、売り子が指差す隙間をやや芝居掛かって覗き込みながら、売店の方にジリジリと体を寄せた。改札を出た女は、男の傍らにしゃがみ込ん

で、男の口に耳を寄せた。男の角張った唇が、尖ったり弛んだりの同じ動きを繰り返し、誰に本を取り上げられたかを、女に告げているようだった。聞き耳を立てて少し身を乗り出すと、男は、顎を突き上げて、女の耳朶を銜えた。そうしなければ、口を止められないらしい。そうまでして、私に聞かれたくないのだ。女は、耳朶を男の口のさせるに任せ、瞼を半ば閉ざして、短い首をゆっくりと捩った。女の顔が、真っ直ぐ私の方に向いた。

「ついでがあるから、ご案内します。」と、売店の何処かから籠もった女の声がした。陰の側の小さなドアが開いて、売り子とは別の者が出て来た。開いたドアから、陰になっている地面の上に、逆三角形の陽の光りが延びて出た。その女はもう、すらりとした背を向けて、売店と駅舎の隙間に歩き出していた。肩の下まで真っ直ぐに垂れている黒い髪の端に、何処からか洩れてくる柔らかい金色の陽が、当たったり逸れたりする。数えられる程の光る筋が波打って、髪がそこでだけ僅かに風に舞っているのが分かった。

私は、腰のポケットから鳥の姿の鋳られた硬貨を一枚掴み出して売り子に渡し、新聞を一部、抜き取って拡げた。一面の全てを見渡したが、大見出しは、難しくて読めない一文字だけだった。木の名前ではない、別の事柄を表しているのではないか。記事の文字は小さ過ぎてぼやけた。新聞の縁と重ねて右手に掴んでいる鳥の巣の絵本に、後ろから細い腕が伸びてくる。新聞と同じく強い

逆光を浴びて、肘から手の甲までの輪郭が黄金色に輝いた。眩しくて目を逸らすと、女の耳を衘えてひっくり返っていた男は、もう足早に、売店を出た女の後を追っていた。私は、新聞を畳んで、本を左手に持ち替えた。それでも女のてくる腕に、苦し紛れに新聞を渡そうとするが叩き落とされ、フワリと拡がった新聞は、陽と陰の境目に置かれた鳥籠の側面に被さって風を受け、そのままに留まった。その紙の眩しさにまた目を逸らした時には、本を奪われていた。

小柄な女は、その手にした本を脇腹の辺りに差し込んだ。ポケットでもあるのだろうが、私の目には、本は手品のように消えた。それから女は、鳥籠の後ろの陰の方に入り、新聞を剥がして宙に放った。いきなり風が回り、ばらけてギラギラと輝く新聞紙が次々に襲い掛かって来た。それを振り払ったり身を躱したりしている内に、女はそこを離れた。売店と駅舎の隙間の方を見ると、女の小さな背中が、駅舎の方に傾いては揺り戻されながら、遠ざかって行くところだった。売店の脇から延びる逆三角形の陽の光りに踏み込んで、小振りな脹ら脛が、一際輝いた。それが片方ずつ陰の中に跳ねて、女の背中は消えた。また風が回ったようで、戻って来た新聞紙が、続けざまに私の頭の後ろに張り付き、はためく紙の端が左目に当たった。剥がそうとするが、私の手より、回り続ける風の方が素速い。前が見えず、頭はすっかり包まれてしまったかも知れない。

徒に手を出して却って紙が絡み付くなら、風の為すままにしてみようか。目の間近の新聞記事の小さな文字が、くっきりと見えた。今年、サクランボが全く実らなかったという記事だ。周りで笑い声がする。頭に新聞紙を巻き付けて突っ立っている姿は滑稽に違いないが、どうやら笑い声は、紙の内側で響いている。笑っているのは私なのか。手を使わずにそれを確かめようと、その場に額ずき、紙で覆われた唇を地面に押し付けて、その感触を探り取ろうとした。初めは、ジッと動かない唇に地面の冷たさが伝わるだけだったが、口の周りの紙に唾が染みて柔らかくなると、地面の奥から響いてくる笑い声のような振動が、唇をゆっくりとこじ開けた。私は、真上に噴き上がる泉に口を付けるようにして、その響きを口の中に導き、喉の奥まで流し込んでいた。その冷たさが胸の奥まで届くと、そこから笑いが込み上げて来るようだ。腕を突っ張っても腰を振り立てても、唇が地面に張り付いて起き上がれない。湧き出る響きは、もう呑めるだけ呑んで、それでもまだ口に押し込まれて来て、吐きそうだった。込み上げるのは、笑いではなく、地中深くから掘り出されたばかりの石の匂いのようでもある。

その込み上げて吐いたものが、紙の内側に溢れたせいか、頭に被さっていた新聞紙は、破れて舞い散った。地面の響きは已み、唇を地面から離して、ゆっくりと腰を伸ばせた。陽は少しだけ動いて、直ぐ前の鳥籠は、陰の方に寄って

傾いて見えた。いや、実際傾いているのだ。陽を受けている側が高くて、その下に本が挟まっている。膝を地面に付けたまま鳥籠に近寄ろうとするが、膝は進まず、腰が左右に拗るだけだった。段々と息が上がって、吐く息は、地中深くの石のような匂いを濃くした。胸が陽の光りで斜めに断ち切られ、左肩から下が陽を受けて眩しく、右肩と首から上が陰に入っていた。売店に売り子の姿はなく、独りだった。独りなら少し位みっともない恰好をしても構わない。地面に突っ伏し、腹這いで腕を伸ばした。左手が、本に届いて輝いた。膝から下を跳ね上げて、爪先を上に向けられても、膝頭は、地面に着いたまま根が生えたようだ。地面に擦り付けられた胸の奥から、押し詰められた笑いが込み上げてくる。

　鳥籠の下から本を抜き取って開くと、絵が出て来るのでも数字が並んでいるのでもなかった。私は、中に印刷された大振りな文字を、少しだけ唇を動かして斜め読みした。笑いが幾らか収まる。売店の方でカサコソ音がした。中で売り子が、また左肩から下を陽に晒し、右肩と首を陰にして、のろのろと商品を並べ替えている。姿が見えなかったのは、どうやらその場にしゃがみ込んで、配送されてきた荷物を解いていたらしかった。

「お祈りなら余所でやって下さい。」と、男か女か分からない売り子の声がした。本の表紙を見ると、祈祷書だった。膝に生えていた根が嘘のように消え

て、私は立ち上がった。また聞こえて来た笑い声は、私のものではない。振り返ると、切符を売る薄汚れた窓口の脇に、痩せ細ってまだ子供かも知れないような男女二人ずつの四人が、駅舎の壁に背中を寄せて並び、私と同じ本を開いていたが、それでも彼らの声は、笑っているとしか聞こえなかった。私も、込み上げる笑いをどうにも出来ず、祈祷書を持ったままでは、彼らの仲間に見られても仕方ない。

「小鳥を貸してくれる所が、あるんですか。」と、私は、笑いを押し殺して売り子に尋ねた。陰の中に埋もれて顔の表情は分からないが、売り子は、黙って商品を並べ続けた。私の声は、笑い声でしかなかったのかも知れず、売り子の耳には、それはお祈りでしかないのかも知れない。鳥籠を抱えて尋ねれば、幾らかは伝わり易いだろう。しかし、もう右腕が鳥籠を抱えているなら、私は、立ち上がりながらそれを抱き取ったのか。祈りか笑いか分からない声が、脇腹が擽ったくなる程に、私の直ぐ側を取り巻いている。四人は、鳥籠に手を添えていた。それなら、彼らが今、私に鳥籠を抱えさせたのか。

答えを待つまでもない。小鳥を貸す店は、売店と駅舎の隙間を抜けた先の、溝に沿って行った所だ。息の合う仲間のように、四人と一緒に、私はそちらに向かった。売り子は、どう見るだろう。彼らと仲間でないのをはっきりさせるべきで、売店の前を通り過ぎる時、手にしている祈祷書を、吊り棚の時刻表の

間に差し込んだ。それは時刻表にそっくりで、吊り棚が一揺れして、もうどれがどれか分からなかった。私が笑い声を上げると、それに合わせて、本に目を落とすままの四人の声が続く。独りでに口を突いて出る程に祈りの文句を憶え込んでいる私が、未熟な彼らを導いて唱和させているかのようで、そんな事を已めにするには、売店と駅舎の隙間を抜けたら直ぐに走り出して、彼らを振り切るべきだろう。

　陽が、逃げるように翳った。後、二、三歩の所だったのに、売店のドアから延びる逆三角形の陽の光りも消えた。その直ぐ先の陰の中に、駅舎の壁と向き合って、跪いて俯いている小柄な女の姿が、薄い煙のように現れた。小振りな脹ら脛が、上を向いて冷たそうな地面に揃えられている。風に晒される肌は、白く乾いて見えた。男の後を追ったのではなく、ずっとそこにそうして居たのか。壁を通しても、何やら単調な物音は、籠もって響いて来る。女が目を落としているのが、絵本なのか祈祷書なのか、背中越しに覗き込もうとすると、四人が割って入って私を遮り、彼らも壁の方を向いて立ち、私の笑い声と違う調子の声を揃えた。初めて、祈りらしい章句を唱えたように聞こえた。私の足はまだ泥塗れで、地面を濡らす足跡をはっきりと残していた。

　私は、鳥籠を首から吊り下げて、胸に抱き締めていた。鳥籠に繋がる細い鎖の輪に自分で首を通した覚えもなく、これも四人の仕業に違いない。込み上げ

る笑いが胸を震わせるのに合わせて、鳥籠も震え、その格子が軋んで、鳥籠が笑い出すようだ。女と四人が落ち合って壁に向かって祈るなら、私は邪魔者で、引き返しても誰も気に留めないだろう。しかし、四人が、祈祷書から目を離して、鳥籠の笑い声を真似て、その後に付いて唱え始めると、そこを動けなくなった。彼らの声は、祈りにも笑いにも聞こえなかったが、格子の軋む音を真似るのだから仕方ない。鳥籠が重い。下手に腕の力を緩めれば、その重みが首に掛かって、前につんのめってしまいそうだ。

　四人は、本を閉じ、それを胸に抱いてその場に跪いた。私の足元に、どれも同じような細い八本の脹ら脛が隙間なく並んだ。私の後ろは直ぐ売店の壁で、少しでもよろければ、泥塗れの足で、その脹ら脛を踏ん付けてしまう。込み上げる笑いが、勢いを増して来た。鳥籠の震えはひどくなり、もう何時までこの体勢で居られるか分からない。四人の声も大きくなって、鳥の鳴き声のように耳障りだった。鳥籠ごと倒れ込むより、鳥籠だけ彼らに放る方が増しだ。首に掛けられた鎖を噛み切るしかなく、窄めた首を捻って、何とか鎖を銜えようとした。風で鎖が浮いて唇には当たるが、止まらない笑いが、それを銜えさせてくれない。吐く息の、地中深くの石のような匂いが顔に掛かり、目がチカチカして涙が溢れてきた。

　その姿は涙で曇ったが、壁際の女が、立ち上がって私の方を向いた。真四角

な箱のような顔の中で、角張った唇だけが、赤く滲んで嫌でも目に付いた。手に、本は持っていない。口紅か何かのキャップを閉めて、何処か脇腹の辺りにでも仕舞い込む手付きをしなかっただろうか。女は、跪く四人を躱して私の側に体を寄せ、紅の匂いのする両方の薬指で、私の両方の目尻を撫で上げた。溜まっていた涙が溢れて、目尻の脇を濡らしたが、目の前の曇りは晴れた。女の唇に厚く塗られた紅は、ムラになって、暫く風に晒されれば、それが結晶を作って浮き出ても来そうだ。駅舎の壁の、女が向き合っていた辺りに、何かにぶち当てられたような小さな三角の穴が空いていて、見る角度を少し変えると、水のように艶っぽく輝き、鏡が埋まっているようだった。そこに自分の顔を映すために、女は跪いたのか。私は、　鳥の巣の絵本をどうしたのか、女に尋ねたくて、笑いを押し殺そうと努めた。

「ハイ忘れ物。」と、男か女か分からない売り子の声がして、女に手渡されたのは、時刻表そっくりの祈祷書だった。それで売り子はもう、売店の方に背を向けていて、私はまたその顔を見損なった。

「あなたのでしょう。」と女は言って、中を開いてパラパラと捲った。数字ばかりが並んでいた。確か、数字を使う祈りも、あった筈だ。

　それを見て、私は、笑いを押し殺せた。何か言わなければと思っていると、四人が、目を丸くして私を振り返った。口はポッカリ開いていても、声は止ま

っている。鳥籠の格子の軋みが収まって、彼らを導く唯一つの道標を失った恰好だった。跪いたままの四人は、更に腰を捻り、鳥籠を掴んで揺すった。私は、鳥籠から腕を離して首の鎖に手を掛けようとしたが、女が、鳥籠の小さな扉をこじ開け、そこに、手にした本を丸めて押し込もうとしていて、つい手を止めてそれに見入ってしまった。無理に丸められた本は、扉を突き抜けると、弾けるように開いた。風にパラパラと頁が捲れて、鳥の巣の絵が次々に現れた。砂塗れだったが、鳥籠の中も、風で砂が噴き上がる程だった。売り子が女に渡した本は、まだ女が手にしていた。ずっと続いている壁の向こうの籠もった単調な物音が、少しばかり冴えた響きを伸び上がらせた。女は、身を壁際に翻し、壁に空いた三角の穴に、本を持っていない方の手を差し込んだ。笑いがまた込み上げた。私は、四人の手から鳥籠を引き剥がし、売店と駅舎の壁の隙間を抜けて、独りで溝に沿って歩いた。溝の底は、一面、乾いた砂で真っ白だった。首に掛けた鳥籠は、すっかり軽くなって少しも苦にならず、そっと手を添えて揺れを押さえるだけで良かった。

　一軒しか見当たらないのだから、小鳥を貸す店の前に来たに違いない。直ぐ脇は、黄緑色に濁った円い池で、髭を生やした痩せた老人の銅像が、池の方を斜めに向いて少しだけ捩れた細い杖を突いて立っている。先回りしたのか、私の直ぐ後を付いてきたのか、四人が、その台座の後ろに、隠れようとする姿を

私に見せ付けるかのように、一塊りになって肩を小突き合っている。銅像に比べ、彼らは、本当に子供のように小さく見えた。店の中は、埃を被った壊れ物が幾つか隅に寄せられているだけで、引っ越した後のようにガランとしている。奥で、傷だらけの木の階段が横を向いて黒光りしていて、両側は、継ぎ接ぎの目立つトタン板の壁だった。

　別に小鳥を借りたい訳ではないが、空っぽな鳥籠を抱えて店先に立っていては、店の者でも現れれば、勘違いされてしまう。鳥籠を首から外し、地面に置いた。籠の底で、閉じた鳥の巣の絵本は、砂に埋もれ掛けていた。鳥籠の扉は、手を窄めても入らない位に小さくて、本を取り出すのは難しそうだ。女が追い付いてきて、私が何も言わないのに、

「溝に捨てたけど、要らないんでしょ。」と言って、手ぶらで、先に独りで店の中に入っていった。笑うのでも祈るのでもない耳障りな四人の声がして、私の口は独りでにそれを真似た。いや、口ではなく、込み上げる胸の奥から真似られている。今度は私の方が、彼らの後に付いて唱える番か。四人の声は、時々さも気紛れに途切れ、その度に、何かにぶち当てられるように胸の奥が悶えて、繰り返していたら多分、胸が壊れて使い物にならなくなりそうだ。逃れるように、小走りで店に入った。女は、私を待っていたのか、微笑み掛けてきた。唇の紅の表面が、結晶を作り掛けていた。女は、脇腹の辺りから小さな三

角の手鏡を取り出し、それを覗き込んで、上下の唇を擦り合わせて透けそうな赤い結晶を潰した。鏡は、駅舎の壁の三角の穴の中と同じ艶を見せた。それから女は、私に背を向けて奥に進み、黒光りする階段を登り出した。私は躊躇って、足はどちらへともなくふらついた。四人の声を遠ざけても、込み上げてくるのは、もう笑いではない。吐く息の、地中深くの石のような匂いが濃いのは変わらないが、私の声がどう聞こえるかは、他人の耳を通すしかない。私の耳には、胸の奥から突き上がる衝撃だけが届いた。

　要らない筈がない。祈祷書か時刻表か、はっきりしないが、あの本は胸の奥を鎮められる。戻って溝の中を見て行けば、直ぐに見付かるだろう。店を出掛かると、外に四人は見当たらず、鳥籠もなくなっていた。鳥籠を持って立ち去ったのか。しかし、何処へ何のために。不慮の事態が襲ったに違いない。見慣れぬ足跡で、地面が踏み荒らされているではないか。今、外に出るのは危ない。私の泥塗れの足の、地面を濡らした足跡が、ひどく目立った。乱暴な者共に私の居場所を知らせているようなものだ。新聞の一面の重装備の者達が、思い浮かんだ。トタン板の壁が、耳障りな音を立てた。傾いて外れ掛けた狭い戸口が、ぐらついていた。それもトタン張りで、音がしてやっと見分けられる。胸の奥から突き上がる衝撃は、その音を真似ているようだ。外から強い風を受けているなら、走り寄って押さえ付けるべきか。却ってその衝撃が、直に私の胸に叩

き込まれないか。それともそれで、胸の奥がすっかり壊れてしまうなら、それはそれでスッキリするかも知れない。躊躇ってふらつきながらも、私の足は少しずつ戸口に向かった。

　激しい一撃で戸口がすっかり外れ、直ぐ外に、戸口にしがみ付く二、三人の姿が見えた。汚い大きな紙袋を抱えている。新聞に載っていた写真が、目の前と二重写しになった。あの部屋は、ここなのだ。私が居るのを驚いたのか、彼らは、戸口でジッと私を見詰めてから姿を消した。開け放しの戸口に、冷たい風が斜めに吹き込んで、笛のように音を鳴らした。最後の一撃で本当に壊れてしまったようで、胸の奥は何も突き上げて来なくなった。風の冷たさが背中まで回り込み、戸口に引っ掛かっていた破れた新聞紙が中に舞い込むと、床に着くでもなく浮くでもなく、私の周りをフワフワと回った。砂塗れなのは、見て取れたが、それが床を擦れる音までは聞き取れない。その音は、いきなり私の胸の奥を掻き毟って、ザラザラと渦を巻きながら、喉に突き上がってきた。立っていられず、床に手を付こうとしたが、それも出来ない。今にも倒れそうに体を傾けたまま、部屋の中をグルグル回るしかない。新聞紙とは、向き合ったまま近付けも遠ざかりも出来なかった。砂のような息を吐いた。それがまだ幾らか、地中深くの石のように匂っているのは慰めだったし、それが本当の砂のように床に撒かれて、店の中に石の匂いを濃くして行くのは、喜びでさえあっ

た。しかしその分、それを薄める、笛の音を鳴らして吹き込んでくる風が、気に障る。戸口に向かって、その風を脅すために、何か叫ぼうとしていた。それがどう聞こえるかは、また他人の耳を通すしかない。胸の奥の擦れる音も、笛のような風の音も、床を蹴る度の、濡れた足の泥が撥ねる音さえも、私の耳は聞き取ったが、私の叫ぶ声だけは、全く聞き取れなかった。泥の撥ねる音が、途切れがちになった。

　片足に、新聞が絡み付いていた。床に片手が付けて、もう動き回らずに済んだ。戸口に、さっきの二、三人が、顔を覗かせている。抱えている紙袋は汚れているのではない。小さな数字が表面にびっしりと書き込まれていて、それが、新聞の写真では汚れて見えただけだ。仲間でないのは確かだが、話せそうでもある。そちらを向いただけで、体は独りでに戸口に突進し、風の笛の音を突き破ると、外は何処までも薄紫色で、陰の色が眩しい筈はないのに、何処も彼処もその色に塗り込められていては、その色が一斉に襲ってきて、目を細めるしかなかった。外には三人居た。私は、尻餅を搗いて彼らを見上げていて、その更に上に、建物の二階の広い硝子窓が見上げられた。硝子も、薄紫色に隅々まで艶々していた。砂を内側に塗したような喉は、奥まで強張って塞げず、冷たい風が流れ込むままだ。胸の奥から突き上がってくるものは二の次にして、地面に突っ伏すしか、喉を風から守れない。そうして冷たい地面に口を付け、そ

この硬い土を噛み、何処となく甘い味に惹かれて、幾らか口に含んだ。口の中に、うっすらとサクランボの匂いが拡がった。また唇が地面に張り付いたり、膝に根が生えたりしそうで、胸の奥から込み上げてくる何やら単調な物音にも促されて、直ぐに立ち上がった。口に含んでいた土が、足元で、耳朶の形に盛り上がっていた。

皺だらけで泥だらけの新聞紙を、足から剥がした。一面なら、三人が載っているのを見せてやろうと思ったが、別の紙面だった。彼らの抱えている紙袋は、ひどく汚れてもいて、表面の小さな数字は殆ど読み取れない。剥がした新聞紙の方がまだ増しか。それを一人に渡したが、暫くぼんやりと目を落としただけだった。彼らと打ち解けるには、彼らを部屋から追い出した重装備の者達が、まだ辺りをうろついていて、ついさっきも、四人の男女が攫われたかも知れない事を話すのが、手っ取り早そうだ。そう思って口を突いて出たのは、胸の奥から込み上げてくる単調な物音を、声色を使って真似たものだった。三人は、私の方に少し身を乗り出し、私の唾で濡れた耳朶の形の土塊を見下ろした。紙袋の中が、どれも大粒の熟したサクランボでいっぱいなのが覗けた。品薄の高値に目を付けて、何処かから盗んできて、それで、逃げ回っているのかも知れない。

「何を言ったんだ。」と、一人が、疑り深そうな目で尋ねてきた。地面に口

を付けて、地中を伝わって行く言葉を、私が使ったとでも思い込んでいる。私の口からは、物音の声色しか出て来ない。彼らは、それもまた地面の耳に聞き取られるのを恐れるようで、土で出来た耳朶を踏み潰し、私の腕を取って、そこから離れようとした。袋を抱えている彼らの手は、簡単に振り解けた。私は、しゃがみ込んで、また地面に口を付け、踏み潰された土を銜えた。サクランボの匂いのする唾が、ジワジワと土の中に拡がって、渇いた喉が潤うようにも感じられる。地面の奥で何かが振動していて、それが単調な物音になって私の口の中へと突き上がってくる。それは、私の胸の奥からも込み上げてきていて、地面の奥と私の胸の奥が、何の隔てもなく一繋がりであるようだった。顔を上げて息を吸うと、空気は、地中深くから掘り出されたばかりの石の匂いで、私の吐く息だけが、サクランボの匂いをうっすらと漂わせた。それに気分が悪くなりそうで、何度も深呼吸を繰り返して、また胸の奥まで石の匂いを届かせた。土の耳朶は、さっきよりもっと分厚く浮き立っていた。三人に、また同じ声色で声を掛けると、諦め顔で、僅かに後退りするだけだった。吸う息も吐く息も、何処までも石の匂いが突き抜けて行くようで心地良かった。

「そうか、じゃ案内してやるよ。」と、一人が言って、私達は、建物に沿って風下の方へ歩いた。風の当たらない側に回り込み、そこをまた建物沿いに通り過ぎ、池を臨む側に出て、風と向き合った。石の匂いは吹き飛ばされ、少し

だけ息苦しい。何時の間にか、私が先頭を歩いていた。

「ここまでだ。」と言う声が、後ろから聞こえた。足元の直ぐ先は、もう池の縁の泥濘だった。見上げると、真っ平らな高く白い壁は殆ど真四角で、同じ建物でも裏側と違って、こちらは三階までである。二階と三階には、裏で見たのと同じ広い硝子窓が、艶を競っていた。ただ、汚れ放題の錆びた鉄の階段が、急な角度で、壁と窓を斜めに断ち切っていて、磨かれた窓硝子とはひどく不釣り合いだ。見上げる限り、踊り場すらなさそうで、三階の向こうの端のドアまで、真っ直ぐに上って行けるのは良いが、下の端は、池の水に浸かっている。

振り返ると、一人が、皺だらけの丸めた新聞紙を差し出した。サクランボが包んである。私は、それを受け取って、池の縁から黄緑色の水に足を踏み入れた。膝まで浸かると、陽が、強いまま戻って来た。足にこびり付いていた乾いた泥が、粉になって水面に拡がり、陽を受けて金粉のように煌めいた。後ろで三人が、何やら声を揃えているようだったが、もう、ほんの二、三歩なので、私は、階段の水の上の一段目に両足を乗せるまで進んだ。

池の上を吹き過ぎる風が、破れた新聞を何枚も運んで行く。三人は、照り返しを真面に受けて、眩しそうに破れた新聞を読んでいた。自分達の載っている一面を見付け、私には読めなかった大見出しの文字を、大声で口々に繰り返している。その発音を聞いて、それが、木の名前と鳥の名前を一つにした文字だ

と思えた。それとも、同じ音で、木の名前でも鳥の名前でもあっただろうか。私は、彼らの唇の動く通りを真似て、その同じ音を声にしてみた。口の中で、その声と、胸の奥から込み上げてくる単調な物音の声色との、互いを口の外に弾き出そうとぶつかり合う音だけが、耳に届いた。どう聞こえたかは分からないが、彼らの耳にも私の声は届いたようで、真ん中と右側の二人が、顔を上げて、驚いたように私の方を見詰めた。左側の一人だけが新聞に目を落としたままで、よく見ると、その唇の動きは、私が真似たのとは全く違っていた。とばっちりを受けずには済みそうだが、仲間割れは、どうやら時間の問題のようだ。

建物の二階の端の窓が開き、真四角な小さな女の顔が突き出て、真下の三人を狙いを定めるように見下ろしてから、小さな本を投げた。売店の売り子が「忘れ物」と言って女に手渡した本ではないか。それは、羽ばたくように頁を激しく捲らせて宙を舞い、彼らの直ぐ後ろに落ちた。女が溝に捨てたと言ったのは嘘だったか。しかしそれをもう私は、要らない筈がないどころか、目にしたくもなかった。左側の一人が、それを拾いざま、池を背にその場に跪いた。爪先が池の水に触れた。祈りを唱えるように、数字が朗々と読み上げられた。後ろ向きでも、風に逆らっても、声は池の上を響き渡った。他の二人が、跪く者の腕から紙袋を取り上げたが、声は已まず、祈りとしか聞こえなかった。取り上げた紙袋は、どちらも譲ろうとせず、二人で抱えられた。それは、蝶番のよう

に二つの体を繋げて、池の縁を離れようとする彼らの足を縺れさせた。それでも二人は、三つの大きな紙袋に引っ張られるように、歩き難そうに建物の向こうへ消えた。私は、壁の方に擦り寄っていて、女は、一度も私の方を見ずに、顔を引っ込め窓を閉めた。祈る者の方に向かって、弧を並べて波打つ池の水が、風で圧し上げられて行く。直に池は、人一人呑み込みそうだ。もう、その脹ら脛から膝まで濡れて、陽を受けてヌルリと光っている。私もまた、それから逃げるように向き直り、強い風に逆らって、足早に錆びた階段を上った。

　二階まで来ると、窓と窓の間が鉄のドアで、階段はその幅だけ踊り場で、そのドアに身を隠すまま中を覗けた。ガランとした一部屋で、埃を被った壊れ物が幾つか隅に寄せられているのまでは、下と同じだが、壁も床も磨かれたばかりのように真っ白で、塵一つ見当たらない。強い陽が斜めに差し込んで、床を鏡のように反射し、天井に、窓枠の形を並べて照り映えている。部屋の反対側も、こちら側と同じに、壁の端から端までが広い窓だったが、硝子が余りに艶々としていて、そこからの眺めを眩ました。部屋の真ん中で、箱のような頭の小柄な女が、箱のような頭の小柄な男を組み伏せている。周りに化粧道具が散らばっていて、女はそれを代わる代わる取り上げては、男の顔に塗っていた。男の顔は、女そっくりに出来上がっている。そうしていると、どちらが男か女か分からない。よく見ると、下になっている方も、上にのし掛かっている者の顔

に、同じように塗っている。或いはそれは、男と女ではなく、どちらか一人が、艶々した床に自分の全身の姿を映して、化粧をしているとさえ見えて、しかしそう見えると、二人は顔を寄せ合って、互いの耳朶を噛んだりもした。

　左の首筋に腐った泥水の匂いが掠めて振り向くと、池の縁で祈っている筈の者が、私の背中に張り付いている。それだけなら踊り場が狭いので仕方ないが、泥で濡れた本を、そっと私の腋に挟み込もうとしていて、更に、私の手にしているサクランボの入った新聞紙の包みにも片手が伸びて、私達は揉み合いになった。手が、互いに本と紙包みを掴んだ。包みが拡がり、散らばったサクランボは全て、階段を転がって池の縁に落ちた。本だけを両手で掴み合ったが、何のためだろう。二人共それを要らないなら、捨てれば済むのに、奪い合っている。自分の手に奪って、改めて相手に押し付けたいのか。それとも、サクランボがバラバラになっては、また本は、この者に入り用なのか。相手の考えが読めない私は、その為すに任せるのが嫌なのだ。本は、開いたまま捩れて、今にも、裂けそうだった。開いた頁は、数字ばかりで、祈りのための数字なのだろうが、列車の発着時刻を並べたようにも見える。私の体も捩れ、胸の奥から込み上げてくる単調な物音もまた妙な具合に捩れて、その真似難い音の声色を一々作らなければならない私の方が、長引くだけ不利なようだが、相手も、私が声を上げる直後に盛んに首を振って私の声を嫌がるようで、消耗戦になっていっ

た。相手も息が上がってきて、サクランボの腐ったような匂いが私の顔に掛かり、それで私は、私の息が、地中深くから掘り出されたばかりの石の匂いを振り撒いているのを嗅ぎ取れた。風に吹き払われながら、その二つの匂いもまた、私達の顔の上で競り合ったが、決着は付きそうにない。　時ばかり経つのは心持ちが悪い。列車はまだ、駅に留まっているだろうか。

　地面の奥から響き出たような甲高い笑い声に、体が傾いた。踏み外せば二人して転げ落ちる。手が滑って、深く裂けて辛うじて一繋がりの本は、鳥のように池の上を悠々と舞ってから、静かに水面に降り立った。私も静かにそれを見下ろしていた。胸の奥から込み上げる物音は消え、声を作らなくてもよくなった。池の向かい側に、箱のような頭の小柄な一人が、膝を突いて、体を揺らして笑っていた。真っ赤に塗られた唇は、真四角に開くままで、揺れる度にその体は、草の生えた漏斗型の斜面を、段々と池の縁へと滑り下りてゆく。私と争っていた者は、鉄の音を明るく響かせて階段を駆け下り、池に入りたそうにしたが、泥濘に足を取られ、池の縁から沈み掛ける本を見詰めるしかないが、その内に、池の水を掬っては、口に含み始めた。初めは直ぐに吐いたが、段々とその口に含む時間が長くなって、遂にはゴクリと喉に押し込んだ。それから、掬った水を頭や体に掛けて、全身びしょ濡れになった。ただ、そうしてその姿がすっかり池に馴染んでも、足は動かなかった。

本が水に沈むと、風が向きを変えた。私の髪は、池の方に舞った。弧を並べる池の波も、池の向かい側へと圧し上げられて行く。その波の突端が、笑う者の膝を捉えたのは見えた。その者の姿が、逆様に、波間に歪んで映るのも見えた。そして、その水の縁の上と下の二つの姿は、見つめ合って互いの厚化粧を笑わずには済まない男と女だった。どちらが男で、どちらが女だろうか。笑い声が途切れ、池が人を呑むのか、人が池に滑り込むのか、姿が消えていた。唇に浮き立っていた透けた紅の結晶だけが、細かく水に浮いてチカチカと波頭に留まり、そこに、煌めく泥の粉の一群が引き寄せられて行く。二つの色は、打ち解け合い、水の上で、金粉を塗した揺れる平面の中に、赤い何かの姿を描こうとするようだ。見詰める内に、それは跪く者の後ろ姿と分かった。金色の平面が鳥籠の形になるなら、跪く者は鳥籠を抱き抱えるようだ。そして、その脹ら脛だけが、水の色の中へゆっくりと食み出して、金色の中とはまた違う、透き通った赤い輝きを二本揃えるのだった。しかしそんな、余りに微かで、消え掛かっていそうなものまでが、見えてしまうものか。少し恐くなって目を逸らし、心許なく宙を彷徨った目線は、踊り場と壁の隙間に落ちた。真下の、壁際の濡れていない地面に、ポツンと一粒だけサクランボが目に入ると、そこに向かって蟻が行列を作っているのが、はっきり見て取れた。節くれ立った濡れた指が、サクランボに這い上つた蟻を弾いた。サクランボは、抓み上げられ口に

含まれた。首を振ると、濡れた髪から濁った雫がどっさりと飛び散った。その一粒の他は皆、池の縁に落ちて泥に埋まり掛けている。それらには見向きもせず、びしょ濡れの姿は、肩を落とし泥だらけの足を引きずって、建物の向こうに去った。こうして真上からでなければ、泥濘の中のサクランボは、見付けられないのかも知れない。

外には私だけだった。今に水に人が浮かぶだろうという期待は、萎むに連れ、苦痛に変わってゆく。二度と池には目を向けまいと決めて、二階の部屋を覗き直すと、誰も居なかった。化粧道具の散らばる真ん中に、四角い唇の形の紅の跡が、細かな結晶を盛り立てて光っている。差し込む陽の床の反射と、更にその天井の反射が、結晶の一つ一つの中に絡み合って映り込み、それぞれの輪郭に入り組んだ艶を縁取らせる。結晶の先端が、それぞれ隣と、ほんの少しずつ向きを違えている。それらもまた、二階から見下ろされた地面の蟻と同じで、階見えてしまうには明らかに細かな過ぎた。急いで私は、鈍い鉄の音を鳴らして階段を上り始めたが、手に紙切れを掴んでいて、それを三階に顔を出す前に手放すべきか迷い、足は直ぐに止まってしまった。池に沈んだ本の頁を一枚、引きちぎったものだった。

上のドアが静かに半分ほど開いて、それを背に、女が立った。陽の光りは、すらりとした女の胸を斜めに断ち切って、右肩と首から上を輝かせ、左肩から

下をドアの陰に収めた。陽の光りと同じように風も斜めに遮られるようで、肩の下まで垂らした黒い髪の左端でだけ、光る筋が数えられる程に舞って、波打った。眩しい中に読み取れた表情は、私を冷たく見下すようだったが、私の足が動き出して、口元は微かに綻んだかも知れない。私は、階段を上り切って、ドアと同じ幅の狭い踊り場に、女と向き合って立った。窮屈でも、女は、片手にノブを握って動かさず、何も言わずに、空いた方の手で私の脇腹を暫く撫でさすってから、私の腰のポケットに、その手を突っ込んだ。女の指先が、ポケットの底の僅かな硬貨を弾いて、寂しい音を立てた。指はグルグル動いて、硬貨を全て掬い取ってから引き抜かれた。女は骨張った拳を開き、四枚の硬貨の乗った掌を揺すって、鳥の姿の鋳られた側を上向きに揃えた。それから拳を握り直し、ノブを放した手を私の腰に回した。私はそっと、祈祷書の切れ端を手放した。女は、私を先に、中に導いた。

ガランとした一部屋は、奥行きがなく、陽の差し込む窓に沿って細長い。陽の当たらない側は窓がなく、ただ輝く一面の壁で白く塞がっている。壁と天井は、下の階とそっくりに仕上がっていたが、床だけは、薄いベニヤ板が、所々ずれたりしながら敷かれている。一人だけ、私に痩せた背を向けて、跪いている者がいる。やや前屈みに背中を丸め、ジッとしている。その辺りだけは、ほんの狭く、下の階と同じ白く艶々した床が仕上がっていた。腰に手を回された

まま、近寄って行くしかない。踏み出す度に、床板は色んな音を立てて凹み、隣の板との境目に気味の悪い程の隙間を覗かせ、そこから鋭い風が吹き込んで砂が舞い、脹ら脛をヒンヤリさせた。まだ池の水が乾いていない。出来れば、二人の重みを一枚の板に乗せたくないが、女はわざとぴったりくっついて、床の危うさを私に思い知らせたいのかも知れない。

　その女の体が、横にフワリと離れ、窓のない長い壁の端の方に向かった。引き延ばされた壁の白い艶の中に、ぼやけていた女の姿は、段々としっかりとした形を取って映ってゆく。その映る姿が、壁際に幾つか寄せられた埃を被った壊れ物と重なり、女が近付くと、それは、壊れ物ではなくなった。ぞんざいに積み上げられた様が、不恰好な一つの物に見えたのだ。埃を被ったようなのも、手を掛けた末の艶かくすみではないか。女がその一つを取り上げると、丸っこい壺に見えたが、壺にしては表面が余りにトゲトゲと入り組んで、鳥の巣かも知れなかった。鳥の巣を擬した壺か、しっかりした材料で精巧に作られた壺のように硬い鳥の巣か、どちらか違いない。女は、それらを一つ一つ、壁際に間を空けて並べて行く。

　立ち尽くすだけで、床はミシミシと嫌な音を立てた。仕方なしに踏み出すと、床板の凹み方は、女と二人で乗ったのと変わらない。私に背を向ける者は、仕上がった床の一番手前の端に跪いていた。早く行き着きたいが、そこに乗り移

るなら、少し回り込むべきだった。鳥籠が見えてくる。背中を丸くするのは、鳥籠をきつく抱き締めているからだ。長い髪が掛かって顔は分からないが、体付きからして男のようだ。半周して、向き合う所まで来てしまっても、仕上がった床は本当に狭くて、鳥籠が邪魔で乗り移れそうにない。男の額は鳥籠に押し付けられ、正面からでも顔は見難かった。

　私の後ろで張り上げられた女の声の響きは、壁の白い艶の上を、水が滑って行くようだった。その声の流れの先から、輝く尖ったものが、チカチカと音を立てて飛んで来た。受け止めると、三角の手鏡で、鳥籠と同じ細い鎖の輪が繋がっていて、鏡の別の角を、女の指が抓んでいる。投げ付けられたと思ったが、後ろから手渡されただけなのだ。延び上がる女の声の響きが、壁の向こうの縁まで遠ざかって、女との距離を測り損なったようだ。覗き込むと、そこに映るのは、とても私の顔とは認められないが、私の顔を映しているのだから私の顔に違いないと飲み込んで、それを目に焼き付けようとした。跪いていた男が、鳥籠を抱いたまま立ち上がった。鳥籠の中に、砂塗れの小さな本が閉じていた。女の細長い白い腕が伸びて、鳥籠の狭い扉に、スルスルと入って行く。その銀細工のような細い指で、一頁目から丁寧に捲られてゆくと、鳥の巣の絵が次々に現れたが、実はどれも壺かも知れない。鳥籠の中の砂が舞って、殆ど目に見えない砂煙が、私の鼻を擽った。サクランボの匂いを微かに残している。砂で

はなくて、乾いて粉になった鳥の糞だろうか。それなら不作は、鳥の胃袋のせいなのか。このところまるで目にしないが、鳥達は何処へ行ったのか。

　サクランボの匂いに引っ張り出されるように、胸の奥からまた、単調な物音が込み上げてきた。突っ立っているだけなのに、その音はいきなり胸の奥で妙な具合に捩れて、外には現れないが、胸の奥だけを激しく震わせた。それまでよりも、ずっと間近に聞こえて、だから、その捩れている音まで聞き取れるに違いない。硬く重い物同士が、激しく打ち当たって唸りを上げる音だ。ヒトの喉などで真似られる筈もない。真似なくても、側の二人の耳に疾っくに届いているだろう。男が顔を上げた。耐えられないというような顔付きだったが、それは、私が手鏡に覗き込んだ、私のものと認めてしまった顔だった。その顔にそれは見覚えがある。それは青年の顔だったが、池を眺める老人の銅像の、長い髭を落として皺を埋めれば、瓜二つだ。しかしそれが私の顔である筈はなく、そう思うと、男の顔と、手鏡の中の顔が、少しずつゆらゆらと、別の顔立ちへと表情を変えて行った。男が白い床から降り、直ぐに長い髪が掛かって、その顔は隠された。私はホッとして、手鏡を女の胸に押し付け、仕上がった床に飛び乗った。振り返ると、男の足元でも女の足元でも、床板は少しも凹んでいない。私の乗っている白い床だけが、嘲笑うように上下に鋭く震え出した。胸の奥の震えが足まで伝わるにしても、床の仕上げは極表面だけで、裏からの支えは何

もなさそうだ。床が抜ければ下の階まで真っ逆様で、込み上げる物音も容赦なく、飛び退く余裕もなく、竦んだ足で蹲るしかなかった。

　四つん這いで肘を突くと、震えは幾らか鈍くなった。床に小さな三角の穴を見付け、身動き出来ない体を置き去りにでもする積もりで、急いで覗き込んだ。額を床に擦り付けると、下の階の床だけが見えて、少し角度を変えれば、化粧道具の散らばる中の唇の紅の跡も見えた。或いはそれは、上を向いて四角い形に開いた唇の肉そのもので、その暗い奥から、笑いと祈りの綯い交ぜにされた声が、鋭い針のように私の目を狙って突き上がって来ていないだろうか。どっちが男か女か知らないが、池に呑まれた者の片割れが、そこに仰向けになっているようでもある。艶々と白い筈の床が、サクランボを踏み付けたように、赤くヌルヌルと汚れて見えた。それが糊になって背中に貼り付いて、身動きが取れないのではないか。窓側の隅の壁と床の隙間から、蟻の行列が這い出して来ていた。狙いは、赤い結晶を浮き立たせて、ピクピク震える唇でなくて何だろう。その内にその肉を、順々に食い千切って行く蟻達が羨ましくて、耐えられなくなって、目を上げて生唾を飲んだ。

　光りの方から、笑いと祈りを綯い交ぜにした声がする。窓の方に目を向けると、眩しい中に、鋭く動いて重なり合う銀色の煙のような人の姿は、見る見る大きくなって、目が慣れると、子供かも知れない四人の男女が直ぐ側まで来て

いた。泥の付いたサクランボを何粒ずつか握っている。高まる一方の彼らの声に、私の乗っている白い床は、打ち鳴らされる太鼓の皮にように震えて、私は弾き飛ばされた。頭を打ったせいか、単調な物音は、その打った所からも湧き出して、耳の奥に殆ど直に届いた。それは、もう単調ではなく、頭の外から流れ込んでくる音と、頭蓋の内側で鳴る音と、胸の奥から突き上がる音とが混じり合って聞こえ、耳の奥は、そのギザギザした音の並びに、為す術なく噛み付かれるようだ。もうその音だけだった。白い床にそっと乗せた掌が震えないので、その床を共鳴させた声の已んだのが分かった。その床の脇に、四人は並んで跪き、尖らせた口を上に向けて揃えた。彼らの顔の上に女が拳を翳すと、四つの口は大きく開き、女はそこに一枚ずつ、私のポケットから抜き取った硬貨を落とし込んでいった。満足そうに口を閉じた雛鳥のような四人は、口をモグモグさせ、跪くまま白い床を取り囲んで、その一ヶ所にサクランボを盛った。脹ら脛はびしょ濡れで、足は泥だらけだった。私と同じく、池から外の階段を上ってきたに違いない。女は、もう片方の手を、鳥籠の中から引き抜き、首に吊した手鏡を外して私に投げた。自分の顔を見直したくて、私はまたそれを覗こうとした。鳥籠を抱えたままの男が、私の方を向いた。その男の顔と鏡の中の私の顔とを、私に見比べさせたいかのようだ。先ず、男の顔をちゃんと確かめたい。

　破裂音がして、男の足元で、黒く分厚い円盤が、ブンブンと唸って踊った。白い煙が朦々と上がり、男の顔も体も隠した。鳥籠の底が抜け、そこに積もっていた、砂か鳥の糞か分からない粉末が舞い上がるのだ。火山の噴煙のようにジリジリと拡がって来るが、逃げるより、その煙を被らない内に、サクランボを全て口に入れてしまわなければならない。泥も構わず、慌てて頬張った。煙の盛られた陰になっていた三角の穴が現れ、最後の一粒は、そこへ落ちた。煙が肩を掠めたので、その床に突っ伏して、煙を被るしかない体を、また置き去りにでもする積もりで、三角の穴を覗き込んだ。下の床の唇の辺りは、蟻が集って真っ黒で、紅色は少ししか見えない。紅色ではなく、落ちたサクランボの色か。それもまた、黒い中に埋もれた。額を擦り付けている床が唸るのは、額から、私の中の物音が伝わるからだ。額ばかりか目の周りまでヒリヒリしたが、今、頭を上げても、目の前は真っ白だ。煙の通り過ぎる頃合いを計った。私の中では音はバラバラでも、額に噛み付く床の唸りは、単調そのものだった。顔を上げると、その唸りは、耳の奥まで染み通っていて、そこでは、混ざり合って聞こえた物音が、単調な音に直されて聞き取れた。ダラダラと泥の味の涎を垂らしていた。

　涎が透き通って、皮の柔らかくなったサクランボを、口の中で丸ごと圧し潰した。唇の肉の味ではないだろうか。何時何処で、そんな味を覚えたのか。噛

み砕く程、味は濃くなる。底が抜けて歪んだ格子だけになった鳥籠に、四人が競うように潜り込んでいた。四人とも殆ど上半身が籠の中で、窮屈で動きが取れず、ゴロゴロと転げ回った。天辺の鎖の輪が振り回され、ベニヤの床を鞭のように打つが、その音は聞こえない。格子の軋む音がひどいからで、私の中の物音が単調に聞き直されて出来た隙間を、格子の軋む音が全て埋めていた。側で女が、本を手に取って、息を吹き掛けたり指で撫でたりして、根気よく白い粉を払っている。私は、鏡をなくしたのに気付いた。代わりにでもないが、紙を一枚拾った。私が部屋に入る前に手放した、池に沈んだ祈祷書の破れた頁で、数字ばかりが並んでいる。それ程、皺クチャでもない。これを拾った四人の内の誰かが、皺を伸ばしたのかも知れない。口の中のサクランボを全て、喉に押し込んだ。込み上げる物音は、少しも変わらなかった。

「数字を使えるんですか。」と、女が言った。その冷たい一声で、鳥籠の軋む音は何処かに吹き飛んだ。それから女は、紙切れの縁を指で軽く撥ねた。裏返した頁には、小さな文字が何列か、横に並んでいた。女は、粉を払い終わった本の一頁目を開き、難しい節を付けて、祈りの文句を唱え始めた。鳥の巣か壺の絵ばかりの筈だが、そこに載っている章句を読み上げるかのようで、どうやらそれは、私の手元の紙の最初の一行らしい。文字は読めないが、文字の上下に纏わり付いている節回しを指定する記号を追うと、女の声の抑揚に巧く重

なる。女が頁を捲る度に、私の紙では一行ずつ下がってゆく。そうして一番下の行まで下りたが、女の本はまだ途中だった。紙から目を上げると、女の声に従って、自ずから節回しの記号が宙に並んだ。女が最後の頁まで辿り着いて本を閉じた時には、記号は、順に列になって、私の頭の中に正確に刻まれていた。数字の頁を表に向け、その記号で数字を読もうとするが、歯が立たない。女は、「数字が好きなのね。」と独り言のように呟いて、その紙を取り上げ、替わりに絵本をこちら渡し、腰に手を回して、私を長い壁の奥の端の方へ導いた。

壁の引き延ばされた白い艶の中に、女と私の姿が段々と形を取ってゆくが、後ろの窓が明る過ぎて、痩せた白い影が凭れ合うようでしかない。壁際の端から端まで、鳥の巣か壺かどちらかである物が、等間隔に並べられている。壁の端まで行き着いて、その一番端の、鳥の巣か壺かどちらかである物を見下ろした。中が覗けても、暗いだけだ。絵本の一頁目を開くと、それとそっくりの絵が出て来て、女に向かって微笑み掛けたくもなったが、絵の周りに幾ら目を凝らしても、白いだけで、何の説明も、女が読み上げたらしい祈りの文句も見当たらず、女に顔を向けるとしたら、それへの落胆を、微笑みの中にどの程度混ぜ込むべきか決めかねて、絵と実物に違いでもないか探しながら、女が何かするのを待った。女は、私の背中越しに本の頁を捲った。私の足は独りでに、隣の、鳥の巣か壺かどちらかである物に向かった。それも絵とそっくりだった。

また女が頁を捲る。それを繰り返しながら、壁の真ん中辺りまで進んだ時、突然、絵と実物の僅かな違いが、実物の表面に湧き出すように次々に見付かって、一々目に留めても置けなかった。単調に聞き取れていた私の中の物音が、単調でなくなった。絵を見直すと、頭の中に刻まれている記号の一番上の列が、実際の節回しとなって動き出して、開いている頁の絵の色と形から、或る章句を浮かび上がらせた。つまり絵は、その一連の章句を書き記した文字であり、私はそれを読み取ったのだった。実物に向かって、それを祈る調子で唱えれば、止め処なく見付かる実物との違いも、鎮まるのかも知れない。私に祈りが唱えられるだろうか。そう思うと、物音とは別の物が込み上がってきて、形をなくしたサクランボを一粒分くらい吐いた。それは、そのまま壺に落ちた。

　壺に違いなかった。女の笑い声が、目の前の白い壁に跳ね返る。差し出された紙切れで、口の周りを拭った。汚れが数字の頁に染みると、急に色を濃くして殆ど紅色になった。絵にそっくりの文字は、何処もかも実物の壺と違っていたが、鳥の巣に見えて来る訳でもない。見付かる違いは、どれも本当に僅かなもので、全体の印象には係わらない。却って違いが溢れる程、間違いなく壺を写したもののようでもあるが、その壺は鳥の巣にそっくりで、違いは、その絵にそっくりの文字を、壺か鳥の巣か曖昧にしておくための工夫なのかも知れない。ただ実物の方だけが、はっきり壺に見えていて、その違いこそが、ただ鳥

の巣にそっくりな壷の絵ではなく、そのように見せ掛けた文字としての働きをそこに加えるようでもある。その祈りの文句が唱えられれば、その声に曝される実物の方も、鳥の巣を象った壷に見せ掛けた文字になるのではないか。その文字を私は、何とかして見てみたいのだった。目の前にある触れられる物を文字として読み取れるなら、絵文字の比ではない。

女が、後ろからまた頁を繰った。足は、否応なく隣の壷に進む。頭の中の二列目の節回しの記号が踊り出し、その壷に私は、胃の中の続きを吐いた。女の腕は、頁を捲る機械のように正確に動いて、私は、どの壷も飛ばさずに、順々にサクランボを吐いて行った。壁の端まで来ると、頭の中の記号も、ぴったり一番下の列だった。最後の壷だけになっても、私はまだ、壷に向かって祈りの声を上げようとしなければならなかった。そして、最後のサクランボを吐いた。胃は、斜めに引き絞られる管のように縮み果てて、何も受け付けそうにない。そうして吐くものがなくなったと分かると、本の最後の頁に描かれているのは、どう見ても鳥の巣だった。耳の奥の単調な唸りが戻り、私の中の物音も、呆気ない程にまた単調に聞き取れた。濃いサクランボの匂いは、溜息のような長い女の吐く息だった。私の喉の奥からは、地中深くから掘り出されたばかりの石の匂いが立ち上った。紙の上の数字は、ツンと胃液を匂わせた紅色に沈んで読めない。女の首に吊された三角の手鏡が横を向き、水のような艶だけを私に見

せた。こちらに向けたいが、両手は塞がっている。汚れた紙切れを本に挟むのも躊躇われた。体の向きを変えれば良いのだが、壺に対して横を向けなかった。汚れてはいるが、紙切れを女に返そうか。

その紅色の中に、黒い数字がポツポツと現れてきた。紙に染みていたインクが胃液に剥がされて、浮き上がって来るらしい。その浮き上がる順に並べて、或る規則に従って読めば、数字はきっと祈りの文句に変わりそうで、息を凝らした。微かな隙間風が紙の縁を揺らすのさえ、ひどく目障りだ。紙の微かな震えで、数字は、溺れる蟻のように藻掻いた。暫くすると、インクは、浮き上がった順に、紅色の表面に黒い艶を滲ませて薄く拡がり、数字はどれも溶けて流れた。その一つ一つ違う流れて行った形を、私は忘れられなかった。節回しの記号のように、独りでに頭に刻まれはしないが、その形の記憶を辿るだけで、順に数字は並ぶだろう。女が、壁に沿って一人で戻って行く。する事をなくしてか、後ろ姿は肩を落とし、自らが並べた壺にも顔を向けなかった。壁の真ん中辺りで足を止め、やっと壁の方を向いて、首から外した手鏡を壁に掛けた。その動作もまた機械に似ている。

最後の頁の絵が、鳥の巣ではなく壺に見えていた。絵に描かれた壺の底には、吐かれて干涸らびたサクランボが固くこびり付き、芳香か悪臭か分からない、嗅いだ事もない匂いが立ち上ってくるようだが、或いはそれは、地下深くの石

の匂いに似ていないだろうか。大きく吐いた息の匂いを嗅いでみると、確かに芳香か悪臭か決めかねた。目の前の実物が、壺ではなく鳥の巣だった。胃液に溶けた果肉が、その底から床板へ浸み出ている。絵は、祈りの文句を記す文字ではなくなっていた。もう使い途もないのに、頭の中の節回しの記号だけは、石に刻まれたかのようだった。紙切れの紅色の表面は、流れたインクに覆い尽くされ、黒い膜を張っている。僅かに向きを変える一瞬、壁の白い艶を映すのか、水の色を表した。数字の群れが、色の中を横切った。目に近付けると、突然それは、眩しい銀色に輝いた。窓からの光りを集めるのだ。それを鳥の巣の上に翳した。反射した光りが巣の上の縁を舐め、巣の中を覗くと、光りは底に届いている。サクランボの千切れた皮か溶け損なった果肉かは分からないが、襞の形の赤い塊が、トゲトゲした上に、突き刺さるように残っていて、切り取られた耳朶に見えた。血塗れでも、まだ何かを聞き取ろうと、真上を振り仰ぐように突き立っている。私は、数字を失った事を思い知った。その耳に聞かせる祈りを唱えるための手立ては尽きていた。石に刻まれるようであった筈の記号の列も、水に流れるようにぼやけ始めた。

いや、真っ赤な耳は、地面の奥深くからの震動を聞き取っていて、耳の穴の奥から、その聞き取った単調な音を、噴き上げているに違いない。耳の周りも微かに震え、その音を溜め込むに、鳥の巣は実に適しているのだ。その響きが、

段々と鳥の巣を満たして溢れ、私の耳にも届いた。口の中に血の味がした。口いっぱいのサクランボを圧し潰した時、付いていた泥が、口の中を擦ったらしい。血に泥の味が混じった。胸の底の物音が已み、頭の外からの音も、頭蓋の内側で鳴っていた音も、綺麗に消えていた。耳の奥に染み通る、単調な唸りだけが残った。私の胸の奥は、もう地面の奥と一繋がりではなくなっていた。顔を上げ、舌ビラを口の中で掻き回し、血と最後の泥の混じった唾を、最後の頁の上に吐いて絵本をパチンと閉じた。その音は、壁を跳ね返って辺りに響いた。見回すと、私独りで、鳥籠も見当たらない。窓に相変わらず強い陽は差していたが、何処か赤味を含んで少しも眩しくない。その光りの方に、紅色の紙切れを放った。光りの奥で風が揺らぎ、濃い紅色の表面を、陽を受けた水のように銀色に輝かせ、紙切れは攫われていった。眩しくないのは、硝子を通さないせいではないか。開けっ放しの窓を抜けた紙切れが、ヒラヒラと池の上を舞う。その風の中の見えない姿を、何処までも追って行けそうだが、それが水に触れない内に目を逸らした。絵本を脇腹の辺りに差し込み、壁に沿って、女と同じように壁際を戻った。

　やはり壁の真ん中辺りで、足は止まる。壁に掛けられた三角の手鏡の中は、真っ青な輝き一色だったが、目を凝らすと、鏡の表面を薄く覆う黒光りが、それを輝かせていると分かった。見る角度を僅かに変えるだけで、その輝きは、

様々に揺れて渦にもなりそうだった。数字の、紅色の表面で溶けて流れた時の形が次々に思い出され、鏡の中にその思い出された通りの形が順に現れた。それは、池に沈んだ紙切れから溶けて出た、数字の群れの、池の底を泳ぎ回る姿に違いなかった。目を逸らした積もりでも、向こうから、私の前に回り込んで来るのだ。指を伸ばすと、そこに触れるものはなかった。そこは、壁に空いた三角の穴だった。女は、鏡を壁に掛けたのではなく、その同じ三角の形の穴に鏡を嵌め込もうとしたのだ。そして、女の手を離れた鏡は、壁の向こうに落ちたに違いない。覗き込むと、真っ青なのは、駅と森の上の高い空だった。頭の中の、ぼやけてすっかり形を失った節回しの記号が、ズキズキした痛みを滲ませた。吐かれたサクランボの固くこびり付いた、壺の底の匂いを嗅いだ。壁に吹き掛かる私の息だった。

屋根のない短いプラットフォームは、陽と陰に斜めに断ち切られていた。その境目に、抜けた底を元に直した鳥籠が置かれ、その傍らに男が立っている。その陽の光りが、男の下腹から太腿に掛けてを斜めに断ち切って、胴体から頭の天辺までを輝かせた。一歩踏み出せば、その姿は、強い陽差しに紛れてしまいそうだ。男は、銀色を滲ませた長い髪を掻き上げた。その時だけこちらに向けられた顔は、青年にしては老けて見えた。光の中を、女が歩み寄って行く。首に吊した三角の手鏡が、薄い胸の上で揺れてチカチカと輝いた。男が少し立つ位

置を変え、女は、それと向き合って、私に背中を見せて立ち止まった。陽の光りは、女の腰を斜めに断ち、下半身を陰に隠した。黒い髪の左端で、光る筋が舞った。足元の陰の中に、そこだけ青を映して落ちている三角の欠片を、女が拾って男に渡すと、男も背を向けた。その背中に、直ぐに女の背中が重なって、二人は、青い列車に向かい、ドアに近付いた所で、息を合わせたように鳥籠の方を振り返った。女の横顔の輪郭を縁取って、その直ぐ奥に男の横顔が滲むように重なり、二つの顔が一つになる一瞬、聞き飽きた大きな音が鳴って、向き直った二人は、列車に乗り込んだ。物音はまた、当たり前のように繰り返された。消えた横顔を甦らせようにも何の特徴も浮かばず、自ずとそこに、私に似た顔が宛われるが、その顔にしても、女に渡された手鏡に覗いた、私である筈の顔と、同じでもあり別でもありそうなはっきりしない顔で、それをはっきりさせようと、知らず知らず、私に似て見えてしまうのかも知れない。その顔を打ち消してやり直す程、愈愈それは私に似て、遂には私そっくりの宙に浮いた仮面のようになって、それがどう私そっくりなのかも良く分からずに、どうにも出来なくなった。それを打ち払ったのは、陰からいきなり飛び出した銀色の人の動きだった。子供かも知れない瘦せた四人の男女が、鳥籠に四方から抱き付いて、面白そうに独楽のように回った。また格子の軋む音を立てているだろうが、四人は、それぞれ好き勝手にのべつ笑っているようで、音を真似ている

とは見えない。籠の底の砂は綺麗に落とされ、その銀色の鈍い艶の表面に、硬貨に見られたのと同じ鳥の姿が、細い線で彫られている。鳥籠はとても軽そうで、回る内に浮力が付いて、四人諸共、今にも宙に浮きそうだった。手鏡をなくした替わりに、私は、硬い杖が欲しくなった。

　線路を挟んだプラットフォームの向かい側の大きな桜の木が、その太い幹を、列車の直ぐ前に斜めにクネクネと張り出している。その横で、私の仲間だった連中が、縄で縛った大きな石を、力を合わせて振り子のように振って、桜の幹に叩き付けている。枝葉は揺れても、硬そうな幹はビクともせず、ただ木と石の打ち当たる単調な音が、森に囲われた駅の構内に響き渡るだけだ。その幹の下の線路の脇に、頭を割られた三人が、俯せに寝かされていた。穴だらけの真っ青な脹ら脛が、六本揃って、冷たそうな敷石の上に、上を向いて並んでいる。階段の踊り場で私と祈祷書を巡って争った者も、戻って二人に加わったのだ。確か「サクランボ泥棒」を呼び慣わす、一文字で表される言葉があった筈だ。無性に死への連想を駆り立てる穢らわしい響きを持っていて、それが、ズキズキする頭の中で鳴らないのを祈った。（二〇〇三年二月七日）

稜線、その他

著者　u_

© 2003 u_　但シ死後ノ著作権ハ放棄スル。

Independently published